

農い は、危えの。

坂井 ぢやから堂守が言ふ通り、お前たち何も強ひて上るには及ばんぢやらう。俗にも言ふぞ、障らぬ神に祟なしぢや、さあ〜、歸れ、歸れ。

農は すんだら、はあ、お喧ましかんべいで、私等退くだ。

坂井 退け、退け、彌次馬ども。これ、障らぬ神に祟りなしぢや。(と一段おりの。)

農ほ 旦那様はどうなさりますだね。

坂井 む、己か。

農い ひやあ、人間一匹生死が分らねえだよ、なう、佐介、馬右衛門、皆の衆。

農ろ 作藏が云ふ通りでござえます。此のお山さ、下から運ばねえぢや、飲水も食物もござりま

しねえ。堂守どのへ、かはる〜村から運ぶでござりますよ。はあ、誰も上つちやなんねえで

は、坊様が干ばしになんべいでねえかね。

農に 然うだよ、然うだよ。

農ほ すんならとつて、これ、上つてなんねえ、屹と怪我過失があるてえば、もの、對手が坊様

だけに不氣味でござえまして、われがと真先に出るものさ、ありましねえだ。

農ろ 坊様だけに。それに、はい、此の不動様さ、罰利生あらたかでござえましてね、鯛をし

やぶつた口でござえますの、娘ッこの尻さ捻つた手ぢやよことの、はい、媢々……はい、坂井 これ、これ、何事かい。

農は いんえ、はい、野良出合にや限りましねえ。

坂井 こら、こら何事だ、と云ふんぢやわ。

農に へ、へ、へ、不調法申しましてござえます。

農い あやまつてけぢかる、瓢箪鯨め、は、は、は、は、。

坂井 それが何うしたんぢや。あ、ん？

農ろ はい、不淨な身體で参りやして、怪我をしたものもござえますで、其のお守をして居さつ

しやる坊様が言ふことだで、うつかりとは参られましねえ。さ。

農い 打棄つて置けば、はい、少え綺麗な坊様の、木伊乃さ出来るでござります。

農に あたまから、乾物と相場さ極りますれば、まだ仔細ねえでござえますが、何か、間違さあ

つて、恐しく腹あ立つせえて、血だらけで、はい、巖を駈け上つたツ切ぢやと、風説するでござ

ぜえますで。

愛 農い ほてつばらぢや。食はねえでも干物にはなんねえで、疝癪玉に押固まる。物騒な、はい爆  
火 裂弾、地雷火でござえます。



農へ 器械水雷ちゆうが、なほ豪えとよ。

農ほ 水柱さ中天に躍り上るだとな。

農と …………… (だんまりで) ヅドン (とそこへ握拳の鐵砲をつき出す奴あり。)

坂井 (苦りきつてあたりをぐるぐる……………)

農ろ 何時、火の玉になつてころがり出すか、つなみになつて推して來るか、屋根も根太も此上からでは、一村稗時ひとむらひときのやうだで堪りましねえ。

農に これではい、唐突たしなげに法螺ほらの貝かひでも吹かれた日には、村中むらぢゆうひつくりかへる騒さわぎだでね。

農は 其處そこで、はい、旦那様だんなさまにお願ねがえ申ますでござります。

坂井 當前あたりにまへだ。蝸牛まいくつぶろが引込ひきこんだつて、角出つのだせ、めうくと小兒こどもが言いふわ。打棄うつちやつて置おかれるか。

本職ほんしよくは無論見届けんとどるんぢや。何を馬鹿ばかな。注意ちういが届とどけば臆病おくびやうと思おもふさうだ。(上りかけて又ためらふ)や、山の上やまのうへは眞暗まつくらぢやな。

農は 豪えらく茂しげつたでござります。

坂井 樹きばかりぢやない、雲くもも暗くらい。フム、四邊あたりには、一面銚子いちめんてうしの海うみまで見渡みわたすばかり青田あをたとおなじ空そらの色いろぢやが、此この山やまばかりは、透すいて見みえる日影ひかげもない。白日ひるが闇やみぢや、仔細しさいがあらう、棄すてては置おけんぞ。

農い さあ、巡查だんな様が上あらつしやる。お供ともをせい、お供ともをせい。

農ろ 續つけ、續つけ、合點あつてんだ。

坂井 鳴なるぞ、鳴なるぞ。(と立たちすくんで)あれ、ぐわう、といふわ。やあ、風かせだ、風かせだ。

農い 構かまはねえ、旦那だんな、さあ上のぼらつせえまし。

坂井 これ、わい／＼と騒さわ々さしい。こらく誰だれだ。其その大肌おほはだぢ脱だつの、顛卷はぢまきをして、天秤てんびん棒ぼうを持もち出だいたは。

農ろ 何なに、これ、まさかの時ときは打拂ひつぱたくだよ。

坂井 黙だまれ、喧嘩けんかをしに行くゆのぢやない。強盜がうたうが籠こもつたすぢでもない。第一だいいち、本職ほんしよくの面前めんぜんで、肌はだ脱だつは何事なにことかい。

農は それ、顛卷はぢまきを取とらうて。膚はださ突込つぎこまねえか、べらぼうづらな。

農に なんて言いふお前まへら、其その鍬くわ持もつてどうするだ。

農ほ おらあ何なに、野良のらから直すぐに來きたからよ。

坂井 む、誰だれか鎌かまを今懷中いまふところへ隠かくしたな、馬鹿ばか々くしい、やあく旗はたを掉かつてる奴やつがある。あ、情なさけない彌次馬やじうまどもだ。

火 農ろ へい、皆みんなハア神妙しんめうにしたですが、さあ、急いそいで上のぼらつせえまし。



坂井 上るぞ、さあ、続け、ぢやが、待て〜、（と時計をながめて凝と立ってかんがへる。）

農は 旦那、もし、何うさつせえたね。

坂井 汽車の時間ぢや。本職は一體停車場の係りぢやからな、發着には缺かされん。

農に 上りも下りも、まだ、はい、ちくと間がござります。

坂井 む、されば、どれ、（と踏み出さうとする、どつと風がくる。）はア吹くぞ、これは酷い。面をも向くべからずぢや、蒼苔が剥けて飛ぶわ。待て待て、（といつて手帳を出して）いや、急いで能くは検べんぢやつたが、何かい、此の建札は、こりや何時からぢやな。

農い はや、いつの何時からぼツ立てたか知りましねえが、村さ觸れ出したのは昨日の晝過からでござります。

坂井 うむ。（とかきとめ）で、最初發見をしたは誰ぢや。（とけろり鉛筆をなめて居る。）

農い それは、はい、私が知つとるでござります。荒物屋の與次許の婆様で。

坂井 は、荒物屋與次老母ぢやな。よし、よし、そこでぢやが、これ與次老母とあると、き様たちも同然、此處に書いた此の字が讀めまい。唯札が建つたとばかりでは、開帳やら、説教やら、相分らんではないか。爾時はづか〜構はず上つたか、上つて怪我はなかつたか。これ明白に申せ、間違ふと處分すツぞ。

農ろ ひやあ、

農い 豪え、お巡査様は見通した。はあ、魂消たね。

農は 御意にござります。與次が婆様には讀めましねえ。最初は、はい、志す佛様の日で、牡丹餅さ拵えたで、御坊様におすそわけするぢや云うて出掛けたでござえます。見馴れねえ此の建札さ見付けたがね、はい、旦那様お見通した、縦にも横にも字が見えるぢやござりましねえ。丁ど、はい、桂館の浴衣さ着た書生さんの客さ一人見て居さつせえたで、何でござります、お開帳か、お説教かと、聞いたら、以ての外の顔をさつせえて、開帳だの、説教だの、お婆さん、極樂に縁のある事ぢやない。お山の上は地獄になつたぞ。魔界に變じた。一足も上つちやならぬ。何時何時、火柱が噴出して、村中の屋根を轉がらうやら、巖が破れて飛ばうやら、硫黄の海嘯が出ようやら、危い。早く歸りなさい、村の人も一同覺悟をするが可い。己なんぞ命がけで此處さ立つて見て居るだ、と突拍子もなく言はれたもんだで、牡丹餅の包さ押放り出して、眞蒼になつて歸つて來たで、それがはい、はじまりでござります。

坂井 魅まれものめが、牡丹餅を食はれたんぢや。いや、しかし手續きは分つたぞ。其處でぢや、此の石段は、下から凡そ絶頂まで幾段あるな。

火 愛  
農に 一ツ一ツ、はい、勘定したこと無えでござりますが、何でもはあ、上まで五段に切れて居



つて、榮螺がまはるやうでござえまして、雑と五百段さあるちうでござえますよ。

坂井 五百段、ふむ略ぢやな、約、五百段。(とまた手帳にとめる)さて、上の寺は何といふかい。

農 何寺ちうでござえますか、なあ、これい。

農 然うよなあ、何寺ちうか分らねえだが、皆はい、鳴戸の不動様といふでござえます。

坂井 鳴戸か。村の名と一ツぢやな。山號は何かい、それ、山號、上野は、東叡山、芝、増上寺

は三縁山、中山は妙法山ぢや。

農は それは、はい、何ちうか存じましねえ。

坂井 待て、待て、此處に書いてある——新火山、ふむ、(と眉をひそめる)新しい火の山は、奇

怪ぢやぞ。

農 新らしい火の山と書いたかね、はあ、魂消た。

農は そんなだから、旦那様、疾く上つて見て下せえまし、坊様が火でも放けて、村へ煽ぎおろし

ては、たつた一くべでござえます。

農と それこそ火の弾さころがるだ。

農に 破裂弾だね。

農 水雷よ。

坂井 え、騒々しい逆上がるわ。

農い 見て下せえまし、お願だ。

農 さら、上らつせえまし。

坂井 やあ、吹きおろす、吹きあげる、プツプツ砂埃で、こりや不可んわ。

農と ツドン!

農に 呐喊ぢや! (とまた旗をふりたてる。)

坂井 呀、あの音は上り汽車ぢや。こりやならんぞ。村のもの、停車場へ行かねばならん、山の

詮議は追つての事ぢや。(と一散に飛びおる。)

(轟々——と汽車の音。)

幸木 そら、山崩れだ。

下江 大地震。

(と人ごみに交つた、幸木、下江、おだんだを踏んで呼ばはり叫ぶと、わつといつて百姓一

同、なだれをうつて——退場す。)

愛 下江 は、は、は、  
火 幸木 は、は、は、



下江 罷りいでたるは、此のあたりに湯治いたす、下江造と申す上手の繪師でござる。それがし一人の、醫者ながら畫を習ふものを扶持してござる。チト思ふ仔細のあつて、呼び出し申しつける儀がござる、やい、太郎冠者あるか。

幸木 は——つ。

下江 居たか。

幸木 お前に。

下江 念なう早かつた。汝呼び出す別の事でない。それがしが逗留いたす旅籠屋の庭一ツ彼方に、鳴戸山波切不動堂の堂守、なにがしの若僧、世を怨み人を怨むことあるによつて、此なる絶壁に立籠り、一方口の石段に禁札を打つたわ、其の方も聞き傳へ存じ居らう、何とぢや。

幸木 如何にも承り及んでござる。身命を擲ち、佛縁を斷つて懸想いたした、お雪どのと申すを、都方の紳士に奪はれ、あまつさへ萬人の中に打擲をされたに因つて、腹立たしやの、怨めしやの、人も世も焼き滅さうと呪うて、黒雲の梢に躍り上り、やあく里人、此の顔な見そ、活きながら鬼になつた、と申す心にや、かまへて、此なる山に上るな、と禁札を打たれてござる。

下江 其の通りぢや、さて太郎冠者。

幸木 え、え。

下江 申つくるは餘の儀でない。それがしが朋輩に、白川夜船どの。日の昨は件の建札の處に立つて、心なき里人の推して上らうと致すを、存分におどして追ひかへされた。承れ、其方は申すまでもない、白川殿も、それがしも、前生の報とあつて、とかく女子には縁がおりない。

幸木 なか／＼のことでござる。

下江 いやさ、神妙に能う聞けい。

幸木 はッ。

下江 其の方も存する通り、鬼瓦に似た女房も、おろし大根の妻も出來ぬに因つて、堂守が心の裡不便なわ。

幸木 なか／＼の事でござる。

下江 恚やうに申すにつけても、身につまされて悲いわやい、はッあ。

幸木 や、これはお泣きなされますか。

下江 おい、やい、手放して泣くぞ。はッあ。

愛 幸木 これは、いかなこと。頼うだお方がお泣きなされる。それがしも泣かずばなるまい、さらば泣かう、わあ。



下江 さては、太郎冠者も泣くさうな、これは日頃ひごろにない、優しいことぢや、え、太郎冠者、そ  
ちも泣くか。

幸木 悲しやく、わあ。

下江 やい、涙をとめい。さて、白川殿しらかはどのは夜にかけて、建札たてふだの番ばんをなされ、以つての外ほか草くさ  
臥ひれたとあつて休んで居らる。今日こんにちた、これよりそれがしが罷り代かへらうと存ぞんずるが、何なんとあ  
らう。

幸木 なかくの事、一段とようござりましょ。

下江 さらば先づ、其の方ほう、方々はうくを觸ふれて來い。

幸木 畏かしこまつてござる。

下江 しばらく待たしめ。

幸木 はあ。

下江 それに就いて、白川殿しらかはどのが申まをされた歌うたがおりやる。

幸木 さても御殊勝ごしゆしょうな。白川殿しらかはどのは歌うたよみでおいでなされます。

下江 其方そのほう、その歌うたをうたうて觸ふれい。今いまそれがしが聞きかすによつて、よう覺おぼえよ。

幸木 畏かしこまつてござる。

下江 よしの山やま、峰みねの白雪しらゆきふみわけて、入りにし人ひとのあとそこひしき！

幸木 いや、それは古いにしへの歌うたでござる。

下江 控ひかへいく、あとを聞きけい。

やよ里人さとひとよ戀こひならで、

よしなきあとを訪とふなかれ。

雲くものみどりの峰みね高く、

巖いはに棄すてし黒髪くろかみや、

木この下閣したやくは雫しづくして、

墨染すみぞめぬ濡ぬる、おもひあり。

螢火ほたるび、鬼火おにび、むさ、びの

吐つく息いき蒼あをく燃もゆるにも、

怨うらみはとけじ山深雪やまみゆき、

里人さとひとに路みちあらせむや。

迎むかへば迎むかへ、百千筋ももぢすぢ、

調布たつくる蜘蛛くもの絲いとかけて、



妻なき鬼の犠牲とせむ。  
やよ、里人よ心して  
怪しき闇に入るなかれ。  
さても野衾、山の端に  
出汐の月を立蔽ひ、  
魑魅魍魎の丈伸びて、  
昇る日影を遮らば、  
常世の闇よ、春來とも  
花も霞も見えず、たゞ  
白妙寒く、ながめなむ。  
あはれと思へ、時鳥、  
翼をかへす峰の堂、  
神の御前の姿見に、  
映るは人の倂か。  
葎の宿に露結ぶ、

臥猪の床はありときけど、  
手枕すべき萩もなく、  
鬼の姿に袖ひぢて、  
骸は霜とならむのみ。  
やよ、里人よ憐みて  
淺ましの墓見るなかれ。  
喃引何と、覺えたか。  
幸木 したりく、唯一聲で覺えてござる。  
下江 然らば觸れい、  
幸木 畏つてござる。  
(下江——退場。)  
幸木 これは、いかなこと、女子に嫌はれた山法師をあはれとござつて、同じ思ひに泣かる、は  
殊勝なれど、女房も妻もない身につまさるゝとあつて、前生の約束とおしやる。前生の約束、  
前生の約束とはやい、はゝ、はゝ、はゝ、いや、まことに、白川殿も頼うだお方も、歌をよまず、  
繪さへ描かしませずば、はしたものはありつかれうに、それを知らいで不便でござる。はあ



あ、いや歌うたうて觸れいとあつたが、何として覺える事で。又覺えて唱うたらば、醫者が祭文を讀むと申さう。とかうは建札の表通りぢや、よみも歌もない。掟——いたされた、禁札の旨違へまいぞ。方々其の分心得候へ、心得候へ、やあ引（と落着き澄して——退場。）

（其のあとへ唯一人杖をつきながら）

桃井時員、登場。

（いづく／＼と石段にかゝり、無言で立直つて、禁札のおもてをながめる。）

桃井 新火山は亂暴だ——立石秋哉——本名は思ひ切つた事を。困つた男だ。（と苦笑してあたりをみまはし）む、（とうなづいて空を見込み、またいうぜんとステッキをついて上る。）

お瀧はたくと出る。

お瀧 （しやがんで下から見あげ、木立の中をすかして見て、すつと立つて小手下まねく。）

權九郎歛の柄を引つかついで、

權九 姉え、首尾は。

お瀧 古風な眞似をおしでない。親方首尾は——なんてのに、つひぞ、首尾よくいつた験はないぢやないか。今ね、うまくいつたんだよ。今度の騒ぎで、かみさんがまた恐しく神經を起したからね。其の氣もやすめて遣りたし、村でも大層苦勞にして居るけれど、誰も薄氣味を悪がつ

て、山へ上るものはありませんから、此處は旦那様どうぞ一ツ、是非貴客皆のもの迷をおはらし遊ばして、なんて、あの、お前、理學士ツて肩書に對しても、金縁の目金につけても、厭と言へないやうに持込んで、たうとう針の山へ追ひ上げたあね。

だからお前、先刻話した通り、これから上つて、氣の付かないやうに、手でも、脛でも、打墊いて、大怪我をさしてお遣り。

權九 荒療治だね、姉え。

お瀧 あ、些と荒いよ、そのかはり能く利くよ。

權九 何に利くだらう。

お瀧 知れたことさ、お前、皆の懷中工合だね。

權九 懷中工合なら、私あ、いつか中から然う云ふんだけれど、いきなり娘ツ兒を胴卷へ捻ぢ込むが可いぢやねえか。お雪さんの眞白な膚をお前、大なお紙幣にしようと言ふのに、理學士の向う脛をかツぱらつたつて、楮の木ぢやあるめえし、ぺらくの紙になりやしねえ。仕様がねえぢやねえかね、まはりくどいぢやねえかね。

愛 火 意氣お言ひな。あの娘はね、先には玄禎さんのものだったらう、其の時なら、直ぐにこなし、お茶が買へるよ。それがお前、三百圓で、銀爺のものになつたんだ。可いかい、そら、



些と對手が面倒だから、まあ、一度お山の坊主のものにして、其の瘦腕をひん捻つて、此方もぎ取らうとしたんだね、すると不可すさ。

権九 番毎頂いてら。

お瀧 あゝ、あればかりは見込み違ひさ。豫て銀藏は信心してるし、坊さまにして置くのは惜いものだ、立派な方を、なんて言つてるんだから、おいそれと承知をしよう。だがね、あゝ、見えて、内の繁昌は八九分まで、お雪が美いお庇だからね、いくら銀爺が、あんな氣象でも年が年だし、慾を知らない事はあるまいから、尋常ぢや不可まい。

それには、渡世の種の桂鏡泉を埋め了ふ、と威かすが可からう。對手が坊主だからお誂へだ、と思つて、吹つかけたのは、私の目違ひ。

わるくつむじを曲げやがつてさ、ぶうんと呻るやうに頭を一ツ掉つたちやあないか。

権九 然うだとね。

お瀧 了つた、些と勘ぐり過ぎた。チョツ可いや、其術でいかずば、慪う来よう。坊さんが阿魔に首ツ丈なのはあはれなくらるだし、お雪だつてまんざらぢやない、母様の命日だわ、おかみさんの病氣の治るお参りだわ、何のてつちや一寸々々お堂へ行くからね。手さへ握らせりや一ツ骨だらう。仕事も汽車に綱ツ曳きた、遁がして了つて、途中でふんだくるが上分別だ、と思

つたから、兩方をそゝのかして、そら、四阿屋で逢はしたらう。もうく坊さんが口説いたこと、聞いて居ても油でうたるやうだつたから、大概な石なら、とろけさうだつたに、また行けずさ。

権九 そらね、番ごと頂くんた。

お瀧 一言もなしさ、ほんたうに油断もすきもなりやしない。勿論、銀爺が合點で、お民の奴が一生懸命、お雪さんを出世させるって理學士を取持つたことは知らないぢやなかつたが、何の赤襟だもの、甘いも酸ばいも知るものか。館ころでも鮎でも、當がつて遣りや頼張るだらう。お飯つぶを縦に食ふのも人の見る前ばつかりだ、とたかを括つたが通りさ。私は旦那様があるなんて、何處で何時の間に覺えたか、色氣はお錢になるけれど、女の操は金にやならない。ねえ、お前、迎もいけさうにもないからね、事によつたらすぐに田圃道を追つ駈けて、東金あたりで巻きあげてさ、直ぐに其の足で夜の内に銚子あたりまで代物をこかすつもりで、御無沙汰見舞、何とか言つて、玄禎さんもお前を連れて、内證へ遊びに来て、様子をうかがつて居たつ

けよ、喚き立てて来てもらつて、焼け半分に、あの坊主を疊んだのさ。其もわけなしには撲りやしない、あのくらるな目にあはせて置けば、どんなに口惜しいか、怨めしいか知れないから、腹立ちまぎれに火も放けようし、方人が出来りや喧嘩もしようし、首



を縊つたつて化けて出ます。何やら女に惚れ方が執念深さうな坊主だから、いつれ何事かはじまるだらう。そしたら其の混雑紛れに、事をしようといふ謀だつたのさ。

権九 混雑紛れに事をする、とんと火事場盗賊だね。一昨年何處か女郎屋が焼けたつけ、お前さんが火を放けたんだね。

お瀧 同じ事でも焼打とおいひな、軍師に向つて推參だよ。

権九 其の軍師が頂くからね、坊主の口惜坊は當り過ぎて驚きましたね。私あ魂消たね、足の尖で、お前さん、蹴つけて巖が打かけて崩れたぢやねえか。一念でものは恐しい。あれだつて、何ぢやねえか、坊主が腹を立てなかつたら變なもんだね。

お瀧 また、よく／＼意氣地のない野郎で、あのみ、泣寝入りや撲り利さ、どっち道損はないんだよ。

権九 損はねえやね。損はねえたつて、儲からなけりや立ち行きませんや。骨ばかり折つて居て、口銭がねえんぢや、居喰ひの體だ。

お瀧 怨みつぽくお言ひでないよ。

権九 だつて、姉え、五厘が即效紙を買へばつても、丁と版ですつた效能がきが附いてまさ。理學士一匹打挫いて、どんなき、めがあるんだか、それが分らねえぢや張合がありませんやね、

腕ッ節に力が入らなくなつて不可えや。

お瀧 分らないね。だから然う言つてるぢやないか。お雪は玄禎さんの手を離れて、銀爺のものになつた。其の銀爺のを、坊主の方へ、離さして、此方へ頂きを、遣りそこなつて、阿魔は、いま理學士のものなんだよ。あ、爺も慾氣なしにお雪さんを一番出世させてやらうといふ腹なんだから、のしをつけて進上さ。其の理學士だから打ばたかなくつちや不可いぢやないか。

権九 そんなら、何も、ぶつの、のめすといふ手数は入らねえ。お雪さんが、いざ、むかうへ乗り込んでから、本宅なら臺所へね、それともお圍なら格子戸から、玄禎さん、姉え、私なんぞ、え、親父でえす、叔母にて候、へ、從兄なんで、と遣りはどうだね。

おまけに、彼の理學士は、華族だつていふから、頼母しい、こいつあ不自由しませんぜ。

お瀧 のんきな事をおいひでない、今時そんなことがあるものか。東京には電車があるよ。電燈も電話もあらあね。辻々にや交番がございます。繪圖を買つて一寸御覽、何處も彼處も空いてるないよ。

東京へなんぞ連れて行かれぬ前に、片つけて了ふのさ。尤もね、何、殺すには當らないよ。大怪我をさしておやり、色事處でないやうな。そしてね。あれもこれも仕損ひだから、又もとの銀爺の手へ戻して、それから分別を仕直すんだ、細工は流々仕上げを御覽よ。



権九 へ、へ、其の細工だがね。仕上げて若干金と極つて居ねえと、悪くすると下手人になるんだからね。

お瀧 何、お前、其處は丁と見通してあるんだよ、建札を御覽、建札を。此處へ上るものは禍あるべしだつて言ふぢやないか。

怪我過失は當前さ。また金ぶちめ、お雪と出來た不淨な身體だ。お不動さまの罰も當らないでさ。

怪我過 もありさうな事だよ。焦つたい、お前だつて、利も損もあるものか。あの天人を舐めた野郎と思つただけでも、打挫くだけの價値はあらあね。

権九 呀、もつともだ。然う聞いちや、こてえられねえ。お雪さんを、うゝ畜生め。(とえものをひねりひんまはす。)

お瀧 疾くおしよ、然うでもない。……人が來ちや悪いから。一寸、確りおしよ、遣ッ損ひなさんなよ。

権九 合點だ。(と尻をくるりとひんまくる。)

—幕—

## 第四幕

桃井家 (客室)

桃井夫人縫子。

夫人 (電話口に立ちながら) 實子さん、一寸、其のお扇子を貸して頂戴。

夫人の妹 實子。

實子 (卓子のわきに立つて寫眞帖をのぞいて居たのが) お扇子?

夫人の兄 時忠。

時忠 僕が持つて行かうや。

實子 あゝ、可い兒ねえ。

時忠 母様、はい。

夫人 あいよ、(と取つて、しなやかに手まさぐり) もし、もし、貴下、局長さんですか。桃井です。はい、其節は失禮。時員ですか、否、未だ歸りません。病氣は餘程宜しいさうです。え? ほゝゝ、だつて然うですもの。些とも音信がないんですもの。否、否、此方からも種々



忙 いんぢやありませんか。理想通り、自然を楽んで居るんですからね、なまじつか手紙なんぞ出さない方が勝手でせうよ。

はあ、可うございます。おほ、あのう、一寸貴下、此の間の、慈善音楽會ですがね、いよいよ土曜日にいたしますことになりましたから、どうぞ。妹も出ます。それから松山の奥様も、はあ、唯今ね、見えて居ますよ。(とふりかへり) 實子さん宜しくつて。

實子 どうぞ、宜しく。

夫人 宜しく。松山の奥様、はあ、其の時御紹介申ませうね。私………私は何にもしないの、口上でも陳べませう、其のかはり餘興の……否、天機漏すべからずです。

其から切符の方ですがね、貴下の分は一等を百枚ですよ。これは酷いつて。否、不可ません。いつかの慈善市の時は、どうぞでございます、豫定の半額に満たなかつたぢやありませんか。酷くつてね。一寸々々、御覽なさい、私の顔を、怒つてるんだわ。否、怒るのが通り過ぎて怨んでる位なんです。ね、可うございませう。今もね、丁ど、齋木男爵に百枚、藤野の支配人に七十枚賣りつけた處なんです。可うございませうか、屹とよ。はあ、おほ、天機漏すべからずです、はい、左やうなら、(また電話帳をくり開いて、番號をあちこち見て居る。)

(來客) 松山夫人。

松山 (さつき) 書きから寫眞帖を擴げて居て) 坊ちゃん、これは誰方? (かたむけて小兒に見せる。)

時忠 それはね、小い叔母ちゃん。

實子 坊やの唱歌の先生ね。

松山 眞個に、よく似て在らつしやる。實子さん、貴下のすぐお下の方ね。見違へるやうですよ。

實子 肖て居ませう、兄弟が皆肖て居ます。此方の姉ばかりが一人違つて居るんです。一番若く

見えるでせう。

夫人 其のくせ、私一人苦勞をするの。

實子 嘘おつしやいよ。ねえ、松山さん。

松山 如何でございますか知ら。坊ちゃん、これは、誰方?

時忠 え、僕知らない。

實子 それがね、然うなの、姉が今電話を掛けました局長さん、此の頃でのお氣に入り。

松山 おや、まあ、然う。

夫人 でもさ、一圓の入場券を一人で百枚と買はされるんだもの。それで氣に入らないぢや可哀相ではありませんか。あ、此の方は自分で後に出掛けよう。(と電話帳をさしおいて、此方へ、ふつくり安樂椅子にこしをかけて) 實子さん難有う。(と扇子をはなす。)



實子 使ふんぢやなくつて、姉さん、電話を掛けるのに、お扇子は何になるのよ。

夫人 だつて、局長が然う言つたもの。あなたは扇子を持つた姿が大層氣高いつて。私の象牙の  
だと尙佳いんだけど、間に合せに黒檀で銀の要、(とにつこりしていふ。)

實子 憚り様ですね、どうせ私は黒ン坊よ、ねえ、松山さん。

松山 ほ、ほ、これは、姉さんがお悪うございますね。

夫人 失禮々々。(と小兒のあたまを無意識になでながら)お前はお氣に入りだ、叔母さんに謝罪  
つておくれ。

時忠 叔母ちゃん、御免なさい。

松山 まあ、お可愛い。

實子 あいよ、時ちゃんはい、兒だねえ。眞個に姉さんにも困るわ。ほ、ほ、姉さん、扇を持つ  
た處が佳いッたつて、電話口に居て、對方へ見えるの。

夫人 實子さんは、だから不可い。電話だつて、丁と其のひと、顔を合せたと同心持でなくち  
や情がうつらないわ。眞個はね、衣類も餘所行のに着かへる方が可いの。然うするとね、自然  
と感應して向うの目の前へ、私の姿が現れて見えるんだわ。ねえ、松山さん。

松山 然やうでございませうねえ。

實子 感心して聞く人があつて？一寸 ぢやあ、姉さんの洗ひ髪が佳いと言つた、誰かに電話  
をお掛けの時は、結立ての髪を壊すんですか。

夫人 あ、勿論。

實子 困るわ、姉さんは。

夫人 おやく、お扇子の悪口を言つたもんだから、大分御機嫌を損ねたよ。何ぞ賞めて上げま  
せう。(と扇子を開いて)あ、其のかはり畫は當代の青年美術家、一寸、松山さん、其處に居  
ます。

松山 はあ、此の方ですか。(と寫眞の一枚)

夫人 御存じでせう。

松山 近頃賣出の方ですわね。

夫人 え、一昨年をの秋の展覧會に、一等賞を取つてからね——あの時の畫は貴女、秋の姿と言  
ふ題でね、私が注文をして目白の、駒留橋の處を取らせたの。彼處をね、寫生をした時なんぞ、  
私が一所に行つてね、急に村雨にあつたでせう。美術家を濡すまいと思つて、後から私が涼傘  
を差掛けて遣つてさ、お庇で其の時はじめて着て出た、袴を一襲、羽織ごとびつしより。其の  
上まだ、早稻田邊の人に見つかつて、一寸、物議を生じたわ。



松山 道理こそ、貴女のお心入ばかりでも、一等賞は當前です。

夫人 其のかはり、私のためには何時でも御馬前に討死をするつて言ふの。内ぢや其の人の渾名を、馬前といふのよ。御覽なさいな、内端だから、實子さんの此の扇の畫にも、落款に馬前としてあつてよ。

ですからね、今度の音樂會なんざ、團體を拵へるつて騒いで居ますわ。ねえ、實子さん——おや、

實子 (松山夫人が、縫子と此の話しの内、手を放した寫眞帖を見て居る内に、急に胸がせまつて、ほろりとなり、ハンケチを目にあてたところ。)

夫人 一寸、どうしたの。

實子 (わらひにまぎらし) ほ、一人、此處に、可哀相な人が居るの。

夫人 誰。(と乗りだして、のどかうとする。)

實子 (とびたりとしめて) 否、……後で御覽なさい。解るやうにしてあります。そしてね、それは私が姉さんへ忠告なの。

夫人 樂みに見ませうね。(と洒落として意に介せず。)

松山 いろ／＼お世話様でございました。お庇様で最う満員でせう。皆さんも、どんなにお喜び

だか知れませんが、それにつけても、責任が重うございます。また是から實子さんの方へ参つて、御一所に演習をさして頂きますせう。

實子 坊や。

時忠 あい。

實子 一所にお出でかい。

時忠 僕、どうしような。

實子 今日、珍しく姉さんが内においでだもんだから、考へるのよ。

夫人 行つておいで、小さい叔母ちゃんも待つて居るだらう。母さまはね、坊や直ぐに又出かけなけりやならないから。

松山 私がピアノを弾いてあげませうね、——黄色い、蒼い衣もの着て——

時忠 黄色い青い衣もの着て、(とうたふ。)

應接室の扉をあけて、實家方よりつききたりの縫子の乳母。

乳母 坊ちやま、御機嫌でございますね。お縫様、一寸お晝のお支度を、うかゞひに、

實子 乳母や、内の方に支度がしてあるから可いわ。

夫人 奥様の御供をして歸るんだつて。



乳母 これは、お粗末でございます。

實子 坊や、おいで。

乳母 おや、また御一所に。

時忠 あゝ、行つて来るの。

松山 然やうなら、失禮、

夫人 何です、御丁寧な。(とたしなめるやうにいつて送つて出る。)

あとへ、女中が来て部屋をかたづけ、椅子の位置などをなほして入る。

夫人、乳母、室へ戻る。

乳母 松山の奥様は、御婚禮遊ばしてから此方、僅半歳ばかりの内に、大層おふけなさいました

よ。

夫人 (耳にもかけず、乳母の手を握つてひつぱり) 一寸、何だらうね。

乳母 あれ、乳母の手を曳いて、どうなさいます。

夫人 否さ、分らないんだもの。(と乳母の背を打つ。)

乳母 あれ、乳母の背中をお打ちなすつて、どうなさいますよ。

夫人 否、焦つたいんだもの。お待ちよ、(と又手を引張る。)

乳母 何でございますね、乳母は何處へも参りません。

夫人 然うぢやなくつてよ、今、實子さんがね、妙なことを言置いて行つたんだから、お待ちよ。

(トさきの寫眞帖の、重いのを、づいと持つ。とバツタリ一枚、寫眞がぬけて、ゆかに落ちる。)

おや、(とじつとおもいれあり) うつむけに落ちたよ、乳母、拾つて見せておくれな。

乳母 はい、誰方でございますか。お、これは、一昨年あたり、初終お見えになりました、

立石——さんでございますね。あれ、お縫さま、なぜ、寫眞と一所に、乳母の手をお握りなさい

います。

夫人 感情に激して、倒れようとして、お前に絶つた處ぢやないか、ほゝ、ほゝ。

乳母 まあ、笑ひごとではございませぬ。此方へ挟んで置きませうか。

夫人 待つておくれ、折角心あつて落ちたものを、取り上げて、胸に抱いて遣らうか知ら。

乳母 もし、何故、乳母の手を指でお突つきなさいます。

夫人 然うね、つい、私癖になつてさ。

乳母 つい私ではございませぬ。此のお寫眞を拜見するに就きましても、お縫様、貴女悪いこと

をなさいます。懐へお抱き申して、お乳をあげました私でさへ、然う云ふことをなさいますと、

何か深い、お心があるやうに思はれますもの。殿方に、そんなことをなすつて御覽なさいまし、



大抵ぢやございませぬ。

よく、貴女、乳母が傍に居ります時でも、お客様と並んで、繪や何か御覽なさいます時に、人様の畏つて在らつしやるお手を貴女、指で一寸々々……

夫人 可いぢやないか。

乳母 善くはございませぬ。

夫人 だつて、面白いもの、私の手がね、一寸觸ると、誰でもね、ビクルとするの。最うね、其の人の魂が、指環の飾になりさうよ。

乳母 滅相なことをおつしやいまし、人間の魂が指環に嵌められるものでございませぬか。

夫人 あら、あんなことを言つて。乳母は昔の人だから知らないんだわ。ほら、透すと蒼く見える珠があるだらう、——いま此處に嵌めてゐるのはダイヤだけれど——あの、お前蒼い幽玄な色の珠は、あれは西洋ぢや人魂で製するんだわ。

乳母 お縫様、私は眞剣でございませぬ。

夫人 あら、お前怒つたの、堪忍おし。御免よ。さあ、其のかはりお乳を飲んであげようね。(とかほを乳母のむねへおつつける。)

乳母 もう、貴女が其を遊ばすと、乳母は身體が溶けさうでございませぬ。

仇氣ない、罪のない、其のお心を知つて居ります、私だけは、假令貴女が、餘所の男と、同一で御寝なりましたも、御意見は申されなくなりませぬけれど、他人は然うは思ひませぬ。お妹御の實様さへ、蔭でお案じ遊ばすではございませぬか。貴女が、手を觸つたりなんぞなさいませぬ、殿方に馴々しい御様子を、間違ひのもとだと仰有いまして。

夫人 實子ちゃん、そんな生意氣を言ふのかい。だつて自分だつて、突く癖に、弾くぢやないか。

乳母 御申戯おつしやいませぬ。あの御方は、御姉妹の中でも、一番お慎深うございませぬ。飛でもない、殿方の手を弾くの何のと。

夫人 否さ、男の手ぢやない、ピヤノをさ。

乳母 ピヤノは貴女、お琴も同一、いくら舶來の品だと申して、何處にも男ツ氣はございませぬ。

夫人 乳母は知らないんだね、私が男の手を調べるのも、實ちやんがピアノを弾くも、同一だわ。私の指の先が、一寸でも觸らうもんなら、直に男の琴線に觸れるんだもの、其の男の身體から、微妙な音楽が聞えるよ。

乳母 可い加減なことを仰有いませぬ。いつ殿方の何處を敲いて、お琴や、ピヤノの音がした験

愛 がございます。

夫人 あ、尤も、其は、銅鑼、鏡鉢が多いけれど、偶には、佳い音のするのがあつてよ。其の



立石さんなんぞは、幽玄な音だつけよ。……一寸、怒るだらう。さあ、飲んであげる、乳母、お乳。

乳母 (ぐつと胸を引いて) 否なりません、眞個に申し上げねばなりません。お縫様、貴女、お母様が御存生の時お見立てに預かりまして、恚うやつてお嫁入先までお付き申して居ります。乳母、申さねばなりませんのでございます。此の貴女、立石さんは、唯今何處に在らつしやいます。

夫人 知らないさ。

乳母 あれつきり、お行方が知れないさうではございませんか。假令向うの心からでも、根はと申せば、貴女から……お縫様、學校も最う些とで御卒業なさる、行末長い、頼母しい、お少い方を、死活さへ分らないやうに遊ばして、些とお氣には係りませんか。

夫人 氣に係るとも。お前、私の體に些とでも、あの、明月の明い晩に、一葉落ちるやうな影がある時は、皆立石さんのためだと思ひ。

螢を見たり、時鳥を聞いたり、雁がねに閨の戸を開けたり、時々、言ふに云はれない、切ない思ひをして居るわ。あ、其の思ひが亦樂みな。考へて——自分でも、悄れる事があるけれど、其も矢張り風情ぢやないか。

乳母 風流ぢや、とおつしやいますか。

夫人 まあ、然うよ。

乳母 風流とは何事でございます。もしお縫様、申上げねばなりません。あの時だつて然うなのでございます。

立石さんは、暑中休暇で、銚子の方へ行つてお在でなさいましたのを、貴女が大磯の御別荘へ、其も——終汽車で来て、閨の戸を叩け——などとお手紙をお書きなさいまして、私にお見せなさいましたでございませう。

夫人 然うとも、お前にも、殿様にも、隠したことは些ともないよ。

乳母 はい、其の、貴女の御潔白は、其は存じて居りますけれど、其の御容色で、其の御容子で、そんな事をおつしやつて、前が少い方だから、と私が申しましたのも、お肯き入れなさらないで、たうとうあの時、お呼び寄せになりましたでございませぬ。

まさかと存じましたに、夜の一時頃戸を叩いたではございませんか。貴女が故と直ぐにお開けなさらなかつたものですから、立石か、とおつしやつて、殿様が御自分に、裏木戸をお開けなさいました。啄いた人は、どんなに極りが悪かつたでせう。ばたく遁げ出した音がしました。

おい、と御呼びなさつて、殿様は少時立つてお在でなさいましたけれど、歸つて見えないものですから、其なり又兩戸を閉めて、お入りになると、貴女と何か笑ひながら、お寢物語で



はございませんか。

最う遅くつて、宿もなからう。其上にかねく存じて居ります。立石さんの氣の小さい事も知つて居りますから、あゝ、また然うでもない。

此の頃はやりますやうな、自殺でもなさりはせんか。海へ身投でもなさりはせまいか。

御両親なく、伯父御の世話になつて在らつしやるとかで、恐しく人懐く、乳母さん、乳母さん、とおつしやつて下すつたものを、と心配になりました、私は、密と戸外へ出て、一度お裏の松林から、濱の方を歩いて見ましたほどでございました。

其つ切、お見えなさらず、御朋友の方に聞きましても、何處へ行つたか行方が知れん、華嚴の瀑か、浅間だらう、とお風説をなさいます。

的切、先方では、自分の氣を引かれたのぢや、貴女と殿様とお馴合ひで、辱しめられた、と思つたのでございませう。お人出入りは多し、成程、それでは世の中へ顔出しが出来ません。其も人によりけりを、あゝ云ふ初心な方を捉まへて、貴女の、なされ方が悪いから、はい、飛だ恐ろしい罪をお造りなさいました。

夫人 乳母、そりや、邪推だわ、あの時だつて、何も私が、態と直ぐに起きて出て、木戸を開けなかつた譯ではなし。來たらば嬉しがらせて遣らうと思つて、丁と枕頭に用意して置いた、雪

洞をさ、お前懲うやつて、袖で隠して、兩戸を開て出ようとするね、宵に暗だつたのが、其時は眞晝間のやうな良い月ぢやないか。

私は月に恥ぢて猶豫つたの。あゝ、フィと手を洗はうとして、雪の積つた時なんぞは、其の雪ほどには、色が白くないやうな氣がして一寸手水鉢へ手を出し兼ねる事さへあるんだもの。

月に恥かし我が姿だつたわ。爾時さ、ね。だから、お前、雪洞を吹消したけれど、寢衣姿はしどけなし、それも寢みだれで可いとして、月影には配合の悪い、水紅色の扱帯がね、お前、汚れた色のやうに見えるぢやないか、あの緋の絞りの方に締め替へて、と思つて、支度をして居る内に、待たせるな、待たせるな、と言つて、主公様が、あゝ云ふ身軽だから、自分に出ておいでなすつたんだわ。

乳母 唯、其が悪うございます。月明に、色の配合が悪いと言つて、人を門に待せてお置き遊ばして、お召替へなさいますのが、其が貴女、お心得ちがひなのでございます。

夫人 乳母、乳母。

乳母 はい、

愛 夫人 顔を御覽。

火 乳母 え、



夫人 私の顔を……怒つてるよ。ほ、ほ、

乳母 否、お怒り遊ばしても、申さねばなりません。

夫人 怒つても不可なけりや、ぢやあ甘えるわ。さあ、お乳をおくれ、呑んであげよう。

乳母 否、今日ばかりはなりません。

夫人 ぢや、あの、晩に甘えて遣るからね。堪忍しておくれ。澤山だわ、頭痛がして来た。又此の後では、殿様の見舞に行け、手紙を出せ、と言ふだらう。殿様は打棄つて置く方が氣に入るんだよ。それは私が知つてるから、最う何にも言はないで。

乳母 申します。お縫様、貴女が御心が直りませんければ、申さねばなりません。はい、これを

申しますのも、乳母は身を切られますより辛うございますけれど、言はずには置けません。

夫人 乳母、私、眞個に怒つてよ。

乳母 お怒り遊ばしても構ひません。

夫人 だつて、お前主人が怒つて可いのかい。

乳母 可うございますとも。貴女。

夫人 口も利かないよ。

乳母 些とも困りません。

夫人 そんなにして、一所の内に居られるの？

乳母 置いて下さいませなければ、づん／＼お實家へ歸ります。

夫人 直ぐにまた歸つて来ようと思つて。

乳母 どう致しまして、諫めて用ゐられざれば、何とかで死すでございませぬ、私は死んだ氣にな

つて、貴女に口も利きませぬ。

夫人 私も口も利きやしないから。

乳母 私も口も利きませぬ。

夫人 ぢや、黙つておいでな。

乳母 貴女が、ものを仰有るぢやありませんか。

夫人 お前も喋舌るよ、ほ、ほ、ほ。

乳母 笑ひ事ではございませぬ。お縫様、(とまた開きなほる。)

玄關の書生はたく／＼にて、

書生 奥様、電報でございませぬ。

愛 夫人 何方から、(と手にとつてあけて見て) え、(とおどろき) 何だつて、ダンナケガシタス

火 グコイ、カッラカン、(旦那怪我した、直ぐ来い、桂館) まあ、一寸、



乳母 殿様が御怪我なさいましたつて？

夫人 ね、然うだらう。御覽。

書生 はッ、——正に、是は飛だことでございます。

夫人 直ぐに出掛けます、汽車の時間を。

書生 畏りました、何しろ、御心配で在らつしやいます。(とひつかへす。)

乳母 何、何、どうなさいましたのでございませう。

夫人 何しろ、行かなくつては。

乳母 はい、お急ぎなさいまし。

夫人 あ、乳母、一寸、松屋へ電話を。

乳母 呉服屋でございますか。あの、お氣に入りの千吉を、お供にお連れなさいますのでござい

ますか。

夫人 否、申戲ではない、看護服を誂へるんだわ。(といつて髪のかざりをとる。)

乳母 おや、お髪を、どう遊ばします。

夫人 束ね髪にして働かう。いつも打棄つて置くから、思入れ看病をして嬉しがらせようや。

(乳母ためいきをして、ベツたり膝をついて、顔をながめる。——)

幕

## 第五幕

### 其一 不動堂 (波切巖庵室)

桃井夫人縫子。

縫子 (巖かけより姿をあらはし、密林の中を木の幹をめぐつて御手洗の前で、鎖した庵を伺ひ)

立石さん——立石さん——まあ、此は恐い燃材だこと。枯草、枯葉、焚つけの枝、大層な、山と積んだよ。丘にした。大風の跡でもあるやうな、鳥の巢も落ちて居る。彼此、雑と七日ばかり、誰も上つたものはないと聞いたに、村の人が柴を刈つて、刈り溜めて置くの知ら。それとも可愛い、仇氣ない、我儘な立石さんが、ヴェスヴィアスの火山だなんて、仕掛け花火でも焚くのか知ら。(とあでやかにっこりして) 火いたづらは悪いことよ。私が叱つて遣らうねえ。(と階の前から廻廊の下を雪駄ばきで近づき) 立石さん——立石さん——

愛 秋哉 (うらがれたる聲して、閉め切つた破障子の中で) 誰——だ。

火 縫子 あ、居るのね、貴方、一人なの。



秋哉 誰だ。

縫子 桃井です。

秋哉 何い！

縫子 桃井夫人よ。一寸、縫だわ、縫子が来たんですわ。

秋哉 歸れ！

縫子 まあ。

秋哉 歸れ、歸れ、人の来る處ぢやない。

縫子 否、歸らない。立石さん、開けますよ、(と障子をあけつ、)御覽なさいな、私ぢやありませんか、立石さん、私だよ。(と見てびつくりする。)

(立石秋哉。身のうち敷ケ處の傷、こゝかしこ血に染みたるま、爐の縁にぱつたり寝て居る。)

秋哉 何しに來た。

縫子 ……………

秋哉 何をしに來た。(と寝て居ていふ。)

縫子 顔を見せに來たんだわ。

秋哉 ……………

縫子 それから、顔も見に來たの。

秋哉 又ひやかしに來たんだな。歸れ、失禮な！(と半ば起きあがる。)

縫子 思ひ違ひよ。あなた誤解ですわ。一寸、大層怒つて居るッてねえ。何時私が、

秋哉 一昨日も過ぎた。昨日も過ぎた。今朝も過ぎた。過ぎ去つた日と、死んだものは、歸つて

來た驗がない。何にも言はん。今日は何しに來ましたか、と聞いているんだ。

縫子 其は何ですわ、貴方の其の病氣の、介抱に。怪我をして居るぢやありませんか。あれ、可

哀相に、大變衰弱してねえ。熱がありません。酷いお顔の色よ。貴方自分の心から、悲觀して、

絶望して、最う全然生きてる様子つたらないぢやありませんか。

そして、誰も來ない、こんな巖山の孤家のやうな中に、眞夏だと言ふのに、何です、氷りつい

たやうに爐縁に倒れて、御覽なさい。幾日も火の氣がなかつたさうで、灰が石のやうになつて、

冷い風が吹いてるわ。

敵の末だつて、恚うやつて、重たい雪駄を引ずつて、早く貴方を救はうと思つて、あの、嶮し

い石段を、駈けて來たんぢやありませんか。お茶ぐらゐる御馳走をするものよ、と叱言も何にも

言へやしない、御自分が口も利けないんだもの。

唯死ぬばかりなのねえ。然う言ふ處へ、私が來て、助け出してあげるのが、立石秋哉傳の中に



大せつな一頁なの。一番おもしろい處なの。神祕な處だわ。眞個に奇遇ねえ。三年ぶりではありませんか。些とも年をとりますまい。

私が段々少くなるから、今でもどうかすると乳が出る、大方だん／＼嬰兒におんなすつたら、又此のお乳が役に立つためだらうつて、乳母が言つて笑ふのよ。

あゝ、其の乳母も、大變に、貴下の事を案じて居てよ。

子爵も眞個に心配して、貴下を復活させようと思つて、此の山へ上つたつて、お底で怪我をし、たぢやありませんか。

秋哉 此處へ来て、子爵が、怪我を、此の山へ上つたのですか。(と痛みを堪へて片膝立つ。)

縫子 あれ、知らなくつて、一寸張合がないことね。

尤もね、貴下の姿を、未だ見ない前だつたつて、三番目の石段を上へ上り切つた處で、どうしたんだか、不意に、こぐらが返つたやうで、兩足がしびれると、膝が折れたやうに仰向けに倒れてね、それツ切氣絶して了つたさうなの。

あだにはお思ひなさんなよ、皆貴方のためだわ。

お民ツて、桂館の女中がね、大車なお客さまだと言つて、感心だわ。貴下の建札で、皆恐がる中を、一人で上つて来て、そして倒れて居るのを見て、負ぶして歸つてくれたさうよ。

直に電報が来たから、私、急いでね、汽車で駆け着けたんぢやありませんか。丁ど又生憎一等車が連結して居ないんだもの。二等にさへ、唯一人、皆で苦勞をさせるんだわ。

来た時は、天井から氷嚢を三つもさげて、私も吃驚したけれど、東京から、お醫師を呼ぶまでもなくつて、湯治に來合せて居なすつた、醫學生の方が、手が利いてね、今朝あたりからすつかり治つたも同然なの。打つたので腦が些と痛むばかり、大分疲勞をして居るけれど、大抵平生と同じだわ。何しろ氣絶して居たもんだから、宿でも上下かへしたのよ、立石さん案じなくツても、最う可いの。

私のね、看護服が、目白の内から届いた時分には、床上げの祝の席の紋着が欲しかつたくらのものよ。

だから不思議ねえ、丁と定つた運命なんだわ、其の看護服は、貴方のために使ふやうになつたの。

御覽なさい、着て居るんぢやありませんか。雪のやうで潔く綺麗でねえ。髪も櫛巻よ、簪も何もなしに、恠うした處も又佳いでせう。苦勞をしてあげるわ。私の胸の戸をあけて、其處へ直に入院させて、而して貴下の靈の病と、骸の傷を治さうではありませんか。

さあ、一所に、こんな薄暗い、陰氣な、凄い、墓を出て、花々しい、美しい、世の中へ私と一



所に行きませう。(とむさうちに手を握る。)

秋哉 (ひつぱらふ。)

縫子 酷いこと！ 何だつて振飛ばすの。指環の珠には希望の星が輝いて居るではありませんか。一寸、此の手は、何よ、あゝ、貴下未知らなくつてね。一團體を代表して、外國の貴賓のウエルカムをした時に、大勢の中で真先に、誰方か握手の禮を遊ばして下さつた手ぢやありませんか。立石さん、……貴方、私の此の手を打棄るのは、希望と榮譽を棄てるんですよ。

秋哉 希望の星も、榮譽の手も、死んだものには用はないんだ。(とまた倒れる。)

縫子 其が、其が病氣なんですよ。可いわ。ぢや、私、此處に居るから。此處に居て、介抱するから、一寸、すぐ眞下に桂館が見えるのね、呼んだら屹と聞えませう。お晝も晩も取寄せて、あなたと一所に食べようね。

秋哉 (しばらくしてアイツ、と起上り) 無論聞える。此處ぢや呼んでは聞える。(とじつとあたりを見て) 建札に——何人といへども上るべからず——と書いて置いた、貴女に來られぢや叶はんのです。

縫子 ね、そら、御覽なさいな。

秋哉 ぢや、折角(と縁から足をぶら下げて) 然うやつて、しんせつに言つて下さるんです。御挨拶までにも下山しよう。しかしお待ちなさい。未だ些と用があります。

それは、僕が三年間、今まで齊眉して居た此の堂の不動尊です。貴女、恚うやつて世を離れても、悟り得ない心には、風の音も、人の聲かと、晝も夜も可憐し

かつた。——此の境遇につけて、信じて聞いて下さらんければ不可ん。縫子 はあ、其は聞きませう。貴方の事だもの、信じますとも。嘘の吐けない人なんぢやありませんか、ほゝ、ほゝ。

秋哉 他ではないのです、僕が心得違をしてから此方、どうも恚う云ふ身體と一ツ棟に、お置き申すのが勿體ない、尊嚴を傷けるやうで濟まないから、此の山の、すつと奥に、昔の城址がある——其處までは迎も草深くつて行かれません。又誰も行つたものはないんですが——此の裏へ廻つた處に、二の廓か、三の廓か、それとも出丸の跡かしらん、崩れた石の捨廓が一坪ばかり、葎の中に残つて居ます。其處へ負つて行つて座を移し奉り、据ゑ置いて歸つたのです。宗教の哲學のと、煩かしい事を措いてだ、三年間、饑ゑず、凍ゑず、養つて頂いた旦那様です。御暇乞ひがして行きたいんです。

愛 火 ものの機勢で、巖角を蹴つて、打ッ缺いた時、足を痛めて、此の通り。……人手を借りないぢや歩行けんですから。夫人、肩、肩をお貸しなすつて、連れて行つて下さいませんか。



縫子 え、可うござんすとも。貴方、どうせ看護婦なんだわ。望む處よ、さあ、手を曳いて上げませう。

秋哉 飛んだ御難題です。アイツ、。

縫子 危いわ、最とずつと、恚う肩へ、ね、(と斜に顔をかさねるやうにして) 嬉しいでせう。

秋哉 ……………

縫子 恚うやつて歩行く處を、下界の人達に見せて、羨しがらせて遣りたいね。一寸、最う些と

此の崖縁の方を歩行かうぢやありませんか。

其の醫學生の方はね、三人づれで、一人は畫工よ。一人は詩人なんですつて。私が来てから大

騒ぎを遣つて、詩人も、畫工も、醫師でないのを怨むんだつて。醫者の方は、子爵の世話をし

て、私の部屋へ来るからよ。あの人達が、此の姿を見たら何と言ふでせう、木隠れの女夫星と

か、何とか歌つてよ。一人は七夕様を描くでせう。

秋哉 貴方が織女、僕が牛か。

縫子 あら、

秋哉 鼻頭へ綱をつけ、フン／＼と曳かれる圖だ。

縫子 そんな拗ねた、曲つたことを。……

秋哉 御恩がへしに乗せたいけれど、此の通り腰抜けた。死んだら洋犬にでもお遣んなさい。

縫子 一寸、顔を御覽なさい。私、怒つて居るから。

——草深き裏山一面——

縫子 (踏み分けてたどりながら) まるで道がないのねえ。

秋哉 方なしです、特に夏は恐しい。

縫子 危くはなかつて。

秋哉 大丈夫です。

縫子 埋れ井戸なんかありませんかね。

秋哉 いや、水のない處だ。山の井なんぞはないやうですが、何しろ斷崖だから、がくりと來る

と千仞の谷になる。

縫子 あら、厭よ、私。

秋哉 足場は僕が知つて居ます。先には今の、あの御堂の裏に、巖があつて、像が一體彫りつけ

てあるんで、廻廊の傍へもつて行つて、——此の裏に奥の院あり——と札を建つてあつたもの

愛

火 知らないものが、本堂の裏へ廻らずに、間違つて此の巖の山奥へ入ると、一人として生きて返



つた験がない。此の草で此の崖でせう。踏み外すと其ツ切なんだ。僕が来てから、其の札は抜いて了つて、奥の院は口で教へる事にした。……全く幾人亡くなつたか知れん、魔所だつて言ふが、然うではない、昔の要害で、蜀道の嶮、あゝ、あゝ、危い哉なんです。

縫子 それこそ猛獣でも居さうねえ。

秋哉 猛獣は居ませんが、兎はばら／＼飛んで居ます。

縫子 兎は可いけれど、何だか居さうねえ、(といふ下から)あれえ、長いのが、あゝ、向うへも、あれ、此方へも、一寸どうしませう。

秋哉 何にもしません。毒のない蛇は蛙より柔順です。第一人の前へ這つて出るぢやありませんか。僕なんざ、貴女に對しては蛇です。

縫子 手を放すわ。もう厭よ、私は、

秋哉 然うすりや、倒れて這ふ。

縫子 仕様がなしたことね、(とわらふ)可いわ。毒蛇に此の白い胸を噛まれて死ぬわ。

秋哉 理想のクレオパトラですかね。

縫子 一寸、あれは……女の本望ねえ。

其二 古城址 (波切巖山つゞき)

果して出城の捨廓、草を擗出した石の上に一體、不動尊を据ゑてあり。うしろの火炎、よつかつた巖に朱の如く、眞赤に燃えて居る。

縫子 あゝ、此ね。

秋哉 一寸待つて下さい。(と夫人の肩を這つて、倒れるやうに葎の中に埋もれ伏して、暫くは頭もあげず、臆てはら／＼と落涙する。)

縫子 (この間さみしさうに暮れかゝるあたりをながめて) まだ。……立石さん、まだ。(とこぼる。)

秋哉 申譯がありません——南無(と高らかに)大聖不動明王(とかすれる聲で、がつくりとかうべをたれ)おさらばです。(とづいと立つてよろ／＼とあとへすすむ。)

縫子 もう、よくツて。私、恐くなつてよ、さあ、行きませう。

秋哉 (ならんで立つてふりかへり) 佳い作の不動様でせう。何う見えますか。

愛 縫子 どうツて。

火 秋哉 何う見えますか。



縫子 私。あまり偶像の方は……

秋哉 貴女、此處で信仰して禮拜をなさいといふんぢやない。唯、不動明王が、何であるかと、お思ひなさるまでで可いのです。人間の中の、貴女が然うやつて、桃井夫人である如く。

縫子 はあ、それは誰にだつて、お不動様よ。

秋哉 否、處が僕には……然う見えな。

縫子 どうしてさ、ぢや、誰方に見えるの？

秋哉 佛に見える。佛陀に見える。釋尊に見える。——炎と、毒と、劍戟と、あらゆる殺戮の軍を率ゐて、毘盧釋迦王が潮のやうに、橋薩羅と迦毗羅の國境に着いて、大白象の上に銀の鞭を上げて、敵は迦毗羅城に在り、と叫んだ時、崩れた巖のやうな樹の蔭に、焚くが如き日を浴びながらイミたまひて、「見よ、枝枯れて蔭なくば、人は何處に休らはむ、王子よ、葉を散らすことなかれ。」と三軍を諭させ給へる其の佛に拜される。あれ、御覽なさい、夕焼雲は巖に染みて、枯木は燃ゆる火柱に、大火焰が擲んだは、勿體ない御有様。降魔の利劍も我がためには、暗路に支けとの杖に見え、索の繩も、我が目には迷を拂への數珠に見え、憤怒叱咤の御相も、優しい母の面差しして、乳の外には味を知らない、嬰兒の昔にかへれ、憤を留めよ、怨を忘れよ、怒を宥めよ、安らかなれ、平和なれ、然らば巖には露滴り、森の緑は、涙に濡れて、情の清水湧

くであらう、胸の炎を消すであらう。山を崩すな、石を飛ばすな、煙を吐くな、炎をあげるな、樹蔭に憩へ、枝葉の榮ゆる世にあれ、と諭されるのを見るやうなんです。

縫子 あ、其では、貴下が、此の山をヴェスヴィアスのやうに噴火させるツて、腹をお立てなすつた、そんな事を、留めるやうにと、あの、お不動さまがおつしやるやうに思はれるんですのね。

秋哉 然うです、そして且つ桃井夫人の罪を許せ、と懇に戒められます。

縫子 私の罪……私は何にも罪はないわ。でも最う有つても許すでせう。——まあ、頭を掉つて……許さない氣なの。

秋哉 其が許されるくらゐなら、こんな處へ連れちや來ん。

縫子 え、！

秋哉 覺えてるか、おい、忘れまい。(といつて、肩に縫つたま、ぐつと押据るる。)

縫子 (膝を支へて倒れながら) 酷いことねえ、覺えてるか、忘れまいツて、彼の時の彼の事なの、貴方が閨の戸をたゝいて、私が出ないで、子爵が戸を開けた、其れを怨むんですか。

火 愛 秋哉 人の心の闇に乗じて、夜道を閨へ引張り寄せて、月明に引き向けて、時員に、此、此の間拔顔を歴然と視めさせて、其が怨か、とは何を言ふのだ。



其、其を辱ぢないでどうするんだ、怨まんでどうするんだ。大馬鹿ものでも、怨は、怨だ、怨むな、と言ふは其方の勝手だ、怨むのは僕の勝手だ。

縫子 否、眞然うなら怨まれても仕方がないけれど、あれは貴方、ほんの、まあ、一寸した間違ひから。

秋哉 い、や、聞かん、言譯は聞かん、賽は最う投げられた。

縫子 ぢや、ぢや貴方どうするのよ。

秋哉 眞先に貴女を縛る。それから時員に戦を挑むんだ。人質に貴女を縛る。は、は、は、卑怯未練な戦争なんだ。覺悟なさい。(とむすと手を取る。)

縫子 あれ、(とふりはらつて遁げようとする。)

秋哉 (やにはにたぶさをとる。)

縫子 (くろかみ颯とみだれて又どうとなり) あれ、立石さん、あれ、御覽なさい、貴方今何と言ひました。あれ、彼處に見えるぢやありませんか。佛陀の、お釋迦さまの姿が、蔭のない、焼けるやうな、巖の下に立つて在らつしやるぢやありませんか。枝を伐つて葉を落せば人の世に棲む蔭がない、とおつしやるではありませんか。憤の炎に水が煮れば、魚は爛れて死にますよ、貴方の身體はどうなりますよう。

秋哉 面白い。む、愉快だ。眞に然うだ。が、水が煮えるを待つものか。堪へられない胸の炎に、魚が前に焼けるんだ。樹の蔭も頼みはせん。情の清水も有つては邪魔だ。此の巖山を炎にするには、一滴の露も火の妨げ、僕は泣かん、口惜涙も落さない。貴女も泣かずに覺悟をなさい。僕は寧ろ、枝も、葉も、盡く枯れ落ちて、燃え易いのが望みなんだ。

縫子 さあ、縛られませう、そんなに言ふなら縛られませう。(とうしろをふりあふぎてにつこりしながら) 私、眞個かと思つたわ。でも、勇氣があつて頼母しいわねえ。髪なんぞ引撈つてさ。でも恚う丈にも餘るのを抜かないで下さいよ。貴方、私を縛るたつて、この草原に、結へるものは貴下の其の玉の緒と、私の黒髪の他にないでせうねえ。

秋哉 む、(とだまつて) 殺文句は、他で言へ。

縫子 さあ、縛つて頂戴、縛つてさ。(と美しく身をすりよせる。)

秋哉 (と無言で草の中をかきさがし、蛇を掴んで一しごき、ぐいとしごく) いくらもあるんだ。

縫子 あれえ、あれえ、後生です、立石さん、後生です、せめて、せめて、ぢやあ、此の扱帯で、さあ、殺されればツても、繩なんぞ恥辱だわ。(とじんじやうにうしろ手にひつく、られる。)

愛 秋哉 (はしをひかへて、よろ／＼とよろけてたふれ) よく、覺悟をなすつた。あなたが望みの最期をさせよう。クレオパトラの乳を噛んだは、凡そ此の位な毒蛇であつた、(とかくしからキラ



リとナイフを)あ、お互に。——淺ましや劍の枝の撓むまで、こは、何の身の……なるにかあ  
るらん。——

縫子 あれえ、(とこれにびっくりする。)

秋哉 此處ぢや聞えん。もとの堂の處へ歸りませう、彼處で救をお呼びなさい。桃井が助けに來  
て貴女の運命を定めませうよ。

(と再び草に伏してうしろを拜む。)

第三 桂 館 (三人醉客部室)

白川 大破裂、大破裂、(杯盤狼藉とした部屋の欄干に片足かけ、不動山を目の前に望んで立揚り、  
もろはだ脱ぎ、大手をひろげ、山をかへ込むやうにして)大破裂、大破裂。噴火。噴火。煙  
は波を崩すが如く、炎は龍の戦ふ如し、乾坤赤く、天地暗し。

幸木 日が暮れたから、暗いんだよ。鎮まれ、鎮まれ、これ落ッこちる。

白川 落ッこちるとは、何だ。上へか、下へか。

幸木 氣を確に持て、白川。昔から上へ落ちた例はない。

白川 暢氣な事を言つて呉れるな。これ、空天へ落ちるのか、大地へ駈上るのか、其の見分けが

付くやうな場合かい。後生だから騒いでくれ。ひっくり返れ。落着くな、落着くな、大破裂、  
大破裂!

幸木 なか／＼落着いて居りはせんよ。酔つて居て危いといふに、これが落着いて居られるかい。

白川 おい、あの巖端の暗の中に、一點の火の光あるを見よ。坊主だ、あれが坊主なんだぜ。失  
戀家だ、御同然の失戀家。嬉しいな。

恚くあらむと思へばこそ、一本の酒を三人で飲むまでも儉約して、今に逗留して居たんだ、  
果然、此の事あり。

噴火山の頂で美人が悲鳴を擧げてから、凡そもう何分経つ。

幸木 時間なんぞ僕にだつて分らない。

白川 難有い! 此處で又悠々と胃病患者の脈を見るやうに、秒を合して居られて堪るものか。

あれえ! と筈に響くから、いきなり見ると、何ぢやないか。美人が縛られて居るぢやないか。  
あの大松の幹を、くる／＼と廻るぢやないか。眞白な足の爪さきも數へるやうに見えるぢやな  
いか。坊主が、坊主が、ナイフを閃めかして追ふではないか、おい、下江はどうだ。

幸木 何だ自分で話すのか聞いて居るのか無我夢中だ。下江は皆と一所に駈出して見に行つたよ。

白川 嘸熔岩に漾うて、焼灰の中に埋れただらう、危い男だ。



幸木 いや、熔岩より、焼灰より、欄干へ乗る奴の方が危険だよ。第一噴火だの、破裂だのって、火は山頭に唯一ツ、松明の燃えるばかりだ。

白川 其の、其の一點の火の中に、世界の炎が籠つて居るよ。一たび動いて林を焼き、更に轉じて巖を熔かし、三たび動いて人を焼き、やがて地を焦し、天を烘るぞ。唯一ツ燃ゆるばかり、と芋を焼くやうなことを言ふな。太陽の熱を知つてるかい、星の大きさを知つてるかい、坊主の心が見えるのかよ、僕には見える、丁と見える。

あれ、松明が右へ動いた。やあ、巖の上に仰向けに伏した美人の蒼白な面を照らす。や、ナイフが閃めく。

幸木 嘘を吐け。暗くつて見えなくなつた。しかし、何しろ活劇だからな。むかうへ駆けつける氣もしないで吃驚して此處で見居たんだが、慍うなると直ぐに飛出した下江の方が餘程伶俐だ。どれ僕も出て見よう。やあ、廊下が大變な蹙音だ、どうした。

と出合ひがしらに、下江造。

下江 大事件、大事件。

幸木 何うしたく。

下江 不可い、

白川 殺られたか、

下江 殺られやせん、

幸木 助かつたか、

下江 助からん、

白川 傷か、

幸木 深いか、

下江 否、無事よ。

幸木 何を言ふか分らない。

下江 僕には分つとる、あ、切ない。(と杯洗から水を一口)あ、銀藏が眞先に石段を駆け上つた。寄せつけるものか。おい、突然上の巖へ、桃井夫人を仰向けにしたと思へ。ナイフを胸前へ突きつけて、其處から一足でも上るが最後だ、直ちに夫人を突殺す。歸つて子爵に然う言へ、時員に傳へろ。お雪を一人此の山へ上げて寄せ、夫人は無事に助けて返す。それともお雪を渡さんければ、夫人はやがて殺す、と言ふのだ。

愛

白川 痛快、あ、難有い。

下江 おまけに山中燃草を積んだとよ。すぐに火をかける、炎の瀑が巖を傳うて落ちると言ふん



だ。手桶に汲んでも五百段、水は途中で霧になつて消え了はあ。手のつけやうがないんだぜ。皆茫乎として立つて居る。註文どほりだ、自棄も此のくれえに行くとい、僕も嬉しい。

白川 感極つて泣くよ。

下江 一ツ最後の巾着でビールを抜いてプロジツトをしよう。新火山の主人、立石秋哉君の健康を祝さう。手を叩け、ビールだ、ビールだ。

幸木 氣が違つたか。これ、此の騒ぎに手を叩いたつて、来る奴があるものか。

下江 それも然うだな、構はず、下へ行つて分捕れ、分捕れ。

幸木 可からう、至極可からう。人ごろしのためにプロジツトは兎も角も、飲むだけは賛成だ。狂人どもは大事をあやまつ、先生自身に出馬とせい。

下江 待て、待て、それとも酒を持つて、三人石段へ推寄せようか。

幸木 それも餘りだ、此處で飲まう。なか／＼此の評議果てるものか。ゆつくりか、れ、慌てちやいかん。

白川 失戀家、大勝利、旨く人質を取つて呉れたな。あ、暗の山の形を見い、むだに累ねた巖ぢやない。(と又つ、と立つて、らんかんに寄る。)

幸木 下江氣をつけてくれ、落ちると不可んよ。(と廊下へ出る。)

巖に刻む鐵の、

兜に炎鏤めて、

重くかゝるよ、夜の雲。

暗はあやなし烏羽玉の、

星の光も見えぬ世に、

邪正の街あるべしや、

善惡の路分れむや。

阿修羅は今や時得たり。

天女の犠牲を取らむとす。

驚破、荒海の征太鼓

とゞろ鳴戸に聞ゆるは、

八萬四千の眷屬等。

續くよ、村の化猫も、

犬の遠吠、牛の聲。

いざ打ッ立てといふまゝに、



山の姿の一搖ぎ、

草摺長し、蔦蔓、

風倒に吹きあぐる、

峰はともしか、松明の火か、

魔軍を乗する毒龍の

焰ぞ消えて靡くなる。

(と夢中になり足ぶみをして唄ひあるく、此の内、持ち來れるビールを、二人であらかたかたづける。)

白川 (こゝろづいて) 呀、これは酷い。

下江 靜に。此の上飲れては、石段の下で口上を言はうも知れない。さあ、其のくらゐで行つて

見よう。

幸木 僕も此の狂人の療治より、怪我人が出來た時手當をしよう。

其四 桂館 (桃井子爵の座敷)

時忠 (廊下をうろく駈けあるいて) 母様、母様。

お民 まあ、坊ちやま、お危うございませす。此方へ入らつしやい。さあ、而して此の姉ちゃんに抱こをしてお貰ひなさいまし。(と小兒をお雪の傍へやる。)

お雪 (手を取つて) 今ね、直きお歸りなさいませすよ、お可哀相に、ねえ。

お民 旦那様、何とか御分別を遊ばして下さいまし。

お雪 どうにか出來ませんでせうかねえ。

桃井 己にも何とも思案に餘つた。(と腕組するのみ。)

お民 村のものも參りますし、巡査さんもお出でなさいましたけれども、何うすることも出來ないのございませす。

桃井 銀藏にも分別は出ないやうか。

お民 主人も唯うろくして、くるくまはつて居りましてね、腹を切つて申譯をしようつて、

言ひますばかりで、肝心、奥様をお助け申します考へはつきませんでございませす。

桃井 何しろ、人間業ぢやない。

と三人顔を見合せる。



其五 高張提灯 (桂館玄關)

玄禎 えへ、えへ、えへむ。大原玄禎、お見舞申す、玄禎お見舞!

(と眞先に立つ、あとから土地の大勢、老若入り交り鋤鋤萬鋤など得物を持ち、高張提灯をふりたてる。銀藏をはじめ、お品、浴客など、女中まじりに門さきに立並ぶ。)

お品 お、玄禎さん、

銀藏 おいで。先生、今、お前さんの許へ人を遣らうと言つて居た處でな。

玄禎 いや、何か早や言語道斷の儀出来、御心配でえす。立處にお見舞、はッはッ。こりや併し鍼でも膏藥でも不可でえすて、困つたものぢやが見殺には相成るまい。所謂其の……分別處で

えすて、はッはッはッ、

銀藏 玄禎さん、随分世の中嚙分けてお在でなさる。何とか分別はあるめえかね。

お品 親方も途方に暮れて居るんですがねえ。

玄禎 すんと承知、心得て居るでえす、はッはッ。其處は大原ぢや、一大事に馳せ参じた上は、謀計がなくては叶はぬ。すんと承知。玄禎引受けて、請合本復、安心なさい、所謂、其の、けろり閑たるもの、はッはッはッ、

銀藏 何、お前さん、工夫があるかね。

玄禎 ごさる、が、謀は密なるを可しとすぢや、御主人別席をな。

銀藏 それでは帳場へ。

寄合 己たちは、行つて見よう。

同 石段へ行くべい、行くべい。

同 旦那、お氣張り申しやすよ。

(と口々に一同わい〜。)

第六 桂館帳場

玄禎 さて、御主人、これは村方の若いものが、出入、又それ、水論な、なぞと言ふ、其の軽い事ではない。談判破裂、戦争ぢや。一か八か、これが病氣ぢやと峠と申す、大事な處。――のるか、そるか、取るか、歸るか、行こか、戻るかなどあつて、天下分目ぢや。

其處を、それな、眞田幸村罷出でたからは仔細ない。はッはッ、三十六計遁ぐるに如かず、はッはッはッ。

銀藏 これ、申戲ではないでえす。可い加減にしなせえ。可笑くもない。坊主に取られた人質の



夫人が遁げられるほどで、又、誰が屈託をするものか。

玄禎 其處でえすて、遁げられまい。人質は遁げられず、當方で見殺しに出来ずとあれば、和するにあり、俗に所謂和睦々々。

銀藏 其の和睦が煩かしいんだよ。

玄禎 条件でえせう、いや、どの道それ當方敗軍、戦は負だ。天守取はらひの、濠を埋めねばならんでえす。

銀藏 それがさ、桂館を寄越せでも、土地が欲しいでもねえからね。

玄禎 すんと承知、玄禎容體は心得居るてな、はッはッ。一も二もない、お雪を引渡して遣らつしやい。

銀藏 ふむ、貴公承知か。

玄禎 すんと承知。

銀藏 いや、然う分つて呉れば申分なしよ。いかに貫ひ切りにした娘でも、實の親でない、私口からは、義理として、あの娘に言はれるもんぢやねえ、第一お前、可哀相で。

玄禎 察するてな。玄禎罷出たも其處でえす。下拙が口から、お雪に言はう、因果を含めて山へ遣るぢやて。

銀藏 先生、難有え、然う分つておくんなされば仔細はねえ、併し、お雪が可哀相での。

玄禎 何に、身命に關はると言ふではない、山へ上つてからはまた、玄禎、娘に心得さする謀略があるでえす。

銀藏 ぢやあ、直ぐにお雪を呼ばう。

玄禎 待たつしやい、はッはッはッ。待たつしやい、はッはッはッ、此の急がしい處で待たつしやいと申さば……ぢや、……其處は見通し、眞珠入人參の方だて、薬價々々、はッはッ、軍用金。

銀藏 野暮は言はねえ、お前さんのこツた、幾千入るんだ。

玄禎 一千金。

銀藏 え、千圓だえ。

玄禎 はッはッはッ、鳴戸村鍼醫玄禎娘、華族の御臺所お身代り。悪人亡び善人榮ゆる大詰には、麻社祓でお呼び出し、一萬石御加増と言ふお醫者だ。一千金、大下直、はッはッはッ、直なものの！ はッはッはッはッ。

愛 銀藏 だがの、お前さんの言ふ通り、何もお山へ行つたからつて、お雪が命には障るめえ。坊さ  
火 まは死ぬほど惚れて居るんだあな。



玄禎 處が、戀の病チト手後れで療治が困かしい。狂人に刃物となつては事危い、はッはッ、お雪は一人娘でえすて。

銀藏 彼はお前、己が方へ貰ひ切りにしたんだがね。

玄禎 は、然らば此の方匙を投げて、寺方へ引渡さう。

銀藏 玄禎さん、氣障を言ふもんぢやねえ。(とおほきに不興。)

玄禎 いや、仕方がないでえす。實の親、手を引くに因つて、後は御主人御勝手に、お雪に因果

をお含めなさい。はて、あの娘は承知でも、玄禎大不服だ！(と大きくどなる)はッはッはッ、

娘は可愛うござすでな、大江山へは遣られねえです。

銀藏 分つた、千圓出さう。己の口からはどうしても、こりやお雪に頼まれねえ。

玄禎 然らば、お雪をお呼びなさい。

銀藏 直に、どれ、(と立ちかける。)

玄禎 しばらく、お待ち、御主人待つたり。

銀藏 又待てかい。(とにがくしさう。)

玄禎 いや、其のまゝ、立つたまゝでよし、立ついでに手づけをな。

銀藏 四の五のは入らねえ、(と帳場のひきだしから紙幣のたばを出して渡す)二百圓、取つて置

きねえ。

玄禎 これは御きんとう(とべらくとさつをかぞへて、丁と揃へて)確に。(と頂く、のれんの口からお勝の顔を出すのと目を見あはせ、内ふところへねちこんで)はッはッ、身代にやならねえ首だ。

銀藏 (お勝をみつけて)お雪を直ぐに、一寸此處へ。

### 其七 再出桃井座敷

お民 坊ちやま、然うおむづかりなさいましては、お父様がなほ御分別が出なくなつて、母様が餘計お歸りが遅くなります。今ね、姉ちやんも直に参ります。

まあ、お馴染なすつたと見えて、お雪さんの跡を追つてさ、お可哀相に。

桃井 次手に奥がことを忘れてくれれば可いくらるだ。(とあぐらの膝の上に突伏してしくく泣く時忠のつむりを唯撫でる。)

(お雪。——登場。)

愛

お民 もし、帳場では何の御用でございましたえ。

お雪 些とね——相談があつて、(とばかりお民の顔をじつと見る、目が潤んで、さしうつむく。)



時忠 (むくり起きて) 姉ちゃん、母様は未だ歸らないの。(とすがりつく。)

お雪 はい、もう直きにお歸りなさいます。

お民 おとなに遊ばしてね、唱歌でも唄つてお遊ばなさいませよ。

時忠 然う、嬉しいな。(といたいに手をたいて)

父は尾張の露と消え、

母は平家にとらへられ。

桃井 これ、そんな歌を唄ふ奴があるか。

お民 (かほを背けて泣く。)

お雪 (あらためて手をつかへ) 旦那様、あの。どうぞ、雪にお暇を下さいまし。

桃井 暇をくれ?

お民 お雪さん、貴女、(と向きなほる。)

お雪 唯今、實の親が帳場へ参りまして、よく申聞けました、どうぞお暇を下さいまし。

お民 (あわたしく、トン／＼と疊をたいて) これ、貴女、滅多なことを。

お雪 私さへ、祐山さんの許へ参りますれば、何事もないのでございませ。而して、夫人を無事

にお歸し申します。どうぞ、お暇を下さいまし。

桃井 (思はず一膝出で) 呀、それぢや、お雪、行つてくれるか。

お雪 え、!

桃井 よく言つて呉れた、小兒を見ちや我慢が出来ない。然うかと言つて、行つてくれとは、己の口から、嘘にも言はれた義理ではなし、白刃は渠の胸に臨んで居る。松明は縫の顔に燃えて居る。手は縛られて居る。巖へは仰向けに寝かされたり、小兒は泣く、分別は出ず。腸を搔撈つて居た處だ。む、よく言つてくれた、難有い。お前さへ承知すれば何事もなく落着する。よく言つてくれた、難有い。

お雪 (其の顔をみまもつてはらくと涙を流し、うるみこゝろで) はい、それでは、お暇を下さいませ。

桃井 何、暇をくれも何にもない、すぐにそれでは行つておくれ。

お雪 貴下。(ときつぱりいふ。)

桃井 む、

お雪 え、お怨めしい、餘りでござんすよ。(とわつと泣く。)

お民 (だまつて、涙ながら頬にうなづく。)

時忠 姉ちゃん、どうして、どうして、(とうしろからさする。)



桃井 何うした、何うしたんだ。(とこれもすりよつて背をさする。)

お雪 お怨めしうぞんじます。私のやうなものと、奥さまと、較べるのではありません。貴下が行くな、とおつしやつたつて、私、私は自分で、御山へ行つて、奥様をお歸し申しませうと、先刻から覺悟して居りますのに、一言、一言くらゐ、お前を鬼には遣らない、と仰有つて下さつたら、死にます道も張合で、どんなに嬉しうござんせうのに、暇をやるも何にも要らん、と他人よりもお情ない。——怨しいわ、お民さん。

お民 仰有つた、仰有つた、もつと仰有い、思ふ様仰有い。はい、旦那様、私からも、お怨を申します、貴下、あんまりでございませぬえ。(とこれも泣く。)

桃井 (おどろいた顔をして) いや、考へ違ひをしては不可ん。暇を取るにも及ばんたつて、何も冷淡で言つたわけではない。然うぢやないか、誰が又、縫のかはりに、お雪を鬼に遣るものか。山へ行けと言つたつて、二時間と三時間、立石の傍に居ることも又要らないほどだらう。立石は、己たち夫婦には——心得違ひぢやが——怨があるから、其はあ、云ふ狂人ぢや、縫を殺さんとは限らないが、お雪には惚れて居る。此の人の顔を見れば、角も折れよう、手も鈍らう。人質さへ此方へ返れば、後は大勢でどうもなる。罷り違へば、不埒な奴、打縛つても、直に又お雪は此方へ戻るぢやないか。誰が、鬼に遣ると言つた。いや、暇を取るにも及ばんと言

ふのは、此處だ。己は怨まれる覚えはない、分つたか。假令彼處へ行つたつて、顔を見せる分の事だよ、其さへ遠慮をして居たんだ。

お雪 否、それではお心持が違ひました。

桃井 む、何心持が違つたとは？

お民 (わきから) 仰有つた、仰有つた。

お雪 私はあの、一度お山へ参りますと、最う此方へは歸られませぬ。

桃井 それは、何故か。

お雪 貴下のお心に従ひました、私の命は、貴下のものでございませぬ。

祐山さんのお言に従へば、私の身體は、秋哉さんのものでございませぬ。唯一人のお方の外に、身體は兩方へは使はれませぬ。

それですから、お暇を下さいましと申しましたのでございませぬ。貴下が御許し遊ばせば、一旦差上げました、あの、命を返して頂いて、其を、立石さんにあげるんです。私は生きて居るつもりではございませぬ。(ときつぱりいふ。)

愛 火 お民 仰有つた、仰有つた。私がお教へ申しませぬに、何時の間にも、まあ、覺えて、婦人の道をよく御存じ。持つてお生れなすつたよ。仰有つた、仰有つた。旦那様、此の通り、顔を見せる



のなんのつて、旦那様此の通り、婦人のからだはぬけ毛をかもしにつかひますより、旦那様の事のほか人の用にたてべきものではございません。旦那様、此の通り、私がお世話申しました、お雪様は此の通り、仰有つた、よく仰有つた、私の目に間違はござんすまい。ですが、旦那様は見損ひました。はい、私が見損ひで、お雪さんには申譯がないのでございませぬ。

第一、貴下、私は此のお雪さんを、貴下のお妾にお世話申したのではなかつたのでございます。其ならば華族様のお圍ひより、荷車挽の宿が増。はじめ旦那様に、奥様はお有り遊ばすか、と聞きましたら、否、持たないと仰有いました。それは併し誰方でも、女の前では申戯にも仰有るること。

唯、恚うやつて御養生に、旅へ来てお在でなさいますのに、お宿元からお手紙と言つて、奥様らしい女の方の参りません。下心があつたものですから、濟まないとは存じながら、旦那様のお手紙だけは方々から参ります、幾通と多いのを、一々お取次致しましては、差出した方のお名前だけ、密と見ましたのでございます。二月にもなりますのに、奥様らしいのは一つもない。それでは眞個に、まだ獨身だらうと存じました。はい、淺薄でございました。お妾には、お世話をいたしません。其のかはり、榮耀榮華、御華族だと知つた上で、お世話したのもございませぬ。

ございませぬ。恚う申しては失禮ながら、眞個に貴下は、お軽々しい、おかまひ遊ばさぬ。あの私が燕の巢と申します、お酒のみの書生さんに髻だけお生やしなさいました方と存じまして、それで私が心だけに、丁とお見上げ申したのでございますのに……

あ、云ふ綺麗な奥様と、こんなお兒様までお有り遊ばす——お可哀相に其の日からお雪さんは日蔭もの。御介抱さへ出来ないで、それ、衣ものを疊め、浴衣をかけな、とまるで奥様の小間づかひ。

敵どうしのやうで、仲の悪い、お瀧の奴はお瀧の奴で、慶庵さんなどと、私のことをあてこすつて、それ見た事か、と言はないばかり。口惜しくつて、情なくつて、引撈つて遣りたくつて、喰附いて遣りたくつて、裏の小川の暗がりの、蚊の鳴く中へ、密とお雪さんを引張り出しては、どんなに二人で泣いたかも知れません。お雪さんは、何の、一生、日蔭で可いと仰有るけれど、日蔭も、ものによりけり、同じ蔭でも雨の漏る、旦那様のやうな頼もしくない、蔭は厭でございませぬ。山へ行け、一寸顔を見せて、又歸れと、それは貴下、たとひ敵だつて、何だつて、ハツタリに掛けると申しますもの。

愛 火  
眞個に口惜い、貴下、然う言ふ氣で、お雪さんを御寵愛なさいますから、お不動様の罰が當つて、お怪我をなすつたのでございます、當前でございませぬよ。



桃井 (しみぐ聞いて容を正し) いや、悪かつた。ぬけ毛をかもじに使ふより、女の身體は夫の他、用に立てるものではないと、あゝ、お前、よく言つた。都の花の姿は知つても、田舎の月の情は知らず、山へ行け、と言つたのは、つくづく己が悪かつた。

しかし聞け。お民も聞けよ。己は決してお雪を慰みものにしたのぢやない。今お前も言つた通り、己が病氣で、慍うやつて、逗留して二月にもなるに、見舞の手紙一本寄越さん。其のかはり、友達同士は男も女も差別はない、一時間に一通づゝも遣取をして居るんだ。

然う言ふ縫だ。

婦人會の、慈善會の、音樂會の、保育會の、歡迎會のと、見得に飛まはつて、良人の食物には氣もつけん、おかげで胃病になつた位よ。花の咲く朝、餘所の會へ出て働いても、雪の降る日、内に居て、暖爐を焚かうとしない。

が、操は正しからう。己は愷氣も嫉妬もせんが、いや、少々は密夫をやつても、良人の事について、些と氣をつけて貰ひたい、と思はないことはなかつた。

けれども、慈善會へ出てはならん、歡迎會を構ふなどは、これが熊や八の手合は知らず、苟も表むき世間に立つて、幾干か注意を拂はれる、己の口からは叱られない。それでは國家の風儀

に障る。

陣頭に三軍を叱咤した將軍の中に、一人くらの、國旗の色の潔く清いにも恥ぢず、赤く白く飾り立て塗り立ててプラットフォームではしやぎをる、媽々あどもに、き様たち、飯は焦げんか、機は織れたか、と尋ねて、虚榮心を一喝してくれるのがありさうなものぢや、と思つたが、其もない。いつでも縫が先だちなんだ。

國家のため、社會のための、女房は女房として、別に己は、自分の妻が欲しかつた。縫は名目だけで可い。彼は世間の細君だ。

お雪は己の女房だ。決して慰物にしたのぢやない。分つたか。いや、最う決して、山へは遣らない。

立石に、あゝされるのも、縫の方に罪があるのぢや。自業自得といつて可い。殺されればそれまでだ。本人は、何却つて、名譽の討死くらゐに思ふか分らん、打棄つて置かう。

お雪 (うれしなみだのかほをあげて) 否、其のお言で死なれます、どうぞお遣はし下さいまし。

桃井 止せ、止せ。(とたんぱくにうつちやる。)

お雪 でも旦那様、坊ちんが、……

桃井 むゝ、其の事よ。(と又當惑。)



お民 おや、お眠りなすつたさうな。(とおゆきの膝にだかれて居る時忠をさしのぞく。)  
時忠 (急に飛び起き) あい、母ちゃんが呼んでるよ、坊を、母ちゃんが呼んでるよ。(と夢中にらうかへかけて出る。)

お民 あれ、お危い。(と追つてたつ。)

桃井 これ、待て、一人で行つちや不可ん。(とて追はうとする。)

お雪 (とその袖にすがつて) 旦那様、あの、

桃井 え、其處どころぢやない、小兒が危い、寢ぼけをつた。(とつきはなして走り出づ。)

お雪 (座にたふれてハツと泣きふす。)

入違ひにばたくと来て、銀藏、

銀藏 (室の入口にかゞみ) はッ、是に、是に、(とかうべをさぐ。)

(橘伯爵、奥女中、腰元二人附添ひ——登場。)

橘 お、(と立つて、泣きふしたお雪をじつと見る。)

女中二人、白足袋ではらくと入り、お雪の左右に付き添ふ。

橘 主人、御苦勞ぢや。

銀藏 はい、お静に御對面、餘人は却つて、御氣づまり。御用あらば。……(退場。)

橘 (つか／＼と入りお雪を抱きおこす。)

お雪 (うつとりして、うしろへたふれようとする。)

女中二人 (そつとさゝへる。)

橘 嬢、娘、お、はじめて逢ひます。其方の父ぢや、親ぢや。其方の母は、大原玄禎に勾引かされた。其方は最う、爾時腹に居つたのぢや。喃、玄禎は育ての親、此の橘は實の父ぢや。此の間から此の宿に逗留し居つた、伊豆屋定七といふ小間物屋を知つて居るか。彼れは私が頼んだ探偵ぢや。

此の橘に子供がない、橘家の後を襲がせるものがない。フトしたことから其方の居所は知れたのぢやが、又然うでもない。人は氏より育といふは、かゝる悪醫師の許に人となつたれば、と念のために、さぐりを入れたが、此は私が悪かつた。

養蟲でも、ちよと鳴く。たとひ鬼でも兒ぢやものを、況して、こんな佳い娘、一も二もなく引取るべきを、氏素性を思つたばかり、澤山其方に苦勞をさした! 許して呉れよ。おもひがない事が起つた。早く来い、と其の探偵から知らせについて、直ぐに迎ひに参つたのぢや。先づ早や、喜ばせる土産がある、(とさんらしたる寶玉のゆびわを出して手づからお雪の手にはめて、一寸キスをする。) 橘雪子と彫らして置いたぞ。



聞けば何か差迫つて、お身の身體が危ふいさうぢや。さゝ、一刻も早く、恚う云ふ恐しい巖山を見ないで、私が邸へ同道せし。此のくらるな巖山は、庭の池に浮いて居るぞ。腰元どもに船を漕して、可いか、蓬萊の島に遊べ、遊べ。

腰元 姫様、

腰元 御供をいたしまする。

其八 鳴戸山波切巖石段

時忠駈けて出て、石の段二三段、上らうとする處を、時員追つて出で、留めて、坂の中段に屹と立つ。

ふりあふぐ大巖の端に、夫人のくろかみさかしまに亂れかゝりて、傍に立石秋哉、氷の如きナイフを構へて、片手に松明をばつと翳す。

桃井 立石、立石——己のいふ言を、己のいふ言を、よく聞け、秋哉、き様は、……

秋哉 (といふのにひつかぶせて) いや聞かん、何にも聞かん。己は今此の刹那に於て、汝等の暴君だ。無上權を有して居るのだ。何にも聞かん、己も言はん、が唯聞け。此の不動山の主は、堯舜の徳を襲はん、桀紂の虐を敢てする。む、敢て桀紂の虐を行ふ。諫めるものは殺す。況や

汝等、暴君に向つて、忠告も意見もあるか。道理もない、義理もない。人非人と言へ、惡魔と言へ、禽獸と言へ、毒蛇と言へ、大馬鹿ものと言へ、薄のろと言へ、厭世病だと言へ、困つたものだと言へ、華嚴の瀧、淺間ヶ嶽とでも何とでも言へ。汝等の惡言は、今此の瞬間、天に向つて唾吐くものだ。

理學士、理學士、ヴェスヴィアスの噴火を知るか。道を説いて、理を論じて、炎が消えるか、煙が散るか。

己は火山の大王だ。

汝等、服従あるのみではないか、何を因循姑息して居る。見ろ、見ろ、此の松明の火の、手許まで燃える間に、孰れとも決斷しろ。お雪を渡すか、然からずんば夫人を殺す。

桃井 えゝ、き様は、(とあしぶみをする。)

(こゝへ、小間物屋定七、お瀧に繩をかけ、警官坂井三四郎、權九郎に繩をかけて引立てて——登場。)

お瀧 おや、お前もかい、おあひただねえ。(とふてくしくいふ。)

權九 姉え、おあひただねえやな、行止りだ。(とぐんにやりする。)

火 愛 坂井 おい、祐山。



栗原 立石君とか。

坂井 間違のもと手當をした。

栗原 見給へ、見給へ、これで怨を晴しなさい。

坂井 君のした凡ての事は、本職、職務にかけて、許して遣る。

秋哉 御厚志 忝い、御厚志は難有い、——立石秋哉、謹で感謝する——が、大王の前に、繩つ

きは見苦しい。

栗原 何を、

坂井 何だと。

秋哉 無禮づら下げッ了へ！ 段々松明が燃えるばかりだ。

栗原 え、言はせて置きや、

坂井 叶はんまでも、

栗原 ソレ、(と、石だんをよぢのぼる。)

坂井 縫子 (と上にて) あれえ。(といふ。)

秋哉 (むなさきへナイフをあてる。)

坂井 残念だ。

栗原 口惜いな。(とすごとくと、もとへおりる。)

秋哉 疾く何方か返事をせんか。(と立ちあがつて一ふり松明をふる。)

(橘伯爵、お雪(盛装して)、奥女中、小間づかひ、お民。——登場。)

橘 桃井殿、子爵桃井殿は貴下か。はじめてお目にかゝる。私は本所に居る橘ぢや。此の場合何も申さん、生れてから唯今、はじめて名告合つた、雪子は私が實の娘ぢや。

様子は残らず存じて居る。子爵、御心中もお察し申すが、血統はこれより他にない、然も玉のやうな此の可愛い娘、私がお察し下さい。で、跡は兎も角、一旦これで連れ歸るぢや。雪が一寸お暇乞に参つた、——快く挨拶を享けて出發して下さい。

桃井 唯面目次第ありません。さ、雪さん、おかまひなく。

お雪 はい、(とこゑが消え、立ちかねる。)

櫻元 さあ、参りませう、あれ、火の雨がかります。(とお雪の裾をはらふ。)

此の折から松明の火の粉はらくと降つて来る。

栗原 さあ、我々も、

愛 火 坂井 一先づ、(と桃山にゑしやくして)不肖、本職出来るだけのことをした、譬ひ辭職をするまでも此の他に力がない。



桃井 御配慮何とも、(とあいさつする。)

(佐伊介、坂井、お瀧、権九郎——退場。)

時忠 姉ちゃんも行くの、(とすがる。)

お雪 (ほろ／＼と泣いて抱きしめる。)

腰元 あれ、火の雨が降りますよ。(ひきわける。)

お民 お雪さん、お嬢さん。

お雪 お民さん、山ほど御恩になりました、またお目にかゝるまで、(とさつきの指輪を抜いて、

伯爵を一寸見る。)

橘 よう心付いた、さあ／＼持つて居つておくれ、あとで禮と引返へよう。

お雪 橘雪子と彫つてあつてよ。(とにつこりして渡す。)

お民 お禮どころではございせんが、お懐しい貴女のお名、それではお預り申します。(といた

たく。)

(つゝと離れると、腕車ひきつけあり、女中、こしもと、介添して)

お雪 (乗らうとしてのりかね、うしろを見むく。)

時忠 (うろ／＼しながら) 母様、母様、母様、(とたゞひとりでつか／＼と石段七八段高く駆け

あがる。)

桃井 (差うつむいて、とめないで居る。)

秋哉 (ト上から火の燃さしを時忠になげおとす。)

時忠 熱いよう、あつ／＼、(とたふれ、やけどして轉ぶ。)

お雪 (屹とみて、たまりかね、はら／＼と引返す。)

伯爵、お民、腰元と、みな續いて返る。

お民 まあ、何といふ因果だらうね。(とこどもを抱きおこす。)

桃井 堪忍しろ、時忠。(と手をとつて) 呀、火傷をした。

幸木 それは御介抱申上げよう。

幸木勇、ものかげから出て抱取る。——

(白川、下江——登場。)

だまつて巖に腰をかける。)

お雪 お父様、(とひたと伯爵の胸に顔をつけて) 私は貴下の兒なんです。

橘 む、勿論ぢや。これ最う泣かせるな。(と背を抱く。)

火 愛 お雪 あのお兒は、今命を取られようとしてお在で遊ばす桃井の奥様の坊ちゃんでございます。



私は母様に別れました。そしてお父上、貴下にお目にかゝりますまで、どのくらゐ戀しく、悲しかつたか分りません。あの、お兒が、可哀相でなりません。どうぞ御免遊ばして、私をお遣し下さいまし。どうしても、お見棄て申しては參られませんか。

桃井 雪子さん、決して、決して。(留める。)

橘 あゝ、是非がない。引取りやうが遅かつた。同族中を尋ねても、こんな優しい娘があらうか、美しい娘があらうか。これを拾つて歸つたら、己は、己は、人に、竹取の翁と言はれうもの。

い、娘は神がをしむとやら、夢に天女を見たばかりぢや。  
雪よ、行け。大事な。ぢやが、參つたら、其の御坊によく言へよ。假令鬼でも蛇でも可い、罪人でもかまはんど。私が身にかへて世間晴れた身體にして、其方と娶はせて婿にする。早く恐しい山を出て、腰元どもに船を漕せ、蓬萊の島に遊べと申せ。な、かまへて、然う言へ、短氣をさするな。

お雪 はい、あ、あ、難有う存じます。

お民 (泣く。)

こしもと二人 (みなくなみだ。)

桃井 いや、それでは濟まん。

橘 子爵、然ほど案じらるゝまでにはなからう。雪よ、今のこと、能う心得よ、子爵、すつぱりと下さい。

桃井 御念に及ぶものですか、唯私が消え入りたい。

お雪 父さま、時員さま。お民さん、皆さん、然やうなら。(とじつとおもいれ。)

橘 然やうならではない、行つて来るのぢや、はゝ、はゝ、(とさみしくわらひ) 待つて居るぞ。

腰元 姫様、お待申上げます。

腰元 姫様、路が暗うございますねえ。

橘 誰か、あかりを、

お雪 いゝえ、どうせ冥土へ、

一同 え!

白川 一世の名譽に、失禮ながら小生の手から暗を照す光明をさしあげたい。お百姓が持つて居つた、松明を貰つて來ました。(とひざまづいて渡す。)

お雪 難有うござんす。(とうける。)

愛 下江 (つかく)と出て) 敢て神女を描くと申さん。唯今朋友が差上げた松明の火を此の目に寫さして頂きたい。世を終るまで忘れません。(と折敷いてじつと見る。)



お雪 (松明をあげて石段の上を見込んで、すつと立つて、二段ばかり静に上り) 立石さん、唯今雪が参りますよ。(とうつくしく高いふ。)

桃井 雪さん、(と追うて一段のぼる。)

お雪 (ふりむいて) 貴下に記念を、(と胸をさぐつて何かわたす。)

桃井 (手に取つて) これは?

お雪 金の鍼でござんす。養ひ親の玄禎さんが、一打打つて、立石さんを殺せと言つて、さつき教へて呉れました。汚しい鍼ですが、私の胸で清めました、どうぞ取つて置いて下さいまし。

桃井 胸へ透しても失ひますまい。一思ひに、心臓に突き通れ! (ぐいと襟へさす。)

お雪 (すぐと立ちなほると襟がからむ、駒下駄をぬぎ跣足となる。)

秋哉 待て、待て。お雪さんに來られては、火山の主権者、蛆蟲ほどの力もないのだ。刃物は持たんか、切ものは持つて居ないか、短銃は隠して居らんか。立石秋哉、貴女に抵抗は出來ないぞ。

お雪 疑ひ深い、立石さん——貴下に身體をあげるんですもの、何も隠しはしませんよ。

秋哉 い、や、貴女の心は知つて居るが、蛇のやうな、狐のやうな、我身で我身を疑ふのだ。

お雪 え、そんなら、(とおびをとく、石段へ颯とにしきの瀧、うすものをすつとぬぐと、大輪

の花うつくしくばりとなつて、長襦袢に、たいまつ影はつと映る。)

縫子 (上の段へ、夫人の姿、よろくと下りて、石段をお雪と行きちがひ、下へおりて、膝をつ

く。)

お雪 (上から白い腕をのぼす。)

縫子 (其の手をしつかりと取りあうて、そのまゝ、送り落ちるやうに下へ來て、ぱつたり倒れる。)

暗は緑よ紅の

炎を包み紫に

咀立つ巖の棧を、

白脛軽く、髪重く、

浮世をはなれ行く君の

次第に高し、裾、袂、

枝に、梢に、縫りつ、

夏藤なびく俤や。

神よ、あはれめ、チリくと

祠のあたり鈴の音は



簪の玉の揺ぐ聲。

お雪 (この時殿かげへ姿がかくれる。)

(下江と手を取り合つて白川うたひながら)

白川 あゝ、もう見えない。

下江 さあ、うしろへ下りて伸上らう、伸上らう。

(といひくお民、こし元白川下江一同——退場。)

(山の松明二つになり、しばらくもつれ合つて一處に消える。)

時員 (さつきから石のやうに立つて頂を見詰めて居たるが、此の時ふりかへつて、下に居る夫人を見て) 不埒な奴だ。……

夫人 は——(とひれふす。)

(山一面火の手あがる。)

時員 呀。

伯爵 呀!

(お雪殿角へ半身をあらはして)

お雪 もし、私が参ると莞爾して、すぐに御自害なさいました。私も最う歸りません。どうぞ此

殿山を、蓬萊の島と御覽なすつて、お心安う思召して下さいませし。お父様、時員様、おさらばでございます。必ず欺いて下さいますな。恐しい處ではありません。楽しいく、あゝ、綺麗な、殿は五色の玉を刻んで、おゝ、美しい虹だことねえ。  
——と顔白く炎を仰ぐ、黒髪が殿にかゝる。

——幕——



沈鐘

ゲルハルト・ハウプトマン氏作  
登張竹風氏譯

ともに譯之  
鏡花



人物

ハイシリヒ (鐘を鑄る人)

殖生理非衛

マグダ (其の妻)

玉木

小兒

二人

僧侶

學校長

床屋

山姥

ラウテンデライン (山姫)

朗姫

ワルドシユラアト (森の精)

虞修羅

ニツケルマン (池の精)

肉蝦魔

魔女

大勢

侏儒

大勢

村人

大勢

場所

秘密の山

麓の里



第一齣

山中、縦の大深林、左の方、奥は絶壁千丈。幽に小さく孤家見ゆ。

前の方、右に怪しき巖一座、活けるが如く兀突と聳え立ち、傍に湧出づる清水の深き池あり。岩の上に山姫居ふ。

姫の装は、十三四の少女と、十八九の娘盛りの服装とを、相半ばしたるに似たり。

山姫ラウテンデライン〔朗〕

（丈に餘る黄金の髪を搔撫でつゝ、末を振つて、此の時、目の前を飛ぶ一疋の蜂を拂ひながら）  
山姫 お前は、まあ何處から來たの。黄金の羽蟲、蜜飲み蟲、蠟造りの蟲、日向遊び蟲、いろんな名の、眞個に可愛い蟲だけれど、あれ、そんなに傍へ寄つては可厭、邪魔に成ります。今日はね、私、お姥さんの黄金の櫛で、平時の通り、髪を結ふ時分だもの。お前に係合つて居て遅くなつて、叱られると困るから。  
お去で、お去で。蜂やお前、お去でと言へば、ねえ。

私に何の用があつて。あら、私を花だと思ふの、私の唇を蕾だと思ふの、知りません、そんな事。

花が戀しくばね、森の周圍へ。蕾が欲しくば、小川の縁へ。其のお前、光つた羽で、つい一飛びに行つてお見な。  
葦、蒲公英、櫻草、花もあれば香もある。欲しいほど、蜜を吸つて、酔つて寝ん寝が出来ますよ。

往かないね、未だ。私の言ふことを嘘だと思ふの。疑深い。眞實だから、さあ、お去でなさい。貴下の路をブン／＼飛んで、貴下の御館へ、ほゝゝ、貴下の御城へ、早く御立歸り遊ばしな。

能く、お聞き。  
可憎しい、私たちの敵のやうな、麓の村の御寺の燈明、ね、其のお前、火を點す蠟を拵へる蟲では無いか。私だから可いけれど、お姥さんに見付かつたら、どんな目に逢はうも知れない、可怖いんだよ。

分つたの？ ぶん／＼云つて、まあ、怒るのかい。  
あれ、あれ、御覽な。お姥さんの、あの孤家の屋根に見える、古い煙突から、それ、それ、幽



に蒼空へ、白い煙の上るのは、お寺最頂のお前たちを、追遣らうとする氣が立つのだよ。  
合點がいつたの、ふる、ふる、ふる。最う往くの、ぶる、ぶる、ぶる。さあ、お去で、お去で。  
(蜂、衝と飛去る。)

あゝ、やう／＼飛んで去つたよ。

(姫はしばらく餘念なげに其の金髪を梳る。良ありて、巖の上より、池に半身を乗出だし、

差覗いて、調子高に)

池の主、池の主。

唯言つては聞えぬらしい。歌を唄うて呼んで見ませう。

來し方もわれ知らず、

行く末いかで辨へむ、

山の、深山の、小鳥か、魔女か。

谷の小川に流る、花の、

麓の森に香は満てど、

咲ける梢は人知らじ。

さるにてもわが思ひ、

唯、父戀し、母戀し。

戀ふるに效なき過世とならば、

よし／＼其も面白や。

黄金の髪の光り輝く、

容色麗しき、われは山姫。

(再び池の上より呼ぶ。)

池の主、さあ、出ておいで。お姥さんが樅の實拾ひの、山廻りの留守をして、私一人、どんな

にまあ退屈だらう。後生だから、何ぞ面白い話を聞かしてくれ。

其たとね、お禮には、日が暮れると、私が直ぐに黄鼠に化つて、村の百姓家の鳥小屋へ密と入

つて、遅い雄鶏を上手に盗つて來て進げようから。

あゝ、幽に水の音がする。主かい、出たかい、銀色の水玉がちら／＼して、水に映る私の顔が、

ほゝ、返事をして可笑しいねえ。今に水鏡が開けたら、主の顔が見えるであらう。(水の面を鏡

にして、我が面影に打向ひ)

あいよ、あゝ、御機嫌よう。もし、もし、池のお嬢さん、貴女、お名は、あの、朗(ラウテン

ライン)さんとおつしやいませうね。



貴女は、世界中の娘の中で、一番美しい人に成りたいと言ふお望みね。合點々々をして、然う  
だとさ。まあ、然うなの。  
是は初めまして、朗さん。

私の名をお問ひなさいますか。はい、私はあの朗と申しますよ。どうぞお見知下さいまし。  
貴女、私に指差して、何をお話なさいます。雙兒の姉妹の様な者に、指差をして在らつしやる  
のね、ほ、ほ。

貴女はねえ、戀の女神様の、あのフライヤだつて、私の此の美しいのには、逆も敵はないとは  
お思ひなさいませんか。此の、私の房々した鬢の毛の、日の色眩い、黄金の光を浴びたのが、  
水に映つて、尙の事、露に濡れたやうに成つて、何うもく、何うしてこんなに美しからう、  
と然うお思ひはなさいませんか。

脊よりも長い髪を握つて、これ、恚うやつて、さらりと捌けば、颯と黄金の網を打つたやうで、  
底の知れない水の中で、嘸お魚が驚きませうね。貴女も、さあ、髪を擴げて見せて下さい。あ  
れ、可厭な、あ、汚い、何と言ふ見つともない顔だらうね。可憎らしい、まあ、汚らしい。え  
え最う、石を投つて遣るから可い。(石を抛つ。)

それ、御覽、お前の地金が出ましたよ。私も又、平時の私に成りました。

あ、詰らない。

池の主、池の主、と言ふのにねえ。早く来ておくれでないか。私は何爲か鬱ぐもの。

お、嬉しい、見えた、見えた。

(水の面より先づ半身、池の精、ニツケルマン〔肉蝦魔〕露れ出づ。)

あ、呼んだの。呼んだ事は呼んだけれど、まあ、あんな變な顔をして。何うしたの。何時だ  
つて然うだけれど、眞個に汚らしいといつては無いんだもの、見たばかりでも悚然とするわね。

池の精 (髪の中に葦の葉伸びたり。ずぶ濡の雫を垂しながら、海豹の如く、ふうと鼻息を長く  
して、日の光に馴る、まで、鈍く眼をしばた、く。) ぶれけけつきます。

山姫 (口眞似をする) ぶれけけつきます、はい、其通り。ほ、ほ、ほ、私たちはね、今ちやう  
ど嬉しい春の盛なの。此の春の、良い香のするのが、不思議のやうな顔色ね、可哀相に、分ら  
ないのはお前ばかり。

御覽なさいな、壁の穴傳はつて歩く守宮でも、一番がけに春を知つて駆け出しますよ。油蟲、  
蜘蛛、土龍、若鮎、鶉、あの川獺、水鼠、それから蠅。草の莖。飛ぶものは鶉、苜蓿を食べる  
兎まで、春の陽氣に浮かれるのに、お前は池の主ではないか。主で居て、其の、まあ、きよと  
んとした、抜けた顔は何うしたの、餘り氣が無さ過ぎるのね。











池の精 まだく、まだく、まだ、其ばかりでは憎さが済むまい。人間と言ふ奴は、麵麩の中へ、葛縷草の種を混ぜて、搔食ひ居るが。

森の精 泣けばとて、悔めばとて、今更何の藝も無い。人間めらは因縁づくで、己達を惱ますやうに、相場を極めて居るのぢや。

扱珍らしい話と言ふは、その彼の斷崖の下の深い淵な。あれが横手へ、近い頃變なものが押立つて、其の建物と云ふのが、尖つた窓と、高い塔と、螺旋柱と、目印の礎柱、十字架のあ

る希有なものよ。

俺が敏捷い腕を見せて、巧く始末をせまいものなら、早や憎や、釣鐘を運んで来て、十字架と一所に寺へ掛けて、可忌や今頃は、ぐわんぐわらんと鳴り出すぢやつた。處を俺が働きて、其の巨鐘は湖の中へ倒落し、ぶくくと泡を吹いて、水ぶくれの溺死ぢや。何と、手柄か、俺が豪いか。いや、物語るも心地好い、其の時の様子を能う聞けい。

ほるどりほ、う、松の株に凭れて、背節で凭れて、俺が淺茅生に立つたとせい。目の前に、鬱陶しい其の寺が見えたと思へ。其を熟と饋めの、酸模を食べて居たわ、見ると食ふとに、我を忘れて。

見ては食ひの、食うては見の、氣が付かなんだが、如何な事。一寸鼻の前の、石の上に、生血

のやうな、鮮紅の胡蝶が一匹、ぶる／＼と羽たいて、苦し氣に震へて居る。何か、宛然、青苔の花を嘗めて、苦んで居るやうぢやで、來いよ、來いよ、と呼んだれば、蹣跚と來せをつて、俺の此の手へ留つたわ。

手に留まつたを熟く見たれば、何の事ぢや、例の怪物、魔の女の化けたのぢや。さて、何を言ふと聞いたれば、池の蛙がの、先刻卵をば生んだわいなう、なぞと早や愚にもつかぬ事ばかり。齒痒うて一々は覺えても居らぬが、様々世迷言を並べた擧句、ひい／＼と泣出すわ。厄介ものぢやが可哀や、と俺が撫でたり、擦つたり、深切にいたはつて遣る内に、泣聲ながら話をした。南無三、是が大變ぢや。肉蝦魔、まあ、聞けよ。

魔女の胡蝶の言ふやうは、

「ひゆつ、ほつ、ひゆつ、ほつ、勇ましい掛聲して、人間が大勢。轍の音も凄まじう、麓の谷から山へさして、體の分らぬ、何か知らぬ、忌なものをば車に載せて、押登つて來るわなう。見てあれば、鐵の牛酪樽俯向けに伏せたよな、其の形の氣味の悪さ。見たばかりでも悚然として、苔男、苔女、侏儒の一同が、慄ひ戦き居るぞなう。よもやとは思ふなれど、人間の心では、其の恐しい代物をば、寺の塔に釣し下げ、轟々と云ふ音を、天上奈落へ響かせて、山妖魔の一個を残さず、此の住家を追ひ出すばかりか、根斷しに殺して了ふ悪巧みぢや、と言ふぞな



う。」と、紫色に成るまでに、顔色變へて胡蝶が言つた。フンと云うて頷けば、魔女の胡蝶め、ぼたりと俺の手を落ちて、地の上で消失させたわ。ござんなれ一大事、思案する暇も有らうか。早脚に飛行して、山羊の小屋へ忍び込むと、固より此の山の中ぢや、折よく乳搾りの婦も居らぬ。會釋は無しに、山羊の乳にかぶり附いて、膨よかな、張切れさうな、むつちりした、三つの其の乳房の乳を一息に吸うたほどに、満と先づ腹は出來た。驚破菟れ、押出せ、と雲を颯と招いて、赤い筏に飄然と乗つて、人間ども、馬どもが、寄合うて上る處へ、唯一飛びに往つたがな。急くまい、急くまい、堪忍袋のしめどころ、と速る心をじつと壓へて、石や、垣根の陰になり、程よく成れと、や、手ぐすね引いた。不便や、魔王が待つとも知らず。ござつた、ござつた。馬が八匹、十六條の鼻息吹いて、麻繩で車を引いて、いや、がたくと拵く拵く。其の中でも、俺が近う見た一匹の馬は、喘ぎ喘ぎ、胴腹に波打つて、四ツの膝をぶるゝと震ふと、鱗爪を大地へ蹴込んだわ、一寸も最う動かぬ。知慧の不足な人間ども、何の其の、足弱車が、生きて輻を廻せばとて、あの重い鐘を積んで、山坂を運ぼうとは、始めから叶はぬ事よ。見ろ、馬は動かぬ、車は留まる、道も巖石礫々ぢや。可哀や、徒勞を折るさうな。所詮、埒明

かぬものなれば、此の上難澁させるも氣の毒。どりや、どりや、馬にも人間にも、早く樂をさせてくりよ、と其處は喃、ほ、う、此の魔物が一子相傳大慈善の法を用ゐて、呀と其の手に掛けて、一挫ぎに挫いだわ。がツキと輻が折れたと思へ、鐘がよろゝ、動く、滑ると、車の板の壞れたのが露出に見えりと諸共、轟と唸つて地響きして、眞倒に、やあ、鐘が飛んだ。巖から巖へ、跳ねるわ、落ちるわ。ぐわらぐわらぐわらと、崩れる、裂ける。土も石も一なだれ、鐘のあとを瀧になつて流れるほどに、鍛へに鍛へた鐵の響が、ゴーンゴーンと鳴渡つて、眞下の湖へ、釣瓶落しの心地可ささう、面白さ。白波が咲と立つて、天へ渦く水煙の中に、鐘はめでたく沈んで失せた。今は早や、あの寂とした湖水の底に、ゆるりと鎮座ましますぢや、ほ、う。何と珍しい話でないか。森の精の言の中に、日は漸く暮れかゝる。其の物語の終に近くなる頃より、幾度となく、山の一方に助を求むる弱々しき人間の聲聞ゆ。次第に近づき、やがて爰に、鑄鐘師ハインリヒ「埴生理非衛」病み疲れたるもの如く、弱り果てたる風情にて、孤家のあ

る方へ身を引摺つて歩み寄る。



それと見て、森の精は林の中へ、池の精は池の中へ、立處に姿を隠す。

鑄鐘師 (齡三十歳、眞蒼になりて、悲哀の色、面に露れ) 頼む——此の御内へ願ひます。助けて下さい。何うぞ此の戸をお開け下さい。私は途方に暮れました。

谷底へ落ちました者でございます。路に迷つたのでございます。助けて、下さい。何うぞ、お内の方、お願いだ、お助けを。

あ、あ、此の道り、私は、私は物を言ふのも切ないのでございます。最う口も利けん、一足も歩行けなくなりました。……

殖生理非衛、失神して、孤家の前の草に倒る。

峰幾つ、薄紫の雲緩鬣く、夕陽既に春き果てて、山嶽凄涼、夜氣冷かに風一陣す。

山姥キツチヘン〔野槌〕背負籠を背に負ひて、跛ひき曳き、峰の方より出で来る。此の姥、其の髪、白きこと雪の如きを、頬より肩へ蓬に亂して、面構男に似たり。口の邊に鬚髻生ゆる。

山姥 ほがら、朗 迎に出なさい、手を借さい、なう、今日は荷が勝ち過ぎたれば、精も張も、大抵草臥れた事では無い。やれく慾はせまいもの、我慢にも最う歩行かれぬ。朗や、ちやつと来てくれぬかよ。さて早や、埒もない、息吹く事も大儀なぞ。朗や、これはしたり、あの兒

とした事が、又遊びほうけるげな、日の暮れるに何處へ行た。

(時に身のまはりを飛びめぐる、蝙蝠に立向ひて)

何ぢや、蝙蝠か、これ、福よ、福よ。此方も新姐ぢや、そなやうに彼方へ此方へ、ふらついて歩行くまい。

氣疎う、へし込むほど啖うても、とんと腹八分目と云ふ事知らぬ、慾張つた其の胃袋も、大抵一杯になつた時分ぢやろ。姥が近くへもつと来い。なう、むさくろしい住家なれども、私が、あの小屋の中、覗いて来てくれまいか。姥がござるか、ござらぬか、御苦勞なれど見てくれさい。而しての、姥がもしござつたら、ちやつと此處まで来てくれ、と言託をするのぢやぞよ。可いか、お、賢いものぢや。其は然うと、どうやら、空合が怪しげな、また雨にならねば可いが。

(稻妻幽に峰を走る、其方の空を打仰ぎ)

あれら、あれら、稲妻のお、ん神、拜みました。見えませんでした。やれもく、又しては鳴神殿のいたづらかいなう。主が徒つ兒の、子山羊の吼聲、お辭儀なしに聞き度もござらぬ、些と嗜んでくれぬか。赤い髻を光らせさつしやるのも、眞個手柄ではない事いの、好い加減に控へさつしやれ。姫は未だか、朗よ。



(道の傍を飛びつゝある、栗鼠に又呼びかくる。)  
お、栗鼠かいの、使の賃には、それ好物の山毛櫨實を與るほどに、汝、其の捷い足で、ちやつとあの小屋へ駈けて行て、見て来いよ。姫が内にござつたら、前脚で突つ立つて、お辭儀をし

て、朗様と呼んで來され。  
(待ち倦飽みて、徐々歩を移し、脚にてハタと埴生理非衛に衝き當る。)

何ぢや、是は、是は何ぢや、何うした事ぢや。はれもやれも、心ない、足許の覺束ない年寄の路を塞いでそべりくさる、何處の心なし奴ぢや、疾と起きやれ。これ、聞えぬか、何して居る、さ、物言やれ、や！ や！ 人間ぢや、人間ぢや、お、息がないやうなが、死んだかなう、や、これ……朗！ 朗！ 來てくれさい。

さてもく人間どもは、願にかけて、恚うまで私等を苦めたいものかなう。役人といひ、出家といひ、これまでも幾度か、犬扱ひに、此の姥を追ひこくつたぞよ。酷道が、未だそれでは飽足らないで、可穢しや、死人まで持つて失せて、私が邸の門口に棄てさらす。おのれ、腹の立つ、業の煮える、憎い事ぢや、山の下の人間ども、又この死骸をかこつけに、可忌しいとぬかしくさつて、私が小屋を焼き棄てる巧であるぞい。  
え、憎や、死んだ耳にも聞きさせ、聞えるか、おのれ、啞かよ、聾かよ。

山姫、小屋の中より、何事ぞ、と云ふ目色して立出づる。

山姥 お、姫か、ござつたか。死骸に唾も吐きたいなれど、同じ人間の姿に肖た、姫を見れば心も和らぐ。なう、見やれ、こゝな者は、私が小屋を訪ね寄つた人さうなが、ものもいはねば動きもせぬで、頭も足も頓と合點が行かぬが、なう、そなた、枯草を一束持つて來て、まあまあ、此の下へ敷いて遣らされ。

山姫 お姥さん、一層の事、内へ入れては悪いかい？

山姥 何を言はしやる。内へ入れる、人間をの、當事もない、何をいふぞい。こなやうな怪しい者を、取込む部屋があるものかいの、心得違ひさつしやるなよ。(と言ひ棄てて小屋に入る。)  
(姫も續いて、内に入り、しばらくして、枯草の束をたゆげに、小脇に抱きながら、いそくと立出でて、理非衛の傍に跪く時、鑄鐘師、其の眼を開く。)

鑄鐘師 是は、可愛いお嬢さん。此處は一體何處なのか、教へて下さい。

山姫 此處は、貴方、奥山よ。

鑄鐘師 其では私は山の中に。成程、山だ。山だけれども、私は何うして參りました。此處へ來たわけを、お、お聞かせ下さい。

鐘 沈  
山姫 あれ、あんなことを言つて、私些とも知りませんの。何うして貴方の來たわけが私の方で



わかりませう。そんな事は氣に懸けずに、まあ少し落着いて、此處に草も苔もありますから、これ、ね、枕にして、お休みなさいよ。お鹽梅が悪いんだもの、休まないと、なほ悪くなりますよ。

鑄鐘師 はあ、其は最う、此の身體ぢや休まずには居られませんが。難有う。よく有仰つて下さつた。眞個、鹽梅が悪いので、私は何うかして居ますけれども、なか／＼貴女、休む處ではございませぬ。そんな貴女、悠長な、何うして是が落着いて居られますか。

(不安なる顔色にて) 何うして来たか、私は、何うしてこんな處へ。

何うぞ其前から聞かして下さい。

山姫 それは、あの、私の方で聞きたい事よ？ 貴下は何うして此處へ来たの。

鑄鐘師 是は、如何にも其も御無理は無い。あ、無理はない、何うして来た、と有仰るか。まるで何うも合點が行かない。夢だ、こりや夢だ。然うだ。え、貴女、唯今私は夢を見て居ります、夢最中なのでございませぬ。

山姫 さあ、牛乳よ、貴下、これを飲がつて、氣を確になさいまし。飲らなくては治りませぬよ。

鑄鐘師 飲みます、(飛附く如く) 飲みますとも。飲まないで居られるものか、是が。貴女のお手づから飲まして頂く。

(姫の差出す牛乳の壺に口を當ててゴツくり飲む。)

山姫 (鑄鐘師の牛乳を飲む間に) 貴下は山の事は知らないのね。麓に住んで居る人間の、貴下

おなかまのやうね。

あの、此の間もね、獵人が一人、獸の跡を追かけて、大膽ねえ、切立ての斷壁を上らうとして、崖の下へ落ちて死んで了ひました。

貴下も矢張り、そんな悪いことをなさいましたか、大膽よ、其は無理なのよ。

それでも私、何だか、あの、其の時の獵人と、貴下とは、あの、人柄が違つて、同じ人間でも、お生れが違ふやうに思はれて、あの、私、何爲か、分らない、今迄に覺えない、變つた氣がしてなりませんよ。

鑄鐘師 (乳を飲みたる後、且つ驚き且つ訝り、然も感に堪へたる如く、一心に姫を見詰むる。)

お、お、さあ何うぞ、最つと其の先を話して下さい。唯今頂きました飲物は、此の上もな

い清涼劑になつたのでございます。が貴女の其の御言は、其に百倍した結構な藥に成ります。

(また苦しげに崩折れて) 待つて下さい。私とは生れの違つた、人柄の立優つた、立派な人間……と今おつしやいました……はあ、そんな、高尚な豪い人物でも、此の崖の下に落ちるのでございませぬか。私は又私のやうな詰らない人間ばかりが、恚う云ふ目に逢ふのかと思ひました



が、成程……さあ、何うぞ其の次を話して下さい。

山姫 私の話が何になります、お薬だつて、……嘘言ばかり。貴下は。

それよりも彼處へ行つて、池の中から新しい冷たい水を汲んで来て上げませうね、貴下は埃と血とで、そんなに汚れて。……

鑄鐘師 (哀求して) 何處へも、何處へも去らつしやらすに、何うぞ、居て下さい、茲に居て下さい。(と姫の手に取継る。)

山姫 (理非衛に手を取られて、兎やせん角や、と姿優しく立惱む。)

鑄鐘師 (言を續けて) それから何うぞ、貴女の其の謎のやうな不思議なお眼で、私が何うして居るのだから見て下さい。貴女のお眼に映りませう、山と、此の高山の空氣と、劇しく行交ふ雲とが、こんな美しい臥床と成つて、私が横に寝かされて居ます、此の別世界。私は宙に居るやうで、此の天地は、私の身體を、何うするつもりだか分かりません。心細い、便りがない、お願ひでございませう、貴女何處へもお去でなさんやうに。

山姫 (安からぬ風情にて) 知らない私、貴下むづかしい事ばかり云つて、何うでも、そんなこと、私は構はないから、可いけれど、だけれど、……あの……少し何だか。……

鑄鐘師 (熱いよゝん昂ぶり、哀求の念ますます烈しく) あゝ、何處も、何處へも行つては不可

ません。何うぞ此處に居て下さい。貴女、唯今の此の私の心持と申すものは、何とも何うも、未だ貴女には、お分りになりますまい。あゝ、何うか、まあ、今の此の夢心地を、いつまでも此のまゝに覺えずに置いて頂きたい。

一體是はまあ、何うしたと言ふのでございませうな。私の方から兎も角も申して見ませうか。えゝと、恚だから、然うだ。私は貴女、谷の中へ落ちたのでございませう。……いや、何うも解らぬ、矢張り是は貴女からお話を承りませう。

何でも構ひません。貴女の御聲は、屹と其は、神が私に賜つた、天上、天國の聲に違ひないのでございませうから、唯其の御聲を聞くだけで、難有い、嬉しいのでございませう。

お話をなすつて下さい、さあ、何うぞ。何故貴女は何とか有仰つて下さいませう。えゝ、何故其の清らかなお聲で、天上の音楽を聞せては下さいませう。

あゝ、私は落ちました、谷へ。いや、最う其の事は言ひましたつけ。何うして落ちましたらう、分かりませう。些とも覺えがない。大方私の此の足が踏んでた道が、突然消えたのでございませう。

其に又、私は、自分で好んで落ちたものか、其とも可厭々々落ちたものか、其處ところも一向に存じませう。何しろ落ちた、兎も角も谷へ落ちました。砂利も貴女、土も石も岩も、私と一



所に、谷の底へドンドと落ち込んだことだけは覚えて居ります。(いやが上に熱昂ぶる。)  
 何でも其の時、私はとんぼがへりながら、櫻の樹に攫まりました。其の櫻は大本で、崖の岩の  
 裂目から、幹がすつと谷へ突出て居りましたが、情ない。攫むが否や、幹はもろく、ぼつきり  
 折れて、今を盛りに咲満ちた、其の一枝を、慙う右の手に握つたなり、花がぱつと吹雪く中を、  
 逆にドンと落ちて——谷底へ落込んで、其處で死んだ筈なんぞございます。然やう、死んだ、  
 確に死にました。だから現に慙うやつて居るのが、死んで居るのでございませう。

お前は死んで居るのだ、とおつしやつて下さい。何うぞ、而して、美しい貴女と慙うして居る  
 此の死んだ眠から、誰が來ても覺めないやうになすつて下さい、何うぞ。

山姫 (合點の往かぬ氣色にて) あら、私は、貴女、貴下は生きて居るのだと思ひますよ。眞個に  
 貴下は生きて居るの。眞個なの。

鑄鐘師 解りました、む、始めて解つた。今が今まで五里霧中に迷つて居つた人生の一大事が、  
 唯今解りました。明に悟が開けた。死生一如、生は即ち死、死は即ち生、生きて居るのが死  
 んで居るので、死ぬのが生きるのだと確に解りました。(がっくり氣落ちしたる狀になり、)  
 私は落ちた、谷底へ。生きて居て、落ちて、死んだのでございませう。  
 しかし待つて下さい。鐘が一所に死にました。鐘と私と、一二つとも落ちて死んだのでございま

す。鐘が前で私が後か、其とも私の方が前で、鐘の方が後だつたか、私にも解らなければ、誰  
 も知らう筈がない。證據を見せて、確に慙うと名告つて出る者はありますまい。え、白癡け  
 た、何を馬鹿な。證據があつたからと云つて孰方が前でも同じ事を。何しろ其時は私も生きて  
 居ましたが、今は慙うして死んで居ます。其に貴女は、生きて居るとおつしやいますね。はて、  
 分らない。又解らなくなりました。(聲も弱々と成りまさりて、)

貴女、此處に居て下さい、心細い、貴女が一寸でも見えなくなると、直ぐに冥土の一人旅だ。  
 何處へも決して、少しでも傍へお去でなさらんやうに。

お、此の手、此の貴女に絶つた此の、牛乳のやうな生白い……此の、私の手は……あ、矢  
 張り正しく私の手だ。

が、餘所の鉛でも扱ふやうで、自分の手ながら思ふやうに動きません。動かないほど私の手は  
 重いけれど、貴女の軟かな髪の毛は、其の古の靈泉のやうに、冷々と私の手の上にかゝつて居  
 る、まあ、何と言ふ清らかな、美しい貴女であらう。

其の、其の功德で、死人の手も快い。貴女は實に神聖だ、神……様でお在なされる。茲に居て下  
 さいまし、茲に。何處へも行かずに。

不寐ながら私は、はじめてのやうには思ひません。何時か貴女にお目に懸つた事があります。



何處で、お目に懸りましたかな、いや、お目に懸つたのぢやない、一目拜みたい、拜みたい、と祈つて居たから、其で、はじめてでないやうな心持がするのかも知れません。

貴女、如何に長い月日の間、貴女のために心勞し、あなたに御奉公をいたしましたか。お察しを願ひたく存じますのでございます。

はあ、唯偏に、美の、女神様の貴女の御姿を、鐘の中へ鑄込みまして、安息日に打鳴らす黄金の響に、貴女の朗な御聲を調合して、古今無い、大傑作を成就したいのが、一生の望みなのでございますが、愈々鐘を製作しますと、何時も思ふやうに成りません。失敗します。出来損ふのでございます。其の度に、私、私は、血の涙をこぼして泣きました。はい、泣いたのでございます。

山姫 おなき……なさいましたつて、なくつて貴下どんな事？ 些とも私には解ませんの。なみ

だつて、何の事？

鑄鐘師 (身を焦り) 私を、何うぞ、少しお起し下さいまし。

山姫 (物優しく助け起す。)

鑄鐘師 お手を頂きます。御深切ついで、何うぞ、貴女の其の愛のお手で、一層の事、一思ひに此の苦しい浮世から私を救出して頂きたい。

世の中は、日が毎日、一分時、一秒づゝの繩をつないで、私の身體を縛るのでございます。何うぞ、其の繩をお解き下さい。淺ましい人間の力では、あせつても、拵いても、脱けられる繩ではありませんが、貴女のお力なら何の苦もなく、瞬く間でございます。

まだ私の此の額の周圍には、名利に迷ふ心から、玉の冠のやうに思ふ、其の實、荊棘の環がからまつて、刺が肉に食ひ込んで居て除れません。貴女の其の、優しい軟かな御手で、何うぞ其の荊棘を取り除けて頂きたい。冠なんぞ、要るものか！ 唯……戀……愛さへ、頂くことが出来ませうなら……(此の時、半ば身を起したるまゝ、うつとりとなる。)

お、浮世は離れた。然うだ、難有や、嬉しや。(と氣も遠くなりて、現のありさま。)

靈妙なる哉、四邊の景色。空吹く風は微妙の音楽。樅の林に差かはす緑の柯の戦ぐのが、密かに不思議を語るやうな。樹々の梢の大空籠めて、搖ぐ形の莊嚴さ。實に神仙の棲む處、仙境の奇しき色は、森一面に紫立つて、お、さや／＼と風が囁く。ぶる／＼と木の葉が慄ふ。木の葉の聲が幽に響いて、草むらにも歌が聞える。懐しい聲、妙なる調。

やあ／＼、向うへ、霞の御衣の裳を長く、我ある方に近く姿。お、腕を伸べて招かせ給ふ。誰を、誰を。雪のやうな指をさして、理非衛を、我を、お指しあるぞ。何うぞ、もつと近う奇つて、貴女の方から、私の身體に觸れ給はれ……私の耳に、……私の目に、……舌に。



……  
呀！幻か、影は消えた。……あ、しかし貴女は茲に。私の傍に。其では今のは……貴女、姫様、貴女は仙女でおいで遊ばす。然うだ、然うだ。美の姫神でおいでなさいませ。お姫様、姫様、何うぞ理非衛に接……吻……して……く……だ……さ……い……（とばつたり倒れる。）

山姫（獨ち）まあ、妙なことばかり言ふ人だね。私には、何だか些とも解らない。  
（早や棄て去らんと心を定めて）

寝て居ると可いの。ね、然うやつて在らつしやいよ。お静に。

鑄鐘師 あ、姫君、姫君、私を接吻して、接吻して下さい。

山姫（其のあはれさを見棄てかね、行惱み、立留りて、理非衛を熟と瞻るうち、山中次第に暗澹たるに、姫は急に恐を抱いて、慌しげに聲高く）お姥さん、――

山姥（姿見えず、小屋の中より呼び言ふ。）朗！なう。

山姫 早く来て下さいな。早く。

山姥 お前こそ、歸つて来うよ。そして又平時のやうに火を焚いてくれぬかいの。

山姫 あれ、お姥さんと云ふのに、お姥さん。

山姥（未だ出で来ず、内に聲して）あの、此の娘はよ、内へ来され、歸つて来うよ。主に構つて

居られぬわ、今山羊に草を飼うて、乳を搾る處いの。

山姫 否、ねえ、お姥さん、あの此の人を助けておくれな。死ぬんだよ。お姥さん、大變なのよ。

山姥（小屋の闕の上に形を露し、左手に乳の瓶を持ちながら、聞かぬ振して猫を呼ぶ。）三や、

三尾や、猫股よ。来いよ、来いよ。

（理非衛をじろりと流眄にかけ）構はつしやるな、構ふないの。そな者の病を癒す薬の草が能う生えようで。人間と云ふものは、皆な定まつて死ぬるものぢや。爲う事ない。埒明かぬ、埒明かぬ。棄てて置くが可い事よ。好勝手に野倒死をさせて遣らされ。それが功德ぢや、罪滅ぢや。

三尾よ、来いよ、何處へ去たなう、乳をやらうぞ。はれやれ、三は何處へ往た。

山姥（唄ふ。）

眞先かけて、こりや矮男、

来たかよ、来たかよ。ふる、ふる、ふる。

山羊の乳の壺なりと、瓶なりと、

いゝもの望みやれ、遣らうぞよ。

お、矮女も来たかいの、



今焼きたての麵麩がある、

公爵の伯爵の、上つ方でも、欲しさうな。

(男性女性十個ばかりの、侏儒、嬉々しつゝ、ふはりくゝ來り集ふ。)

へえら、へえら、彦、やしやご、

おとなしうして食べうもの。

お主にも、そりや一杯、

此方にも、そりや一片。

どれも不足は、さて無からうに、

何で其の様に、まんがちな。

豆坊主よ、豆女郎よ、

其の不行儀はたしなみや。

今日は、あれそれ、氣術ない。

去ねかし、いざや去ねかし。

(矮男矮女、是にて、又ふはくゝと森に隠るゝ。)

月の出也。唯見れば小屋の上の巖の頭に、以前の森の精、虞修羅露れ出づ。此の妖魔、恰も

貝殻の如き其の掌を唇にあてて、口拍子を調べ、箆に似たる奇聲を放つて、「お助け、お助け」と人間の口眞似する。

森の精 ほ助けエ、ほ助けエ、

山姥 えゝ、何ぢやぞい。氣疎い聲して。(此の折から森を透して遙に人を呼ぶ聲響く。)

理非衛、おゝい、理非衛引

森の精 (愈々眞似る) お助け、ほう、お助け、ほう。

山姥 (岩の上の、森の精の姿を睨みて) こゝな者が、此の山に住むものは、山彦までも皆縁者ぢや、同類ぞい。其の味方をなぶると言ふは、めんえう曲事ではござるまいか。コナ狸爺が。主は、の、麓の村の、あの犬を噛み殺したり、硝子屋をせしめたり、弟子小僧を沼にはめて、首も足も、めツちや坊主など爲て居たら、それで役目は済むことぢやが、なう。

森の精 おはいはい、おはいはい、お祖母様、おはいはい。

些と其の口の端をおつねりあられい。此方こそ、何を知つて。油断大敵と言ふは承知か。唯今これへ、御客様御光來ぢやが知つてかな。恐悦至極なお客様ぢや。

ほるどりほゝう、高い處から見てあれば、池が見え候。月も候。(ト小手を翳して) やあ遠方ながら物問ふべい。



鵝鳥よ、おう、御身が其の羽の上にござるは誰方ぢや。う、しやぼんの泡吹く床屋めな。まだ居るぞ、鵝鳥よ、おう、御身が其の首の上にござるは誰方ぢや、田舎天窓の校長閣下に、十字架提げた坊様な。いや、どれもくあざやかな、鳴鼻のやうな人間首ぢや。色男揃うた、ほうほう、ふアツふアツふアツ。

(人聲前よりも稍近くなりて、)

理非衛引

森の精 (益々真似る) お助けエ、

山姥 又しても、憎や、おのれ。おのれがやうな悪魔物は、稻妻にひしやげて、おさらばになつて了やれ。

豫て姥を狙ふにつけて、名を聞いてもそ、髪だつ、校長と言ふ異な男を、おのれが口で聞かせる。まだ其の上に、和尚の事まで、高い處から饒舌り居るよ。

(拳を握つて、ハタと森の精を打挫がんず、氣構へ鋭く) おのれ、其の口を忘れまいぞ。覚えて居され。やがて此の姥が命令で、恐しげな針のある蚊と、針のある蠅を呼出して、主が許へ進ぜうまで。其の時のお主が苦惱を今、見るやうぢや。身體をさゝれの、血を吸はれの、精出して拵かつしやれ。澤山のた打ち廻らつしやれ、さて可い氣味なう。

森の精 (得たりや應と雀躍して、ひらりと姿を消しさまに) 来たぞよ、来たぞよ、ほうお祖母。

(と去る。)

山姥 可い可い、誰が其な事に取合ふものぢや。(時に理非衛の昏々として、猶得堪ふまじき苦痛の状見ゆるを、憂慮はしげに目も放たず、我を忘れて物思へる、姫の容子に瞳を注ぎて) 姫よ、内へ入らぬかいの。外は危い。私も早や眠り心地ぢや、と、ござれ寝ん寝せう。

山姥 (機嫌わるくすねながら、暫らくあつて、きつぱりと云ふ) 私は、可厭よ。

山姥 何、可厭ぢや?

山姥 可厭なの、お姥さん。

山姥 何うぞいの、何と云ふことぞいの。

山姥 だつて、此の方を、連れて行つて了ひますもの。

山姥 はて、其が、お前に何ぞいの。

山姥 私は連れて行かせない、屹と何處へも遣らぬから可い。

山姥 此の子は何うしたものぢや。其な人間が、如何な苦患を享けうとまよ、打投して措く事ぢや。また今に此處へ來せをるげな。人間どもが、其の人間を何とせうと、氣を使ふは要らぬ世話いの。人間は、人間同志、山は山づれ。何のくされ、死ぬるものは死なさつしやれ。懃ひ



呼息があればこそ苦むわ、そな肉も魂も裂けさせ、死にさせ。疾と片附くが宜からうに、  
なう。

鑄鐘師 (夢中ながら) あゝ、つかまへてくれ、太陽が逃げ出した。

山姥 こゝな者は、氣味の悪い。日輪を見たことが無いさうな。おゝ、不氣味やの、不氣味やの、  
長居は無用ぢや。来やれよ、の、年寄の言ふこと聞け、可愛のものに誰が又主悪かれ、と言は  
うぞい。(おのれ先づ小屋に入る。)

山姫 (一人物思はしげに後に残りて、安からず耳を傾く。理非衛、理非衛と呼ぶ聲次第に近し。  
姫思入あり、屹となり、すらりと立ち、花咲き香へる櫻の枝を折取りて、理非衛の身のまはり、  
地の上に、するくくと輪を畫いて、禁厭ひす。且唄ふ。)

花の一枝、不思議なものよ、

ぐるりと繞らせば輪が出来た。

是ぞ祖母さん得意の呪詛。

仇をせうとて今来る旅人、喃、旅人よ、

もはやわれらに敵すまじ。

此の輪一重を誰か破らむ、

娘御も、幼き者も、

老も大人も若人も。

(姫、闇の中に姿を隠す。)

學校長と、床屋の主人、僧と、相伴ひて森の中より辿り来る。)

僧 今、私、火を見たと思ひますが、なう。

小學校長 私も見ただであります。

僧 地體、此處は先づ何處でござらうかの。

床屋 から、分りやしませんやね。や、聲が聞えらあ、變だね、もし、あれ、又、

「お助けえ、お助けえ。」だ。

僧 と聞えるかなう、それこそ、名人理非衛の聲ぢや。

校長 はあ、けれどもであります、私には聊も聞えぬのであります。

床屋 高え處だね、何でも山の上から呼んでるやうだね。

校長 怪を語るではありませんが、我々人間たるべきものが、である。天に向うて、落ちると云

鐘 沈  
ふは、是が有り得べき筈のものでは無いのであります。凡て、上から下に向うて落つるのが、  
物體の常法で、で、あるからして山の上から谷に向つて落つるのが、是が、物理上の原則であ



るのであります。

然るに、谷から山へ落ちた。然やうなことは、天變地異にもないのであります。かうして、私は私の生命をかけて、確に保證するのであつて、鐘を鑄る名人は、先刻私が見て居る所で、約五十尋の谷の底、即ち下の方へ向うて上から科學的に落ちたのであります。山の上へ落ちると云ふやうな不思議なことは、私に於て斷じて其は許さんのであります。

床屋 串戲處ぢやありませんぜ。そら、呼んでませう、又。あれが聞えねえツて法は無えんだがね。お前さん方は何うかしてるんぢやありませんかい。確にありや、鐘埴生の聲なんですか。間違つたらお目にも懸りません、眞個のこつたが、私の腕が冴えてるからにや、山の神の髻を剃つて、御高覽に供へるんだ。

それ、言はねえことではねえ、又呼んでるぢやありませんか。

校長 何處にでありますか、何處に？

僧 其なう、「何處に」が、私も聞きたいぢやて。先づ他事より、私等は何處に居るぢやらうか。

其の事から先へ談合をして貰はねばならぬのぢや。

早や腰は痛む、の、脚は棒になる、顔から血が出る切なさぢや。是では義理にも歩行けぬぢやて。

叫び聲 お助けエ!!

僧 如何様、呼ぶなう。

床屋 御覽なせえ、おまけに近くなりましたぜ。最う是りや、ものの二間とは離れちや居ねえ。

僧 (疲れ果てて、腰を落し) 最早や、是は、車の輪で轢殺されるまでも足が出ぬ。なう、二人の衆や、迎も歩行ける事ではないで、此のまゝ寝させて貰ひたいぢやて。此の上は、此方衆、其では成らぬ、と云うて、撃据ゑて、なう、私が身を赤うさしても、青うさしても、何として何として、一寸も先へ參られる事ではござらぬ、何ともあきらめたよ、閉口しました。

其につけても思ひ出すは、思ひがけない災難ぢや。あれほどめでたい神の祭に、此の落着を見ようとは、お互に夢にも思はぬ事ぢやてなう。あゝ、信心深い名人理非衛が、一世一代見事に鑄上げた、あの莊嚴な鐘がぢやの、恠る次第に成り果てようとは、さて、おん神の御心かの。凡夫には推測られぬ、不思議なことぢや、奇蹟ぢや、が飛んだ事ぢやて。

床屋 和尚さん、貴下未だ、其の「此處は何處ぢやる經」を讀んでますか、困つたもんだ。えゝ、和尚さん、意氣地が無さ過ぎるぢやありませんか。

最う一呼吸だ、遣つとくんない、そんな御經を讀んでねえでさ。

一番駈足で遣つけやせう。こんな草原にへたばツ了ふ位なら、裸で蜂の巢の中へ寝る方が未だ



荷が軽いね。

和尚さんの言種ぢやねえが、此處は何處だと思ひなされる。そら、例の魔所がすげ、白銀嶽ツて名代なもんだ。あの妖姥の巖窟の近所の、最う百ばかり足數踏みや、其の小屋が見えようも知れねえ。だからつて、何も恐怖えことはありませんや、此方にや神様がついてまさ。ね、さあ、御輿をお上なせえ、出懸けやせう、遣つけやせう。

僧 何にいたせ、歩行はせぬぢやて。

校長 いや、其では困る、参りませう。床屋はあ、言ふ荒唐無稽な説を吐くであります、魔物の叫びが聞えるなどと言ふ事は、是が、有るわけのものでは無いのであつて、假へば又妖魔が居たにもしろであります。私は其の物に對して恐怖を抱くなどと言ふ愚な事は決して無い。だけれども、であります、妖魔は恐しく無いにしても、疾く参らないと言ふと云ふと、此の邊ほど事實又恐るべき處はありません。ト言ふのはであります。或時一人の隠者があつて、いつぞや此の峰へ上つて委細に探検をした、其の實話に因りますると、曰く、白銀嶽は、悪人、追剥、賭博者輩の極樂である、と申すのであつて、即ち、山賊が徘徊する、人殺が流行る、暗殺が行はれる、恐るべきであります。でありますから、急がなければ不可ないのであります。

床屋 待つたり、先生。待つとくんないよ。何だ、早い話が、幽霊は怖く無え、盜賊が可恐い、と慥う有仰るんだ。ね、でがせう。まあさ、そりや理窟を言やあ、そんなものかも知れませんが、だがね、先生、世の中ア廣いや。然うお前さん一が一、一に一をかけりや一になると言ふことばかりぢや納りません。算盤球で勘定の出来ないことが幾干もありません。

此の山に居るつて評判の、化物のことを言つた日にや、何うして學者の先生だつて、好い心地ぢや居られませんか。

第一ね、女妖魔が、お前さん、其の面と言つたら堪らねえ、宛然洞穴の蝦蟇だとね。其で居て、悪いことのありつただけだ。熱病を流行らす、疫病を擴げる、牛なんざばた／＼斃れる、雌牛は乳を出さねえで血を垂らす、羊には毒蟲が喰ひつく、牛蝨が集る、馬は癩癩になつて暴れ出す、中でも可哀相なのは御互の小兒たちだ。一度此の妖魔に魅込まれたが最後、助かるもんか。頭には瘤が生える、瘰癧が出来る、馬脾風を煩ふ瘡瘡を惱む、いやはや、身體中膿だらけ。

校長 日が暮れました。噫、最早、夜であります。貴下方が、然うやつて、一人は歩行けないと言ひ、一人は化物が居ると稱へるのは、凡て夜の爲であります。夜になつたが故に、氣が變になつたのであります。時に、床屋さん、お前は妖魔が居ると言ひましたね、……彼を見なさい、彼だ、何か向うに慥う動いて居るものがあるであります、あれはね、確に私が私の目で見ただのであるが、如何？ 果して妖魔でありますか。







其處へ、今木菟が飛んで行つたが、最う鳴いて居るがなう、あの樹の上あたりから出て笑うたぢやて。

床屋 それ御覽じやし、だから言はねえこつちやねえ。此の邊にや、どんな妖女が巢を食つてるとお思ひなさる。何も向うをかつぎあげて、味方の勇氣を挫くツてわけぢやねえが、彼奴等が又、麵麩を食つたわ其で可いわで、濟ませるんぢやありませんからね。一一が二の、二二が五だ。可うがすかい。大丈夫かね、恚うして居ても、私あ掛直なし、平に打明けた處が、慄へてますがね、え、あれ言ふ下から、ぶる／＼しやあがる。チヨツ何うしてくれう、山ン婆々！

僧 (手を空さまに、高々と十字架を取つて差上げつ、さすがに覺悟の面正しく、腰もしやんと、斷乎として小屋ある方に歩を進め) 如何にも言はるゝ通りであつたよ。あれに巢を組んで籠つたは、さては愈々悪魔ぢやな。可い、可い、私が此處に居る。些とも案ずる事はない。今は何事も此の僧にお任しやれ。

わがおん神の御言葉宣つて、怪しき者ども退治て見せうぞ。  
こゝな悪魔、今日と云ふ今日こそは愈々本性を露いて、私等が御法の障礙して、鐘を覆し居つたも、鐘作りの名人を谷底に落しをつたも、皆、おのれ等が爲せる業ぢや、憎さも憎い。更めていふではなけれど、理非衛どのは大檀那。精神籠めて鑄上げた、あの鐘。谷の空に、日

と月と並べかけて、平和と慈悲の妙音を、たうとう天地に鳴渡らせ、おん神の福音をば、響の物に應ずるやう、海の果まで傳へよう大結願であつたものを、邪、非道な魔法にかゝつて、湖の泡となつたは、口惜しや、無念や。悪魔、おのれ、今はおん神の利劍を翳して、眞向から破邪の法を説くばかりぢや。二人の衆、此の戸を叩いて案内しますぞ。

床屋 止、止しとくんない、和尚さん飛んだ事だ。魔物の門をトン／＼なんて、蜂の巢を突くやうな、容易なわけのものぢやねえ。

僧 うんや、留めまい、説法せずには措かれぬわ。(ト戸を叩く。)

山姥 誰ぢや。

僧 頼まう、基督信者、第一人。

山姥 ばてれんかいの、何用ぢや。

僧 先づ此處を開けて貰はうか。

山姥 (戸を開き現れ出づ。一個の山籠燈を提げながら) 何か、用でもござるかの。

僧 其の方は知りをるまいぢやが、おん神の御名にかけて、申聞かせることがある……のぢや。

山姥 おは、おは、何やら言ふわいの、おは、おは、くわあ、くわあ。

校長 黙れ、醜類。き様の運命は既に盡きた。き様には最う月日は無い。き様の岩窟、き様の罪



悪は、我々麓の信徒に取つて俱に白銀嶽を望むべからざる仇敵だ。萬一我々人間の命を奉じないに於ては、夜の明けない内に、此の小屋へ火をかけて焼亡して了ふから覺悟をせい。

床屋 (絶えず、手を十字形に、胸の上に組かけ組かけ) や……やい、睨むない、何てまあ可厭な目だ、恚う、そんな自棄に怖え眼をしておどかしたつて震へるやうな人間たあ、些と質が違はあ、山猫め! さあ、睨め、ぎよろりと遣ねえ。遠慮はねえ。如何に其の赤い目で睨んだつて、俺が身體にや十字架が附いて居るんだ。びくともするやうな甘えんぢやねえ。早く恐入つて、此處に居る男を渡しやあがれ。

僧 さ、其方の存じ居らぬ、我等基督の神の御名に誓うて、最う一度申し聞かせる。——最早や正法の前に降伏して、なう、其の方が魔法の輪の繼目を解いて、あれなる人間を渡すが可いぞよ。あれに倒れた者こそは、世に雙びなしと言はる、男ぢや、鐘作りの名人ぢや。其の上尊いおん神の眷屬ぢや、藝道の天才ぢや。

解つたかの、おん神の御名のため、又は其の方づれ魔界の物どもが、聲立てぬやうに打鎮めるため一の巨鐘を作りあげた非凡いものぢや。此の段をよう辨へて、すなほに私等に渡さつしやい。

山姥 (件の燭を手にせるまゝ、三人のたけり言ふを、空吹く風に聞流して、静々と理非衛の傍

に立出づる。) 御馳走にござる。お説法は早や澤山に下されまいた。不便な此の人の事なれば、私を知つた事ではないぞの、何ともしはせぬ、連れて行こなら、いざ、ござれ。

こりやの、些とも息吹かぬものぢやと思つたら、未だ吐く息がござるか、奇特ななう、吹けるうちだけ吹くも宜かろが、最う長い事は無からうぞの。

は、て、長老坊、今何とやら言はれたげな。名人ぢや、と言はれたがなう、名人も上手も、早や、恚うなれば埒は無いよ。

又何とやら、御身達は言はれたげな。こな者の捏ち上げた、鐘に愚癡が言はせたい、べそくと音を出させたい、と言はれたが、耳の悪い人達なう、聞えぬ耳は木耳かいの。聞えぬ耳になら音もしよう。姥がやうな良い耳には、あの鐘は鳴らぬ、響かぬ、音もせぬ。おは、聞えぬ、鳴らぬ、響かぬわいの。

何爲に響かぬ、知れた事いの。出来損ひの鐘が聞えようか。谷へ落ちた鐘が鳴らうか。沈んだ鐘が響かうかいの。

長居は御身達、爲に成るまい。疾と、これ、釣臺など持つて来て、此の若いもの連れて行かされ。さて又こゝな御名人、お上手な方……とやら、牛乳色の顔をした名人殿。起きされ、起きされ、



ちやつと起きて、人らしく舊の麓へ歸つてなう、長老さまが御説法の、口上言はしやれ。學校の教員様の、小兒を鞭つ手傳ひさつしやれ。床屋どのには……然ればいの、石鹼の泡の手間取可ござる。其で、御恩を返さつしやれよ。(ハタと地を打つ。魔の輪解くる。校長と床屋として、理非衛を抱き上げ、匆匆に擔架に載す。)

僧 物語にも聞き及ばぬ。我折れ、惡逆無道な老婆ちや。黙つて行け。地獄の道を通つて歸れ。

山姥 お匆粗やの、お客人、些と世辭言うて入らうかの。

長老坊聞かされの。私は、なう、御身が御説法を鼻唄で覺えて居るが、まあ、恚うぞいの。

あたまで世界は棺桶ぢや、とおしやる。天は(と虚空に指を立てる)其の棺の蓋、星は蓋の穴、大目輪は其の大穴ぢや、と恚うおしやる。ふアふアふア、言ふことはいの、坊様が無ければとて、大陸が海になるにこそ。御身たちが言ふ神様は、われら、惡魔と同じものぢや。あはれ御空に、眞のおん神ましますば、御身達こそ、一鞭ひしりと頂いて、大目玉を啖はうぞよ。あな、長老には何がなる、世の中の白癡がなる、やれ、氣の毒や。(山姥戸を閉づ。)

僧 此の惡魔!

床屋 ど、ど、何うか、何うか、お靜に、お靜に。眞平御免ねえ、私があやまる。あやまるから、後生だ、お靜に願ひてえ。此の上婆様の御機嫌を損じた日にや、此方人等身の上が覺束ねえ。

僧、校長、床屋は、理非衛を擔ぎて森の中より歸り行く。  
月玲瓏として、山中天地一色。

密林 鐵の如く、関として一鳥聲なし。時に三個の魔女、妖艶の婦にして、身の丈いづれも童の如きが、前後して、森の中より立露れ、圓を造りて踊りはじむ。

一の魔女 (低音にて) 姐さんえ。

二の魔女 姐さんえ。

一の魔女

白妙に、蒼澄める、

白銀嶽の月の影。

朧に涼しく何處までも、

崖の上、谷の底、巖窟の穴の奥までも。

二の魔女 姐さんえ、お前は何處からおいでたえ。

一の魔女

瀧つ瀬に、月の白玉砕けつ、

立つ波も、青き光に照されて、



音高く、落ちつゝ淵に行く處。  
濕る今宵の折よさに、

私や其處から逃げて来た。

白泡被いで浪分けて、浪分けて、  
滴る岩の戸打通り、

迎りつ、昇りつ、今此處へ。

二の魔女 (二人の魔女の傍に來り) 姐さんえ、姐さんえ、一所に此處で踊らうね。

一の魔女 姐さんえ、まあ、お前、輪の中へお入りな。

二の魔女 お前は何處からおいでだえ。

三の魔女

一寸して、慥うして、手を組んで、

私の言ふ事聞かいかい。

麓なる、岩と岩とに圍まれて、

深く水澄む、湖の候。

私が生れは湖の、其の水の中。

あら、美しや、水の面。

緑、紫、珠鏤めて、

黄金の星も輝き映る。

月の光を、颯と浴びたれば、

綾の白銀、膚に着て、

岩また岩をうち越えて、

軽い山風浮いて浮いて上へ、

昇り昇つて今此處へ。

四の魔女 (來る) 姐さんえ。

一の魔女 お踊りな。

一同

りんくるりん、ぐるくりん、

ぐるりんくるりん、くるくりん。

輪になつて踊つて、

舞ひく廻つて。



四の魔女 苔の花の、毒なおかみさんの許から、忍んで此處へ来たほどに、私は遠慮をしようか  
え。

一の魔女 お踊りな大事な、踊の輪へお入りな。

一同

りんくるりん、ぐるくりん、

ぐるりんくるりん、ぐるくりん。

輪になつて、踊つて、

舞ひく廻つて。

(時しもあれ、電光閃めき、とゞろとゞろと遠雷聞ゆ。)

山姫 (頭に手を置き、家の戸を顧みつゝ、突如として露れ出づ。月、其の面を照して、顔玉の  
光をあざむく。)

ほら、皆、魔女さん。

一の魔女

あれ、聲がする、あれ、お聞き。

二の魔女

あらちゆ、や、何やらものが出て、

私の衣ものに影塗りつけた。

年古る樹のよな脊高い御方、

早く彼方へ退いて欲し。

山姫 (森にかくれ) ほら、ほら、魔女さん、皆、――

三の魔女

あう、あれあれ、私の上衣が、

右へひらり、左へひらり、

黒い裳の、白襟の、

裾は樹の陰襟は月影、

私の上衣がひらひらひら。

山姫 われらも踊にませてたべ、可いかえ。

踊らうなあ、踊らうなあ、

くるりと廻つて舞はうよ。

銀色の魔女さん、可愛い、お兒さん。



私の姿を見ておくれ、  
きら／＼光るは銀の絲、  
これは祖母さん織つた衣。

樺色の魔女さん、可愛い、お兒さん。  
御覽な、綺麗な、私の手足。

黄金色の魔女さん、可愛い、お兒さん。  
輝く髪、見よ美しや、美しや。

いざ高く、揺つて亂さむ、  
皆も振れ振れ其の髪を。

虹の絹絲煙ると見えて、  
私の顔にかゝれば、颯と、  
黄金と光と流れ靡く。

姫様も、お踊りなさいな。お踊りなさいな。  
りんくるりん、ぐる／＼りん。  
ぐるりん、くるりん、ぐる／＼りん。

輪になつて、踊つて、  
舞ひ／＼廻つて、

山姫 あの、下の湖へ、  
前刻鐘が落ちたつてね。  
何處に在るの、魔女さん、教へておくれな。

一同

まあ輪に入つて、お遊びなさいな。  
りんくるりん、ぐる／＼りん。  
ぐるりん、くるりん、ぐる／＼りん。  
輪になつて、踊つて、  
舞ひ／＼廻つて、

われらの、皆の、足の裏、  
堇菜、蒲公英踏みはせぬ。

沈 森の精 (山羊の如く、飛び跳ねつゝ、出で来る。  
鐘 雷鳴次第に高く、やがて霹靂耳を裂き大雨襲來。)



森の精 ほるどり、踏む踏む。踏むわ、踏むわ。葦菜合點、蒲公英來いぢや、踏むぞ、踏むぞ。

何でもござれの、俺は此の、足の下へ踏みつける。苔奴が踏まれて、水をげる、げる、げる、いや、草奴が踏まれて、じうく泣く。何と、魔女ども、俺が働き見てくれたか。エイとな、エイとな、恁の通りぢや。ぶつけ、ぼつけ、はいさ、ほ、棄てとけ、ほつとけ、是はさ、戀。何が何でも、世の中、戀ぢや。雄牛がの、雄牛がの、藁の中で、フン、はあ、鼻息をの、鼻息を荒くしたと思へ。雌牛がの……ト這ひ寄るぢや。頸をのいと伸いて、へいら變な聲、異な音は何ぢやい。や、又馬の褐色の膚に、蠅が留つて、こそつくわ。はてな、と俺が熟と見たれば、其の蠅が二疋居り候。一疋は花婿で、一ツは花嫁御候ひける。は、は、。又馬の、尻尾にも蚊が留つた、蚊蚊めが足を擴げて、いや、踊るわ、飛ぶわ、此も出合ぢや。ほらあ、ほらあ、馬士の爺様が居る、可哀や色の役には立つまい、生甲斐もないと見て居たれば、下婢がのそくと人目を忍んで抱きに來た、馬と足さす祝言ぢや。いや騒動が大いわ。廐の、蒸すこと熱いと、糞が蕩ける、秣が煮える、尿が沸く、ほらあ、ほらあ、はいゆふ、はい、天下太平、春さきぢや。眞盛りの春氣ぢやわ、さて。こそくと啾いて出合ひに聲を密めたり、戀に人目を忍んだり、惚れたとて遠慮したり、氷滑りをする時代か。大聲で惚れたと言へさ、當節は何事も皆高聲の世間ぢや。ほかくと暖い、此の陽氣に我慢がなるか。何でも動くわ、唄ふわ、騒ぐ

わ。大猫、小猫が眞先で、鷹、鶯、雀、兎、鹿、雄雞雌雞、七面鳥、鶯、白鳥、鴻の鳥、鶴、告天子、鶉、甲蟲、蠹魚、蝴蝶、舞ふ踊るわ。跳ねて飛んで、どいつも雌雄追ん廻す。未だ有るわ、蝦蟇、蛙、蜥蜴、虱……それから俺ぢや。

(一人の魔女の手を矢庭に捉へて、ともに森の中に駈入る。他の魔女もちりくばらう。)

姫一人、物思に打沈み、森の淺茅生に悄然として立つ。

池の精 ぶれけけつきす……ぶれけけつきす!(池より顯る。)

ぶれけけつきす、姫御、姫御、其處に押立つて何して居るが。

山姫 あ、池の伯父さんなの、伯父さん——何だか私悲しいの、悲しくつて仕様がなないの。

池の精 (狡猾氣に) ぶれけけつきす、右かあ、左かあ、何方の目ツ子が悲しいが。

山姫 (半ば戯れらしう) 左の目なの、ね、ほんとに悲しいのが見えませう。

池の精 ふむ、見える、悲しい目ツ子。

山姫 (指を左の目に觸れ試み) 伯父さん、見ておくれ、何だか、私

池の精 どれが、どれが、何を見るか。

山姫 私の目の中にあるもの。



池の精 目に……何事か出来たが、見てやる、見て遣ろ。

山姫 何だかね、熱い滴が落ちたのだよ。

池の精 滴が落ちたか。もつと俺が傍へ寄るだ。うゝ、どれが、どれが。

山姫 (涙の露を池の精の掌へほろりと渡して) ほら、圓い、小さな、白い、熱い滴なの。伯父さん、よく見て下さいな。

池の精 是は美麗な、綺麗なもの。

何と姫御、こりや此の男にくれまいか。薔薇色した貝殻に入れて置こなら、何程か美しかろ。

山姫 然うねえ、伯父さんの池の邊へ置きませうか。然うしたらどんなだらう。

池の精 何の事ない。此上ない金剛石よ。此の滴を、片眼瞑つて覗くと、浮世一切の苦しみも樂

みも、鏡のやうにすつきりと透つて、此の寶石に映つて、輝いて皆見える。處で、人間奴が、

是に變な名をつけた。はて、何と言ふ名をつけた、涙とよ、涙、涙。

山姫 え、涙? おゝ、これが涙。まあ、涙と言ふのが此の事なら、私は其では泣いたのねえ。

あ、分つた。私ははじめて涙と言ふもの知つたのよ。——池の伯父さん、何かねえ、笑ふ事話して下さい。おもしろい事が聞きたいよ。

池の精 くおら、くおら、姫御、おもしろい話がある。が、俺が家へ來ねば聞かさぬ。

山姫 まあ、可厭な、可厭な事、誰がお前の家へなんぞ、あつかましい事を言つて。水垢臭いあの池のふちは、何うしたの。壊れて、濕つて、朽ちて居て、蜈蚣だの、蜘蛛だの、

おゝ可厭。伯父さんも伯父さん許に居るものも、皆可厭よ、私大嫌ひ。

池の精 はッあ、是は何とも御挨拶な。

山姫 あれ、又ほろりと露が落ちたよ。

池の精 降る時節、降る時節、お濕りのある時候。争はれぬ、遠くの方で雷様が光つてお在だ。

姫御見い、あの神様の長い髻は不思議な髻よ、兒たちの目のやうに、柔しう和かに光つて見える。雲が又其の御蔭で眞黒な衣の上を、菫菜色の青い光で、縦横に縫はれて居る。

眞の闇でも、電がぴかりと走ると、鳥の蹠蹠飛ぶのが見える。びしよゝゝした、あの重い翼はよ。

何と面白いか、話上手な男でないか。なあ、姫御、俺等を産んだ此の山阿母は、頭なく喉が濁いたと見えて、飲むこと、飲むこと、降りしきる水をがぶ飲みだ。草も、木も、蠅蟲めらも、

電が嬉しさに、ぴかぴかと出すあの光つた顔はよ。

くおらつくす、くおらつくす。

紫電燦然。



くわつ！ 光つた、光つた。谷底を駈廻る。やあ、あの火、蒼い火、さすが、さすが、豪傑、お祭禮の萬燈如きが足許へも追着くか。遣れ、遣れ、光れ、くわつ！ 火雷、火雷神、炎のからんだ鐵鎚を、大上段に振冠つた。驚破一打にびしりと落した、火柱一萬二千哩、瞬間にほとばしつて、したりや寺が撲られたわ。あれ、寺の塔がぐらぐらと動く、鐘樓が一ひしゃげだ、わあ！ つんのめつた、潰れた、喝采。煙が吹出る、ぶすく煙る、吹出る、吹出る。

山姫 あゝ、煩い。少し静にしておくれ、私はそんなことは聞きたくないの。

池の精 (きよとりとして) ぶれけけつきす。話せと言ふで、おもしろい事饒舌つて居るに、何をばうと考へて、何處へ空耳走らかす、此の蜂の子が。撫でろ、と云ふから撫でてやれば、チクリ刺すと云ふは主が事よ。此のしんせつものは、主が好きなやうに御意を取るに、はて怪體、此の上撫でたら横面を撲られようも分らぬが、あゝ、我ながらコリヤ氣の毒、姫御、俺が話氣に入らぬか。氣に入らぬとなら出直さずばなるまい。どんな事が聞きたいな。言うて聞かせ、これ、何とか何とか物言へ。

山姫 私は何にも聞きたくない。打棄つて置いておくれ。

池の精 何も聞かぬ！

山姫 あゝ。

池の精 (手を摺るやうに) 何か一言、これ一言でも。

山姫 私、お前とも誰とも分れて、何處かへ往つて了ひたいの。(と目に涙を湛へつゝ、あらぬ方をうつと視むる。)

池の精 (悲しげに、言切に) 何が氣に入らぬ、俺に悪いことがあるなら言へ。何をすねて何處へ行く、まさかとは思ふが、人間が居る處へ往きたいと云ふ、曲つた根性になりはせぬか。氣をつけろ、悪いことは云はぬ。

くおらつくす、能う聞け、人間と言ふものは、素は俺達親類で、同じ山から生れたものよ。初めから人間が人間の世から別に来たものではないで、半分は俺たちつながつた縁引きだわ。残る半分は、何としをつたか、其處は此の方承知せぬ。這奴等が勝手に、半分だけ、此の同胞から離れて失せて、汝等が勝手に、山一統の敵になるまで、下の地獄へ墮ちをつた。情ない、不便の奴等よ。その人間を慕うて、此の氣儘な、自由な、山を落ちて、呪はれた人間界へ入つて見ろ。足では歩行が根の無い草、ひよろくと弱い奴等で、汝が手で植ゑた樹を、汝が手で掘壞して、枯らして往くやうな白癡揃ひ。いやはや、狭くるしい窟の中で、やつと芽を出すわ、葉をだすわ、生ひ立つわ、はあ、生ひ立つて何になる、たかが馬鈴薯になる。



其の馬鈴薯め、眞闇な窟から、光明に憧がれて、疲衰へた腕を出す、莖を伸すが、何として、俺や主が見るやうな太陽は、何時になつても見えはせぬ。緑の草な、涼しい風な、欲しいほど俺等にくれる、山の、此の春の心も、對手が人間では向うづらに成つて、這奴等が根のない病みほうけた枝を坊主に枯らすまでよ。な、思ひ留れ、姫御、眞に悪い事は言はぬが。人間まじはり決してすな。片足でも往つたが最後、其のつやくとした玉のやうな首に、重い石が載せられる。陰氣な、ねつとりした暗い霧、闇の夜が、天窓から包んで了ふ。山に居て、笑うてばかり暮した此方は、泣くこと覚えて泣かねばならぬ。其の上に、昔から今に傳はる書物と言ふ窮屈なものに縛られて、手も足も動かぬわ。まだ其の上に俺等には母親の、太陽の御不興蒙り、勘當されたら何とする。思ひ留れ、思ひ留れ。

山姫 まあ、お待ち。貴下は賢いよ、お姥さんも然う云つたの、池の伯父さんは物識だつて。ぢやあ、これを知つて居て？ このね、透通つた小さな水(涙)。お前の池には無いものよ。無いから伯父さんは知らないの、分らないのよ。此の水がね、あの涙がね、人間の許へ行きたいんだつて、私に是非行けつて然う言ひます。

池の精 くおらつくす、ぶれけけつきす、氣違ひめ、其の涙の言ふことは、氣違ひの言ふことよ、行けと言つても行つてはならぬ。

千年の水を千年潜つた、賢い伯父の言ふこと聞け。人間は衣服を洗ふ。水車を廻す、野良へ出て野菜を作るぞ、其のやうな卑い業は、下男下女がすることよ。

ぶる、ぶる。是ほど留めるに往きはせぬか、此の胸騒が……心がかりな。(焦り、悶えて)山の姫君、貴い姫君。姫は山の朗様、玉の對手とならねばならぬ。此の方、緑の水晶の冠を持つて居る。女王がめさるゝ冠よ。金銀珠玉の光輝く大宮殿で、其の冠を恭しく、主が頭に載せて進ぜう。爾時姫の立たうす處は、床、天井が瑠璃色の石だたみ、机、箆箆は紅い珊瑚。

山姫 あゝ、其の机、珊瑚の箆箆、そしてお前の冠が、紅寶石だつて何だつて、そんなもの欲しくはない。お前の娘さん方に皆遣つて、立派にしてお遣りなさいよ。私はそんな冠より、此の黄金色の髪で澤山、是が私の冠なの。重くない冠なの。箆箆や、机が紅い珊瑚で出来て居たつて、蜥蜴だの、お魚だの皆一所に御飯を食べる、そんな許は大嫌ひ。蘭ね、蘭ね、蘆ね、水苔の臭のする池の中で、くおらつくす、くおらつくす居ることなんか……可厭な事。

(姫、往かんとす。)

池の精 わあ！ 何處へ、何處へ往くぞ。

山姫 (知らぬ振して、よそくしく) 伯父さんの知つた事ではないの。

池の精 (情なさ悲さに得堪へざるもの如く) うんや、知らねばならぬ事だ。一大事だ。ぶれけ



けけつきす。

山姫 可い處、私の往きたい處へ往くのよ。

池の精 飛んだ處だ、何、往きたい處へ？

山姫 あの、彼處の、あつちの方。

池の精 あ、す、この、あ、す、この、あつちの、何處へだ？

山姫 (兩の腕を衝き舉げて) 先刻の人の居る處へ。(急遽、鬱樹に隠れ見えなくなる。)

池の精 (吃驚して)

くおらつくす！

(唸るやうに)

くおらつくす！

(調子や、低く)

くおらつくす！

(あたまを振りつゝ) ぶれけけつきす。

## 第二齣

此の一室、鑄鐘師植生理非衛の住居。家のかゝり當世ならず、室も古代の獨逸風。正面の壁、半より深き壁龕に成り居りて、其中に廣き爐あり。爐の上煙突あり。折から火の燃るもあらで、銅製の鍋一個、朝ぼらけの天上より冷く掛かる。や、前に出でたる壁の半に、牛眼色の塗硝子を嵌めたる窓あり。窓の下に寢臺を備ふ。左右の壁は其のいづれにも出入口を設ありて、左の戸口は工場へ、右は廊下に通ふ。右手、前の方に椅子五六脚、食卓一つ、卓の上には恰も牛乳の壺、杯など、皿には麵麩を装たり。傍に木の桶を置く。アダム・クラフト、ペーテル・フィツシエル等の金彫の名作、嚴に室を飾りて、殊に高き十字架の上に描かれたる耶蘇磔刑の圖、最も人目を惹きて髣髴として一方に立露る。

理非衛の二子、弟「二衛」は五歳、兄「一衛」は年九歳なるが、日曜日の晴衣着て、牛乳を載せたる件の食卓に向ひ、腰を掛けたる處。

妻マダム「玉木」同様に晴衣着て、右手の廊下口より、櫻草の花束の露に濡色なるを手にしつゝ、嬉々と此の室に入り来る。

東雲の晴れ行く空に、室内白く、爽に明け渡る。



妻 まあ、御覽、一寸綺麗ぢやないか。ほら、綺麗だ事。此の花はね、母様が今背戸へ行つて見たら、花畑一面に咲いて居たの。今日は、父さんの誕生日だから、精一杯、お飾をして、お祝をしようと思つて摘んで来たんだよ。

長子 頂戴、母さん。

次子 母さん、花束頂戴な。

妻 上げますともさ。是は兄さんの。それから坊やの。可いかい、五本宛。眞個に縁起の可い花なんだから、一本だつて粗末におしでないよ。可いかい。

さあ、乳をお飲みなさい。麵麩を食べて、直ぐに御寺へ御参詣をさせうね。路も悪し、お寺は遠いから、途中でお腹が空かないやうに、皆、澤山お食りよ。

隣家の女房 (窓越しに聲を掛くる) あの、既うお目覺なのでございますか。

妻 はい、疾くから。だつてね、おかみさん、私は昨夜、些とも臥らないでございませぬもの。其でもね、別に心配で寝られなかつたのでございませぬから、可い心持に寝ましたと同じやうに、今朝は、まあ見て下さいまし。こんなに威勢が可くつて、土撥鼠見たやうでござんせう。あ、最うすつかり夜が明けましたわねえ。

隣家の女房 明けましたとも、大明けでございませぬよ。

妻 姨さん、如何で在らつしやいます。今日は御一所に御寺へお参詣がしたうございませぬ。小兒の足に調子を合せてほんの巡禮歩行と言ふ、緩いのでございませぬから、姨さんの御歩行がどんなに遅くつても大丈夫、一足御先へなんのつて御迷惑はおかけ申ませぬよ。ほ、ほ、其の癖、また今日に限つて、何だか、私はそはくして嬉しくつて嬉しくつてなりません。何うしたんでございませうね。歩くよりか翼を生やして飛んで見たい位、氣が立つてなりませんよ。

隣家の女房 待つて下さい。あの、時に御新姐さん、あなた、旦那様は昨夜お歸りなさいましたかい。

妻 あんな事を言つてさ、姨さん、良人が昨夜歸らないのは知つて居りますぢやございませぬか。でも、私は構ひませんの。唯あの鐘が、立派に山の上の鐘樓にかゝつて、村の方たちが御祝に來て下されば、最うく其で澤山。何だつて、未だ些との間でございますもの。那樣に急ぎました處で、丁と残らず濟ませますには、昨夜からかけて、今朝の唯今頃までも、休む間がないくらゐだらうと存じます。眞個よ、姨さん、一寸でも暇があつて、良人が草の上へでも寝轉んで眼を休めます折がありましたほどなら、それこそまうけものなんでございませぬもの。

鐘 沈 どんなにしまして、神様に御禮を申上げねばなりません。姨さんも御存じだわね。良人が鐘を拵へますのに、あの通り、並大抵の苦勞ぢやなかつたのでございませぬから、矢張其だけの骨



折をしませんでは、すっかり成就しないのでございませう。其のかはり、神様の大神のお報が  
ありますよ。姨さんは未だ御存じではないけれど、新らしく出来上りました鐘が、どんなに其  
は神々しく、清しやかで、不思議な音がいたしませう。今日こそは山の上で、今に其の初音が  
響きますから、まあ、是非お耳を拜借な。ほ、御祈禱のやうな、貴い御説教のやうな、美  
しい歌のやうな、慰められますやうな、幸福のやうな。

隣家の女房 え、其は最う然やうでございませうとも。就きましてでございませうがね、私が貴  
女、些と腑に落ちないことがございませうがね、あの、御名人のお内方……他の事ではございま  
せん。御承知の通り、貴下、手前どもの門口からは、此頃出来ました山の上の御寺が、それ、  
一目に見えますでございませう。處で、豫て皆さんのお話では、首尾よく、あの鐘が、お寺の  
塔にかゝりますと、其の信號に白い旗を頂へ立てると言ふこととございませう。で、ござ  
いましたね。然うしますと、最う怒うやつて明くはなりました事なり、手前どもから其の白旗  
が見えなければなりませんのに、いまだに貴女、影も見えませんでしたでございましてね。實は、  
妻 姨さん、能くはつきりと見て下さいな、然うすりや、屹と白い旗が見えますよ。

隣の女房 其が、貴女、目をどんなに開けても、見えないのでございましてね。  
妻 構ひませんわ、おつしやる通り見えますでも、些ともをかした事はありません。あの鐘の

ためには、夜晝なしに良人がどんなに、苦勞を、心配をしましたらう。一生懸命に仕事をした  
んでございませうもの。姨さん、それを考へて下さいまし、然うすりや、丁と塔につるされます  
のが、些とやそつと遅れたつて、何も心配はないぢやありませんか。屹と最う、今にも旗が見  
えませうよ。

隣の女房 はい、でございませうがね、御新姐さん、私にはどうも些と安心がなりかねます。ト申  
しますのがね、村中で皆が、固から山の上は危い危いと言ひますので、貴女近い頃も、其は其  
は薄氣味の悪い事が、一度ならず二度ならず、山の上でありましたと申すではございませうか。  
つい過日ださうでございませうがね、村の石工さんが、山で石を切つて居りますと、まあ、飛で  
もない、一人裸身の女がね、野猪の上に突乗つて、麥畑を風で煽つて、すつ飛んで参つたさう  
で、此の化物、と、石工さんが貴女、よせば可いのに、石を取つて、其の裸に投げつけたさう  
でございませうよ。恐しく祟るではございませうか。其の時から投げつけた方の石工さんの右の  
手は、骨まで腐つて、ぶらんくになりましたつて、現に見ましたものがございませう。何でも  
人の風説では、山の上の其の魔の人たちが、貴女の御名人の、今度の鐘一件について、大層腹  
を立つて居りますさうで、貴女が其を少しも御知りなさらないので、私には不思議なのでござ  
いますがね。最う貴女先刻もね、何でございませうか、村長様が五人と六人、供をお連れなすつ



て、山へお登りになりましたがね、皆さんの御話を聞きますと……  
妻 え、！ 村長さんが、山へ、あの山へお登りなすつて。どうしよう、私、大變だわ、姨さん、  
どうしませう……

隣の女房 それ言はぬことか。まあ、落着いておくんさいよ。未だ確と恚う、と言ふではなし、ほんの其風説ばかりでございますから、そんなに御心配なさいませんでも可うございます。あれ、吃驚なさらないでさ、別に差當り變が在つたと極りはしませんから。御氣を靜にお持ちなさいまし。風説でございますよ。可うございませうかね。ほんの是も風説なのでございませうれどもね、あの貴女、鐘を載せて参つた車が、途中で壞れましてね、え、鐘も、何、とか、なりましたと、云ふ話でございますが、否、鐘が、何と、成つたんだか、何、貴女、まだ、其處までは誰も知りませんのでございましてね。

妻 鐘なんか、何の、鐘なんか、滑り落ちようと、轉がらうと、そんな事は何うだつて、構ひません、大切な理非衛さんに怪我さへなければ、然うぢやないの、姨さん……一寸、私や、恚うやつて胸に花を付けて居ます、此の花は除りたくないわねえ。と然うかつて、此の儘ぢや居られないし、まあ、私何うしませう、何うしませうね。誰も様子を知らないんだつて、姨さん私ね、此の花、此のね、衣物のまゝで、一走り駆けて往つて來ますから、子供たちを預つて下

さいまし、姨さん、預つて。(二人の子供を、窓よりあたふた手渡しつゝ) 預けましたよ、姨さん。

隣の女房 宜うございますともね。はい確に坊ぢやん方をお預り申しますよ。

妻 それではね、姨さん、二人をお内へ置いといて下さいましよ。私、出来るだけ、急いで往つて、もしもの事があつた時にや、屹と助けて上げないぢや……え、ト、はてな、あ、して恚うして、まあ、何を何うするんだつたらうね。(慌しげに出往くとて) 然う、然う、然うだつて、大事な内の、名人の、理非衛さんを見なくつてはならないんだよ。

隣の女房も續いて窓より見えなくなる時、わや／＼と大衆の聲す。とばかりありて胸を貫く一聲は、凶事に驚ける玉木の叫び。

眞先に、以前の僧、一人忙しく入り來り、歎息ついて眼を拭ひ、頻に物を求むる状にて、遍く室内を响したるが、急ぎ寢臺の衾を披き、再び踵を廻らすとて、戸口にハタと出合頭、校長と床屋と理非衛を載せたる擔架を擁して、よろめき來る。

横はりたる理非衛の上は、緑の色滴るばかり幾條ともなき青葉の枝を以て蔽はれたり。失望落膽、殆ど失神せる妻玉木、其のあとより随ひ入る。

村の男、村の女、二人して、ともすれば倒れんとする玉木の身を左右に支ふ。民衆大勢又其



のあとより續き来て、とかくして理非衛を臥床の上に打臥さしむ。

僧 (玉木に向ひ) さて名人理非衛殿お内方。しつかりして貫はねば成らん。何事も神がまします。早やこの理非衛殿は、擔架の上で死なれた事と、私達一統あきらめて居たのぢやが、それさへ途すがら息が出てなう、途中で醫師に診て貰うたれば、まだ望があると申したぢやて。妻 望みが……あると言ふほどの容體でございますか、まあ、何と言ふ情ない事だらうね。怨みます。神様怨みます。嬉しい楽しいと思つたのも、夢のやうで、私は何うしたの、何うしたの、神様何うしたの、何事が起つたのでございますえ。あれ、何うしませう、子供が何處へか参りました。

僧 信心なされ、信心、信心してなう、しつかりするのぢや。内方、何にも言はぬ堪へさつしやれ。

心昂ぶれば神を怨む、人間は何處までも、我がおん神に對しては、謙遜が肝要ぢや、なう災難の最も激しい時にこそ、おん神の御力、其の御救が一番近う、目の前に露れ在すのぢや。して見ればなう、怒る禍の湧いたのが、却つて、おん神の御力を見る好い機會ぢや。これは平素の説教にも、くれぐれも申置いた事ぢやなう、お内方、萬が一にもおん神の思召しで、うつし世の此の世に於て理非衛殿本復がない場合にも、貴女は其で安心して、自分で慰める事が出来

ますぢやらう、なう——おん神は理非衛殿に、永遠の喜悅を、天國に於て御恵みになるのぢやからなう。

妻 可厭でございます。慰められるやうになつて可いものでございますか。慰めだなんて、そんな事に成つては大變でございます。治りますよ、良人は癒りますからそんな取留めのない慰めなんて厭でございます。何をおつしやるのよ、お上人さん。

僧 道理ぢや、はい、道理ぢやよ。私達ぢやからと云うて、貴女が慰められ、安心をなされうよ。り、理非衛殿が全快なざる、方をば、皆一同に望みますのぢや。が萬一の事ぢやてなう、萬一然やう参らんで、もしもの事のあつた時ぢや。さ、其が矢張おん神の思召しぢや。と慰められて貰ひたいぢやて。いや、先づ其は何方にもせ、理非衛殿は天晴ぢや、天晴な勝利でございます。おん神の御爲に、理非衛殿は鐘を鑄られたぢや、なう、鐘を。おん神の御爲に、理非衛殿は山へ登られたぢや、なう、山へ。山がぢやて、谷、淵、壑、巖の狭間まで、残らずおん神に反抗する魔物の巢ぢや、其の山へ登られたわさて。またおん神の御爲に、理非衛殿は谷底へ墜ちられたぢや、なう、谷底へ。さ、是がと言ふに、名譽、理非衛殿の手に成つた鐘が、おん神の福音を傳ふるほどの名作であればこそ、這奴、惡鬼どもが恐をなして、地獄の同盟を造り居つて、此の通り仇をしたのぢや、なう。然るに因つて、理非衛殿は無慙な惡魔と戦はれたのぢや、名



譽でござる、天晴ぢや。神罰は靦面に悪魔に向うて報はれまするぞ。理非衛殿は末代までも大勝利ぢや。

床屋 まあさ、和尚さん、お説教はお説教にして、私はね、何でも、此の近え處に、病氣でも怪我でも御祈禱で以て、立處にだ、其の速に治すつて、女醫者が住んでる事を聞いてますがね。

大昔、基督のお弟子等が、爲たやうな、不思議な功力を授つてゐると言ひますぜ。

僧 成程なう、はあ、お前さん一つ早速に其の名醫を捜して見てくれまいか、捜しての、居たらば直ぐに來て貰ふやうに計らうてなう。

妻 良人は何うしたの、何うしたんでございますよ、皆さんと言へば、何をそんなに見て在らつしやいます。物見、見物をなすつてさ、餘り心無いぢやございませぬかね。お歸りなさいまし、歸つて下さい。そんなにつけくと、此な可哀相な人の顔を御覽なされるものぢやありません、可厭でございますよ。最う何うぞ、貴方がた、一層、此の人の顔を、布で隠して下さいましよ。そんなにして見て在らつしやると良人は死んで了ひます、はい、死なないまでも汚れますよ。さあ、お歸りなさいなね、そんなにしても人の顔が見たいのなら、手品つかひの許へお出でなさいましよ。私は、最う……一體まあ、良人は何うしたんでございますの、よう、貴方がた、聞えませんか、ものを有仰つちや下さらないのかねえ、誰方も。

校長 其、其の事でありませぬ。はい、如何にも其の事でありませぬが、殖生氏が何うして恚やうな運命に陥られたかであります、其が其の私どもには皆無了解が出来ないのであります。唯々不思議に存じまするので——最初、其の實は殖生氏が、鐘の墜落します際、其の鐘を捉へました機會で、鐘と一所に落ちられたのであります。以上其だけは私が現に確に見て居りました、覺のあります事です。奥さんが萬一此の事に就いてお疑ひがありますなら、現場の彼の岨であります、其處へお出でになれば能くお分りになるのであります。眞個其の時の事たるや、思ひ出しても悚然とするのであります。で、尙の事、奥さん、貴女は神に感謝の祈禱をお捧げにやらなければ成りませぬ。

何故かならば、其の危難に遭遇して、理非衛氏が尙以て現下に生命を失はない、呼吸が通ふといふのが、全然神の奇蹟であります。不可解、不可説、實に是不可思議で、私は斷言します。實に是は、一大奇蹟でなければなりません。

鑄鐘師 (弱々しく) 水を、水を、

妻 (夫の聲に飛立つばかり) 皆さん、歸つて、歸つて下さい。

鐘 沈 内方がある、言はれるものぢやからなう、誰方もお歸りなさるが可い。此處は靜にして置かぬとなりませぬぢや。



(大衆則ち出で去る。)

私わしで用ように立たつ事ことなら、何いつ時ときなりとも遠慮えんりよせず、なう。私わしは此處こゝに控ひかへて居をるで。

床屋とこや もし、私あつしも居をますぜ。

校長こゝ 此處こゝに、私わしも居をるであります。

妻い 否い、否い、誰方だなたも在いらしては不可いません。否い、可厭いでございます。

鑄鐘師あ、水みづを一口ひとくち——

(僧そう、校長かうちやう、床屋とこや、各自おのづから肩かたを揺ゆり動うごかし首くびを振りて、相議あひぎしたる後のち、見返勝みかへりがらに皆出みなでて行く。)

妻い (水みづを調ととのへ、夫をととの傍かたはらに摺すり寄りつゝ) 貴郎あなた、理非衛りひゑさん。

鑄鐘師あ カツ喉のどが渴かわく。水みづをくれ。え、聞きえんのか。疾はやく。

妻い (氣きもそゞろに我われを忘わすれて) 堪忍かんじんなさいよ。ね、堪忍かんじんして下くださいよ。どんなにまあ、お辛つらい

だらうねえ。

鑄鐘師あ 是これを堪こらへろ、と云いふのか、玉たま、玉木たまき、俺おれは最もう疾とつくから堪忍かんじんの仕通しどほしだ。俺おれは可いい、

が、お前まへは、可哀相かはいさうに是これからしばらくの間あひだ、散々さんざんいろいろな堪忍かんじんをすることを、是非ぜひ覺おぼえなければ

ならんのだ。(水みづを通して) 難有ありがたう。

妻あ あれ、何なんでござんす……そんなことを言いふものぢやありません。そんなことを言いはれると、

私わたしは悲かなしくなりますよ。

鑄鐘師あ (熱昂ねつたかぶりて、意氣激いきげしく) え、今悲いましくなるやうで、お前まへ此こゝの後何ごうする積つもりだ。たと

ひ俺おれが居をなくなつても、生きて居をなけりやならんお前まへぢやないか。

妻あ 貴郎あなたに死しなれて、何どうして生きて居をられませう。私わたしや又また生きようとも思おもひませんから。

鑄鐘師あ それ、そんな悲かなみ、其それは小兒こどもの悲かなみだ。大人氣おとなげないことを言いつて、俺おれを困こまらせてくれて

は困こまる。お前まへは母様おつかさんぢやないか、子供こどもたちの母様おつかさんだらう、そんなことを考かんがへる權利けんりはあるまい。

分わかつたか、言いふことが分わかつたら、氣きを取直とら直ただして取亂とらさないやうにするんだよ。可いいか、分わかつた

かよ、おい。

妻あ そんな、貴郎あなた、そんなに叱しかつて下くださんな、ねえ。

鑄鐘師あ (心苦こころぐるしげに) 叱しかる、何叱なにしかるものか。叱しかるのではない、眞個まったくの處ところを言いつて聞きかせるんだ。

これ、お前まへの司つかさどるべき領分りやうぶんと言いつては、子供こどもの臥床ねどこより他ほかにはない。樂たのしみも、苦勞くらうも、幸福かうふくも、

生命いのちも、お前まへの身みについたことは、不殘其處のこらわに、凡すべて、白しろい掛蒲團かけがとんの下したに入はいつて居をる。もし然さ

うでないと言いへば、人ひとの母親ははおやとしては、怪けしからん、不都合ふつがふな母親ははおやと言いはねばならんが、何どう

だ。

妻あ (夫をととの上うへに身みを投なげかけ) 私わたし何なんうしませう、何どうしませう、私わたしは、子供こどもより、私わたしの身からだより、



何より、どんなものより、貴郎を愛して居るんでございますのに、ね。

鑄鐘師 あ、もう何にも云つてくれるな。早く夫に別れて、婦になるお前は實に氣の毒だ。しかし、お前の口から麵麩と牛乳を引手奪らねばならん運命に陥つて居る俺の方は、其の上なほ幾層倍か氣の毒なあはれな者だ。其のお前、其の大切な麵麩や牛乳さへ、今の俺の唇の上に来ては、毒になるやうな此の、心地だ。仕方がない、其も可からう。あ、最う宜しい。では玉木、左様なら。お前、息災で暮しておくれ。免がれ難い運命は、人間致し方がない。諦めるんだ。人は死ばなが咲くと云つて、昔から眞暗な死の影が、却つて難有い光明となつた人達は幾干もある、俺も正しく其の一人だ。

(優しく) 手をお出し。嗚呼、言なり、仕打なり、随分濟まないことをしたつけな。幾度もお前の其の愛情に傷つけたものだった。今となつて、氣のつかない事はない。許しておくれ、何もそんなに、邪険にしようと思つたのぢやないけれど、つい邪険にしないぢや居られなかつた。性分だ。お前にも辛い思をさせれば、それで氣の毒な思もする、自分が好き好んででもするとか、皆、何かが来て、無理に然うさせたんだ。玉木、許してくれ、堪忍しな。

妻 何を貴郎に、私が許すことがございますの。

私、私可愛いと思つて下さるんなら、そんなこと、どうぞ、おつしやらないで下さいまし。然うでない私、涙がこぼれますもの、泣きたくなりますもの。其の位なら、一層叱つて下さいましな。いつものやうに叱つて下さい。あやまるなんて、そんな貴郎、何でございますねえ。私に取つて、貴郎はどんなに貴い方だか、私の心を知つて在らつしやりながら。

鑄鐘師 (何とも心苦しうに) 然うとは思はん、俺は知らんよ。

妻 否、あなたは、私を女房にして、私の身を引立てて、私を人間らしくして下さつた方ではありませんか。不束な、何にも知らない、賤しい、そして苦勞性な、陰氣な、丁どあの、灰色の雨雲の下に曇つて居るやうな者を誘つて、嬉しい、嬉しい世の中へ連れ出して下さつたのは、貴郎、貴郎なんでございますよ。私はもう、貴郎が私の顔を、闇の中から、わけもなく光明のある方へ向けて下さつた時ほど、貴郎の優しいお心を、染々ありがたく思つた事はございません。それほど大切な貴郎に、私が許す、堪忍する、そんな事があるものでございませぬか。まあ、私は最うく私の生命を上げたつて、それだつて、迎も其の御恩返しは出来ないものと思つて居りますのに、其、其だのに。

鑄鐘師 人の脳髓と云ふものは、あ、あんな、いろんな、異つた間違つた事を考へるものだと見える、玉木、何を言ふのだ、俺が、何、それほどの事をお前にして居よう。

鐘 沈 妻 (夫の髪を撫でつ、優しく) こんな不束なものでござんすけれど其方此方、何や、彼や、



貴郎のためには精一杯、世帯だの、工場だの、お心の慰むやうにと心配して、貴郎、お世辭にも喜んで下すつた事もありますもの、其の私ではありませんか。些しは可哀相だと思つて下さい——心の張裂けるほど、御恩返しなり、旁々どうにかして上げたいと思ひましても、足りない、氣の利かない私の事、此の上何うしたら可いんだか途方に暮れて了ひますよ。

鑄鐘師 (安からぬ思ひにて) 構はんよ、可いではないか。神様のお心まかせ、難有がつて死ぬんだから。しかしまあ、恚うして生きて居る内に、もつとお前附着いて、まあ、俺の言ふことを……苦しい、聞えるかい、こんな聲で。

今死ぬのは、お前に取つて、また俺にした處で、爲に悪いことはないと思ふ。お前、然うやつて花が咲いたやうに俺のために榮えて居るのを、俺の力、其の俺の力で、お前に花を咲かせたと思つてゐるやうだが、其は違ふ。間違だ、何處に俺に、そんな不思議な力があらう。皆他ならぬ神様の、な、今日は暖い春の千萬種の花を咲かせ、明日は冷たい冬の嵐を吹亂して、可惜其の美しい花を鞭撻くことの出来る、不可思議な技倆を持つて居らるゝ、其の神様の力なんだ——俺が死ぬのは二人の爲だ。能く見な、俺の此の身體を。矢張是は、神様の腕で出来たのだが、あゝ、神と言ふ傑い鐘鍛冶も、理非衛と言ふ此の鐘ばかりは遺損つたぞ。俺の身體は古臭い、腐つた、不狀な鐘だ。其處で、玉木、是れ以上には俺を拵へて下さらなかつた神様が、今

自分を、こりや出来損ひだから、と言つて此の世から鑄潰して、地金に戻して下さるのは、當前の事と言はねばならない。俺は些とも悲しくない。次手に其の俺を、出来損ひの鐘と一緒に一思ひに谷底へ蹴込んで下すつたのも、聊かも怨と思はん、却つて難有い、難有いと思ふぞ。つくづく俺の拵へた、あの鐘は愛想の盡きた拙劣だつた。玉木、谷底へ轉込んだ彼の鐘は、今思へば彼れは山の上にと云つて出来たのではない、白銀嶽の頂へ懸けて、千山萬嶽を揺り鳴らすやうに作られた、そんな立派な作では無かつた。噫、噫。

妻 そんな事を、貴郎おつしやいますけれど、何うも私には合點が行きません。まあ、貴郎、あれ程衆さんが賞めて下すつた鐘ぢやありませんか。瑕と云つては、毛ほどもなし、響と言へば、あの通り、涼しい、清らかな、「さすがに名人の作ほどある。天人の聲を聞くやうだ」ッて、鐘が、樹の間にかゝつて、はじめて音を響かせた時に、皆さんが言合はせたやうに、然う云つて下すつたんでございますもの。

鑄鐘師 (熱又昂ぶる) 谷の中で唸つて居れ、駄目だ、山の上で鳴り得る鐘か。

妻 否、お上人様が何とおつしやいました。あの時、伴僧の方に「何うぢや、今の聲は、是が山の上なら何のやうに響き渡るぢやらうなう。」と然うおつしやつたのを、貴方、お聞きなさいましたではありませんか。えゝ、然うぢやありませんか。



鑄鐘師 何と云つても谷底で呻く奴だ。山の上では駄鐘だよ。俺が知つてる、分つてるんだ。和尚如きが何を知つて——え、死了へ。俺は玉木、死たいよ。何爲だつて、お前、假令俺が治るにしろ、下手な外科醫に傷を縫はせて、痛い思を我慢して、病院に昇込まれた擧句が、チヨツ、難有い、立派な癡人だ。癡人に成つて何うする。

浮世の潮——人世の熱い水は、從來、俺の身に取つて、苦い時もあつた、甘い時もあつたが、苦くも甘くも飲む時は何時も強かつた。きり、とこたへたものだつた。其を此の上、俺に、今の身體で活きよと言ふのは、丁ど其の強い熱い人生の水を、甘くも鹽氣もない、稀薄な、氣の抜けた、腐敗した冷い汁にしてへ、と云ふのと同じだ。

馬鹿な、そんな水、飲みたい奴は勝手に飲め。俺は厭だ、引退る。引退つて、遠くの方から見ればかりでも、嘔吐くくらゐだ。まあ、お聞き、何にも言はずに——可いかい。また、お前の丹精で、名醫を此處へ連れて来るか。俺をもとく通りの身體にするか、舊の嬉しい世に還すか、もとのやうに仕事の出来る立派な俺にしてくれるか。してくれた處でだ——矢張駄目だ、それでも死ぬんだ、所詮死ななければならんのだ。

妻 ぢやあ、貴郎、それでは何うぞ神様かけて、私に聞かして下さいまし。貴郎のやうな、腕もあり、技術もあり、生れも人にお優れなすつて、誰にも賞められ愛せられ、其の道にかけては、

名人上手と仰がれて在らつしやる貴郎でありながら、何故、何う言ふわけで、そんな事をおつしやるのでございませう。

貴郎が喜んで、仕事して、辛苦してお拵へなすつた、何百と言ふ鐘が、何百と言ふ鐘樓の上から、残らず聲を出して、音を揃へて、異口同音に貴郎の名譽を歌ひ囃して居ますではありませんか。

町の上、畑の上、村、郡の上へ、あの何百の鐘が、皆貴郎の其の高尙な、お心の美しさを、杯から水をあけるやうに、何處も彼處も一面に灌ぎかけて居るではございませんか。夕暮方の、紫染みた紅色の中へだつて、朝日の黄金色の中へだつて、貴郎は、貴郎を入れ交せて在らつしやるんでございますもの。それほどの尊いものを、理非衛さん、貴郎は人にお恵み遊ばす、大福長者で在らつしやいます、眞個に、貴郎は神様の聲を其のまゝの、鐘のお身體でございませよ。

他人をまあ、御覽なさい、誰も皆心では、其の日其の日の食物につくして、歩行いて居るのに、貴郎は、唯人に是遣らう、と云ふ幸福の外には、何の慾もないほどな、氣高い富有ではありませんか。

其の貴郎が、日々の苦勞で成就なさいました、お仕事を、難有いとは思ひませんか、ねえ。そ



れほど此の世が厭で厭で厭々なさいました方が、何うして私には、世の中が嬉しいやうに見せて在らしたたのでございます。皆私が足らぬ處から、癩癩を起して、そんなことをおつしやるのでございませう。いくらこんなものだつて、詰らない一厘二厘を投げるやうになすつたら、私は何うなるとお思ひなさいませえ、何うしませうね、もう私は、……

鑄鐘師 これ、俺の言ふことを誤解、然う、悪く取つてくれては困る。お前の言は、俺が作つた、何の鐘よりも朗に鳴つて、深く此の胸へ響く、嬉しい。

しかし、俺の言ふことを能く料簡してくれなくつては不可ん。同じやうな事だけれど、俺のあの今度の鐘は、眞個の處失敗したのだ。

ひッ、ふう、勢よく掛聲して、皆の者が、おのれ悪魔を呪の意氣組。山の上を睨上げながら、ぐんぐん鐘を曳上げて居た時から、俺は最う何となく悄乎して、あとへ退つて、一人でついで歩いて往つた。

處が其だ。鐘は落ちた。

何百尋か分らない谷底へ落込んで、下の湖水に沈んで了つた。俺と、俺の藝と、力との、一世一代の土産は、山の湖水へ落果てたんだ。

この後活きられるだけ生きて、出来るだけ生涯を賭けて拵へたからと言つて、二度とは出来ない

い、あの鐘が落ちたのだから、俺も鐘の後を追うて一所に落ちた。其の俺の方が、今怒うやつて、悲しい生命の、みじめな残餘を、何んだか生きて居るらしいが、肝心の鐘の方は、と言ふと、湖の中に死んでるぢやないか。な、沈んでるぢやないか。

今更悲んでも悲まないでも、死んだ鐘は、鐘も生命も、二度と歸つて来やしない。また俺にしに處で、一度沈んだ鐘の音を最う一度聞きたいと、どんなに憧れ抜いた處で、其の聞かうとする俺の生命が、怒うまで旦夕に迫つたばかりか、有る餘命さへ、悲哀、後悔、迷と狂と、暗黒と誤膠と忿怒とで縫包みの袋のやうなものでは仕様がな。迎も、俺は迎もこんな生命を長引かして居ることは出来ないのだ。此の里の仕事は、最う一度、と言つて俺を誘ひ出すわけには行かん。麓の平和は又と言つて、以前のやうに、今の俺の此の沸返るやうな胸の血汐を、宥める事は出来やせん。

一度俺は、山に、白銀嶽に登つてから以來と言ふものは、俺は無性に唯々山へ登つて、霧の海へ乗つて、天を仰いで見たくて成らん。而して、靈山の其の靈の力を借りて、最う一度、鐘を鑄るんだ、鑄て見たい!

けれども、身體が恚う弱り果てては、所詮山へは登られず、登れば途中で又谷底へ落ちる事に極つて居よう。だから死にたい、死にたいのだ。生きて居るなら、俺が若くならねばならん。



山の不思議な花の中に、新奇な果實が實らねばならん。又俺が生きるものなら、全く新しい、前代未聞の、一大靈鐘を作るために生きるんだから、心には健全なる感應の力を得、手には心髓の強さを觸れ、憧る、我が想の中には、鐵の如き不拔な自信と、なほ狂熱したる勝利者の大歡喜を感じなければならぬのだ、が何うだ。

妻 お、お、理非衛さん、其れほどまでに貴郎が渴仰して在らつしやるんだもの、貴郎が飲んで若返る、清い泉があつて、どうにかして私に見付け出すことが叶ひますなら、私の土不踏が傷だらけになつても構ひはしない、飛んで行きます。私、其の泉の水を貴郎の唇に觸れて、貴郎が元氣になるものだつたら、炎の上でも、水の底でも、私は厭ひはしませんよ。

鑄鐘師 (苦しみ、落ち入り、物狂はしく、謔言にて) おい、おい、あ、可愛い、おい、お前、戀しい……否、何の、生きたいものか、え、そ、そんな水、何處かへ遣れ、水の中に血があらあ、呀、血だ、血ばかりだ。生きたくない、俺を死なして、殺して……くれ。

僧 (再び入り来る) 何うぢやの、お内方、どんな様子でござるかの。

妻 悪いだつて、大變でございます。取留がございませぬの。全く精神が錯亂して居りますやうで、魔されてばかり居りますよ。何だか、貴僧、よくは私には分りませぬけれど、よくよく切ない、煩悶があると見えますの。私、まあ何うしたら、何うして可いんでござんせうね。(忽ち)

襟巻を搔取つて、慌しく肩に投掛け) お上人様、貴僧、何でございましたねえ、あの、不思議な女醫者があるとおつしやつてでございましたねえ。

僧 然れば、其の事ぢやて。實はなう、私も其の儀に心付いたに因つて來ましたぢやが、何でもなう、此處からなれば半里ほどある處に居るさうな。が其の何ぢやて、何とか申す名であつた。はて、さて、私とした事が、其何ぢやてなう、それ、あのそれ、村境を越す處に縦の樹がござるさうな。其の、なう、縦の林の中に住んで居るげな、名は何とか、はてなう……

妻 あ、もしや、野槌(ウィッチヘン、山姥の名)と言ふのではござんせんかい。

僧 何を滅相な、當事もないことを言はつしやる。其の、野槌と言ふ老母こそ、不埒な惡魔、殺して退けたい外道ぢやが。是までも私が宗派の門徒たち、同行の衆が、其の山祖母を降伏せうと、何程難行いたいたか、幾度もぢや、それ石礫、棒千切、火炬よ。手手／＼に得物を持つて、魔物の息の根留めうとて、山へさして登つたものぢや。今度の不慮の災難も、皆彼等つれ魔性の業と極つて居るぢやて。

いや、其處どころで、私が申す女醫者ぢやが、お、漸と今思ひ出した、はあ、然うぢや。船手(原名フィンデクレ)でござつた。此はなう、神信心で、正直者で、然る羊牧者の後家殿ぢや。處が其の、なう、羊牧者ぢやつた夫が、門外不出に秘めて居た藥の名法、調合方を傳へた



で、後家殿が相傳ぢや。沙汰を聞けば四百四病治らぬ事はないさうな。適れ名醫ぢや。お内方、すれば、其の船手を呼びに往かつしやるのぢや。なう。

妻 え、参りませうとも。

僧 早速にお出掛かの。

山姫 (苺を携へ、小き娘の装して、唯何となく入り来る。)

妻 おや、可愛い娘さんが。あのお娘、誰? お前さん、何か用かい。

僧 あの娘は。あ、是は、隣村の乃花〔原名アンナ〕ぢやな。何、お内方、其の娘なら物を問ふのは無駄でござるよ。啞ぢや、此娘は、可哀相に、苺を賣りに来たさうぢや、好い娘ぢやが、なう。

妻 まあ、此方へお入り、娘さん。よく来たのね。然う、丁ど好い、お前さんに頼があるよ。まあ、此方へ来て見ておくれ。あれねえ、あの方は病氣なんだから、今に若し目が覺めた時、何かお言ひなすつたら、お前好い娘だから御用を聞いて上げておくれでないか、え? 私の言つたこと、解つて、……

ぢやあね、私一寸一走り、船手さんの許へ駈出して往つて来るよ、可いかい。

いや、いや、餘り近い道と云ふではなし、私や往つては居られない。あ、然う、お隣の女

房さんに、然うだ、頼んで往つて貰はう、然うしよう。ぢやまたね、私、直ぐ歸つて来ますよ。私、何の因果だらう。何うしてこんな悲い思ひをするんだらうねえ。(玉木出て行く。)

僧 これよ、暫時此處に立つて居れよ。待て、腰掛けた方が宜さうぢやの。誰からなりと、物を頼まれた時は、なう、ちやつと其の用を足して進せるものぢや、伶俐ぢやの、お、可し、可し。

其のやうに他人のために、忠實に仕事をしようなら、屹と、神様がお報い下さる。いや、時に此方、多時私が見なんだうちに、何と見違へるやうに大人になつたものではないか。柔順にさつしやれ、信心の深い、好い嬢様になるのぢやぞ。それ見さつしやい。人並勝れた別嬪に成つたのも、他ならぬ神様のお情ぢや。はて、其にしても變つた、變れば變るものよなう。こりや早や舊のあまつ子の乃花で無うて、頓とこれ御伽話の乙姫様のやうな容子ぢや。一足飛びに花盛りの姫になつた。夢にも思はぬ事ぢやなう——したり、忘れた。それ、あの方の額を冷して上げるのぢや、解つたかの、熱が高いのぢやからなう。(と理非衛に向ひ)

お、ん神よ。理非衛の煩。本復せさせたび給へ。(僧去る。)

山姫 (其の時まで、淑ましかかに、卑下して居たるが、立處に様子變りて、活々と小取廻しに) 灰の中の火玉さん、



ばちく鳴れ鳴れ、私の呼吸で、  
眞赤な風のお友達、

吹いて出よ、吹いて出よ、

私もお前とおんなじに、

邪宗の中から生れた子供よ。

熟り、熟り、炊げ。

湯氣吹け、唄へな。

(竈の火、爇と起る。)

光つた、光つた、鍋の底光つた。

蓋は可いかえ、重いかえ。

中のお粥様煮えますか。

煮えて、溢れて、湯になつて、

早くお甘い粥になれ。

熟り、熟り、炊げ。

湯氣吹け、唄へな。

(口吟みつ、姫、鍋の蓋を取り、中なる粥を試みつ、)

新しい、軟かな、春の草さん、若草さん、

お前をお粥に入れるぞえ、

甘くなれ、熱くなれ、強くなれ。

是を食べた人強くなる。

熟り、熟り、炊げ。

湯氣吹け、唄へな。

まあ、燕膏を入れませう。水が要る。あら、桶に何にもない。吸んで来ようか、まあ、窓から先へ明けて。はい、明きました、結構々々。

お、明日は風らしい、屹とよ。黒雲の長い鯨。あれが頂に浮いて居るもの。明日になると、裂けて、寸断れて、氣狂のやうに飛び廻る。

椗の木の森、谷の岬、人間の居る麓の里へも、風が出て、風が出て、風が出て、猪のやうに暴れて歩かう。あら、杜鵑が此處でも鳴くこと。まあ、燕も飛ぶ。中空を。ほら中空から、太陽がばつと輝いて、黄金の糸を提げて、段々、下りて来る、下りて来る。

(此の時理非衛、眼を睜き、我にもあらず姫を瞻むる。)



慥うやつて、燕を入れて、さあ、水々。吸んで来ようね。一寸おさんや。はい、はい、おほ、  
下婢は、最う〜忙しいの何のではない。彼も此も爲ることが澤山あつて、忙しい、忙しい。  
あ、火乃子さん、貴女は既う可い、お止めなさいまし。

鑄鐘師 (何とも名状すべからざるほど仰天して) 誰だ、お……前は、お前……何だい。

山姫 (猶豫はず聲に應じて、勢よく) 私? 今日。朗「ラウテンデライン」よ。

鑄鐘師 朗? 聞いたことのない名だ、が何處か見たやうな、何處だつたらう。

山姫 山奥で、高い處、上の、あの、高い處。

鑄鐘師 然う、然うだつた、熱で倒れた時だつた。

お、お、夢でお目にかつた。然うだ、然うすると、はてな、私は又今慥うやつて、夢を  
見て居るんかな。人間と言ふものは、時々不思議な夢を見るものだが、餘りと言へば、希有だ  
ぞ、是は。

確か此處は、私の住居でございます、で、ございますな。然うだ、其處に現に、然うやつて私  
の家の、竈の下で火が燃えて居るんだから。

私は又、私の此の寢床の上に死にかつて居るんだし、慥う、慥うすりや私の家の窓を捕へた  
處だし、外には燕が飛んで居る。庭には、鶯が枝から枝。や、接骨木や素馨の花が芬と匂ふ。

凡て其の他、何も彼も、微細な點に至るまで、私の此の目に映つて見える。現に此の、蒲團の  
織縞、絲、お、絲の結目まで私は明に知つて居る、それで居て夢を見て居る、夢とは可訝  
しい。

山姫 夢を見て在らつしやるつて、何故?

鑄鐘師 (歡喜に堪へざるもの如く) 何故と言つて、現に夢を見て居る處ではありませんか。

山姫 可厭な、そんなに貴郎、確で居て。

鑄鐘師 成程、否や、成程、否や。時に今、私はどんな事を言ひましたか。あ、覺めるな、此  
夢、何時までも覺めないやうに……お嬢さん、貴女、氣が確、とお問ひなさいましたか。否、  
氣は確だとおつしやいましたか。構ひません、何でも構はん。夢だらうが、是が現だらうが、  
唯此の有るがまゝの工合が可い。結構だ。其の通りに、私は感じ、其の通りに、見て居る。貴  
女が在らつしやること、貴女が生きて在らつしやるのを、慥うして見て居ります。其の、貴女  
が、私の心の内に入つて在らつしやるのであらうと、身體の外に出ておいでなるのであらう  
と、また氣の迷で、幻に、貴女の姿が宙に浮いて居るのであらうと、最うそんな事は懸念しな  
い。何が何だつて、私が貴女に焦れて居るのが、爲に輕くも重くもならない。何にしる、一寸  
も他へ行かないで、丁と此處に居て下さるやうに。



山姫 はい、私、貴郎の言ふ通りにしますよ、何時までも、此處に。

鑄鐘師 安心ならない、まだどうも矢張夢のやうだ。

山姫 其ではね、其ではね、さあ、能くお見なさいよう。私、私の小さな脚を、上へね、一寸上げました。ほら、私の紅い踵が、ちらりと、見えて？ 見えました。

さ、茲に胡桃の實が轉々一個。ほら、これを、私が持つ、持った、あの、親指と、人指指との間に挟んで、さあ、貴郎此處よ、今よ、踵で踏みますよ。くわつ！ ほら／＼音が。ね二ツに裂けてね。解つて？ 丁と。此でも夢？

鑄鐘師 其が夢かも解らんなあ。

山姫 あれ、ではね、其では慙うしませう。もつと／＼もつと能く氣をつけて貴郎お見なさいよ。さあ、今、ね、私、貴郎の、傍へ来て、貴郎の、寢床に腰を掛けて、ね、私が今、今の胡桃を食べて居ませう。お、お甘い。ほら、ほら、上つた、私が此處へ上つたから、寢床が狭くなつたわね、ね、狭いわね。窮屈におなりかい。

鑄鐘師 否、窮屈、そんなことがありますものか。が、しかし貴女は何處から來ました。御身分は。どんな方が然う言つて、貴女を此處へお遣はしになりました。まあ、何うぞ其を聞かして下さい。此の今、私は、苦しみつゞけに苦しみ苦しみ、段々死ぬ方へ近づいて、一分の間も死

ぬのを待つて居ります。其の私の傍へ、おいでになつて、貴女は何うなさらうと言ふのかな。

山姫 よく其の事を聞いてくれたわね。私は嬉しい。でも私は、何うして生れたか分らないし、何處へ行くのか、何うするのか、それも些とも知らないの。唯、私のお姥さんが、苔と芝草の中から私を拾つて、而して、あの、雌鹿のお乳で育てたつて、其だけツカ知りません。森中だの、草の上だの、苔だの、山だの、其が私の生故郷。

山では風が吹くわねえ、唸るやら、吠えるやら、山猫のやうに鳴くわねえ、風が、どう／＼と吹くわねえ、風が。其の時の私、面白さ、面白さ。空を廻つて踊つて歩いて、わつと言つたり、はつと云うたり、大な聲で笑ふのが、其方此方の山彦に響く。と、池の精や、森の主や、苔男や、水女が、皆一緒にアハアハ笑つて、巖も裂けさうな騒ぎをする。

私は意地悪よ、せつかちよ。腹が立つと、引掻いたり、噛みついたり、其は酷いわ。それだから、私を憤らしては大變なの。大變だつて、それだつて、一人そつとして置いたつて、其でも矢張不可ません。私は機嫌買ひよ、氣むらものよ、私の帽子が私の頭に、其の時々で、いろいろな形で載つかるやうに、其の日、其の時の出來心で、憤れば、怒るし、笑へば、笑ふ。

だけれども、其だけれども、私、貴郎が大好き……なの。貴郎には嚙附かない、機嫌を悪くするやうな事は屹とない。おとなしくして言ふこと肯きます、今のやうに此處においで、と云ふ



んなら、然うします。

けれどもね、それより貴郎、私と一所に、山の上へ入らつしやい。其の方がどんなに可からう。まあ、入らして御覽なさい。一生、一生懸命に、私、貴郎のお世話をお願いします。貴郎にならば、祕密の山に秘してある、金剛石、紅玉、黄玉、翡翠玉、紫水晶、皆な見せてあげませう。而して、あの私にいひつけること何でもします。

私は不作法で、強情で、お怠慢さんで、ぴんしやんで、意地悪のいけすだけれど、だけれど、ねえ、貴郎だけは、其のお腹に、思つて在らつしやるとんな事も、直ぐに丁と、貴郎の其の睫毛で悟つて、見て取つて、未だ口に出して言はない前に、見て居る内に御用をします。其からあの、お姥さんの然う言ふには……

鑄鐘師 あ、お嬢さん、お姥さんとおつしやるのは。

山姫 お姥さん、其は矢張、お姥さんよ。

鑄鐘師 矢張、年寄の、はあ。

山姫 貴郎お姥さんを知らないの。

鑄鐘師 私は、たかが人間で、貴女方の事には盲目も同然なものでございます。

山姫 やがて、貴郎は、お姥さんに逢ふ事になりますよ。まあ、其のお姥さんが言ふのには、誰

の目でも、私が一度接吻すると、人の其の目は、山の上、天の天の遠くまで、見えるやうになりますつて。

鑄鐘師 私に其をお恵み下さい。

山姫 静として在らつしやるかい？

鑄鐘師 何うぞ、何うぞ一度其の接吻を……

山姫 (此の時、理非衛の目に接吻す) ニツの目や、御覽な！ さあ開けて、お前たち。

鑄鐘師 心も爽ぐ、お姫様、死に懸つた私の處へ、御來降あつた貴女は、天上界の遠い引遠い引春の中から取られた花の、一枝でおいでなさる。又芽みたての新しい、生きくした、貝割葉でおいでなさる。おいでなさいます。残念だ、唯た一度、此の世に生れて出た私が、生れた日、其の時の少い清い私だつたら、憚多いが、此、此の胸に、しつかりとお抱き申すものを——や見えなかつた目が、お、今、光明が来て包む。さては貴女の御領地が臆氣ながら認められるものと見えた。あれ、次第に見えて来る。唯た今、貴女の露を飲んだと思ふと、段々に明くなつた。是は、まあ、まあ、是は、謎見たやうな不思議な姫様、私は何か、見えるのが分つて來ます。

山姫 然う、では見たいほどお見なさいよ。



鑄鐘師 お、黄金なす貴女のお髪は、何と云ふ美しい、何たる莊嚴。是が夢なら夢でよし、夢

の中の、最上美しい夢の姫君。貴女と一所になつたと思ふと、私が死出三途の川を渡りかけた、其の波舟が、立處に國王の樓船に變つた。今紫の帆を柔に、虹の映つた航路を漕いで、それ私を東の方へ、旭日の方へ載せて行く。恚う見渡せば、舊來た西の、漕ぎ進んだ船の船脚、南洋の波を切つて、雪を欺く白泡立てて、金剛石をさながら撒く。何と貴女も、貴女にも然う思はれませう。

貴女と私は、黄金と、絹布の中に手枕して、幸福な、迷はぬ心を胸に懷いて、遙か彼方の、吾等兩人と隔つた、彼岸を眺める、此の、面白さ。吾々二人と間を置いた、天の一方に有るものが、貴女にも見えませう。あれ、幽に紫に雲のやうに、幽に緑の島一つ。其の島から白樺の樹が枝を垂れて、浮きつ、沈みつ、眞蒼な、光る波を浴びて居る。時しもあれ春を壽く歌人の歡呼の聲が、船唄のやうにそれ、あれが貴女にも聞えますか。

山姫 あ、能く聞える、聞えますよ。

鑄鐘師 (がつくりとして又落入る) もう可い、何うともしろ、覺悟した。これで目を醒ましたら、誰かが来て、「私と一緒に往きませう」と言ふのだらう。え、光が消えた、又こゝは氷のやうだ。何だか見物して居た男は、又しても按摩になつた。けれども、貴女、貴女だけは、見

えるのだ……其から……

山姫 (呪禁の呪を念じ、術を行ふ。)

眠れ、名人、名譽の君。

其の目覺れば、早やわがものよ。

君の望みの強き思想は、

我が薬にて、其の身に屬く。

(竈の前にて働きつゝ、物語るが如く、)

われら思へば、思ひの儘に、山の寶は光明となれど、

麓の里にては、光りはせじな。

犬におなじき麓の人々、

吠ゆるも怒るも何効あらむ。

尊き強き藝術の、前に出づれば皆逃げ走る。

唯われらのみ世の名人に、

喜び勇みてみやづかへせむ。

われらを自由にする人は、



又われらをも支配すなれば。

(理非衛に向ひて、科して)

一め、二め、三やかし！ いざ、生きかはりぬ。

うまれかはりぬ、君が身は自由になりぬ。

鑄鐘師 何うしたんだ、何う眠つて、何處へ何う醒めた。これは、手が黄金に染まつて、あゝ、旭が窓から入つて来る。其のせるだ。おゝ、おゝ、朝ぼらけの風の快さ。やあ、此の力、此の全身にむくく湧き出る力、胸の此の燃え立つやうな、新なる奮發心。皆これ天の心であらう。可し、再び俺が奮起つた曉には、更に生活の只中へ、我が力足踏込んで、おのれ！ 改めて發願し、努力し、希望し、奮進して、えゝ、鐘を鑄て鑄て、鑄抜いてくれう、と思ふ、思ひの、此の心。此の心は、あゝ、天の御心を、埴生理非衛に傳へ給はる前兆であらう。

妻 (衝と入り来る。)

鑄鐘師 玉木か、歸つたか。

妻 お目が、おゝ、お目が覺めましたね。

鑄鐘師 玉木だ、玉木、お前は何處へ行つて居た。

妻 (大願成就の歡喜にて) お鹽梅は。貴郎、どんな心持？

鑄鐘師 (情の激する處、我を忘れて) 宜い、大宜しだ、大宜しさ。俺は生きる、生きられるやうな氣がして来た、然うだ、確に然う思ふ。

妻 (嬉しさに我を覺えず) 良人は活きます、はい、良人は治るんでございます。あゝ、嬉しい、理非衛さん、嬉しいねえ。

妻、其の側に、眼を光らして佇む。

### 第三齣

白銀嶽の山續き、間近に雪の原展開せる崖の下に、以前硝子の製造所なりけるが、荒廢したる一宇の此の小屋。右の方、壘崖荆門を開く趣して、巖自から壁をなし、空に連る絶壁に、清水の流滾々として白絹を裂いてほとぼしり、仕掛けたる土管を通じて、大石を穿てる槽の中に、倒に落ちて且つ溢る。

左の方、巖窟に鐘乳石の簾を捲いて、幽玄なる鍛冶の仕事場、爐と、煙突と、鞴とありて、神工が鍛鍊の佛見ゆ。同じ其の奥深く、造化祕密の門を開きて、目近き大斧鑿の扉の中は、乾坤別に天ある光景、姪々たる山巔遠く連りて彼處に沼あり、此處に澤あり、樅の林又雲に入り、峰に顯る。



小屋の屋根を、煙突高く貫き出づ。

右の方間を隔てて、又尖門状をなせる岩の戸あり。

森の精 (早や小屋の前に立出で居り、戸の外に堆く積める材木の上へ、一抱へ、松の根株を、ひよい、と乗せて右瞻左瞻ながら、うそくと小屋の中に入らむとして、仔細ありげに四邊を胸す。)

池の精 (爾時、清水を湛ふる、水槽の大石の中より、先づ半身を現し、鈍き呼吸吐き、瞬きすること如例。)

池の精 くおら、くおら、此方へ入れ。山男、ぶれけけけつきす。

森の精 ほるどりほう、こりや其の處へ現れたな。

池の精 如何にも此處へ現れた、がくがく。何が、此の別荘は、松薪の烟と、煤の埃で、目も口も能う開かんが。

森の精 たうとう、時にさて、畜生等は出て失せをつたか。何とぢや。

池の精 畜生どもとは、何か、何か。

森の精 知れた事、それ、な、それ、畜生奴等ぢや。

池の精 應、其の畜生なら出て失せつる。出ずば此處にけつからう。

森の精 いや、實は其の、此の方來がけに山路で、あの土性骨に出逢うた事ぢや。

池の精 あ、うむ、あ、うむ。

森の精 鋸持つてな、斧持つて、なあ。

池の精 爾時何か吐いたか。

森の精 然れば、ほざいた。いや、吐かしたりな、何と吐かした……腐れ池の肉蝦魔が饒舌を聞けば、唯くおらつくす、くおらつくす、あッは、は、と慙う吐かした。

池の精 吐かした、おのれ、俺が聲を、くおらつくすと聞く耳を、聾の穴にしたいぞ、畜生。

森の精 まだ、おしやつた、おほせには、の、いやはや、泡沫の妖精は、なんぼう、あはれな聲を出して、べそく泣くやら、歎くやら、くわつ、くわつと吠えるぞや、と、慙う御意あつた。何と腹が立たうかの。

池の精 う、う、其の首おのれ、振切つて、くわツ呉れべい。

森の精 無理を言ふ、いや、尤な事を言ふ。はてさて、是は然うあらう、然うあらう、然うありたい。

沈

池の精 彼も是も、どう、何奴も！ 此奴も！

森の精 呪ひ殺して遣りたいな、ほう。固より活けて置く奴等でない。いや其につけ這奴、真以



て何者なれば、恠う一統に仇をしをらう？ 憎んでも餘りあるぞ。  
先づ早や、此の方ども、魔の繩張りの山中へ踏込み居つて、山を穿つ、木の根を崩す、巖を倒す、——そりや、そりや次第に増長して、鑛金を掘る、地金を焔す、熔かす、鑄掛ける……仕  
たい三昧。

第一が和主、此の方にも、ことわり一つ言ひ居らぬ。未だく其に、可哀やの、不便やの、苔  
水を搔探して、其處に巢籠る侏儒を、馬代りに虐使ふに、遠慮も會釋もする事かい。

へ、へ、魔女の中の女菩薩、天下第一美しくしい姫上めが。へ、へ、彼の畜生に、へん、フンとご  
ざつて、御前様も手前事も、咬へる處か指を頬張り、はれ、山火事ぢや、手がつけられぬ、と  
遠くへ退いて見物よ、ほう。

何と堪るか、堪へられるか、こりや、池の色男、何うしてくれる。

さあ成らぬわ、堪らぬわ、是だけで未だ事が済まぬ。姫の奴、好いた男へ心中立てに、俺が大  
切な花を盗む。

盗むは何ぢや、撫子色の水晶に、黄金に金剛石、あらゆる寶石、瑪瑙に琥珀。あ、情ない、  
打たくらわれの大金玉、此の方きよんとしてしまふ。

其の中で、夜晝なし、晝夜ない。姫と申候者は、お殿様に附切りで、くつつき通しで、彼の

其の、口を其の、口を其の、吸ふ口で、俺たちを叱るわ、ほうく。

いやはや、畜生、豪勢、草樹も靡く有様だ。古木などはばたりく。大地までが震ふぞよ、  
動くぞよ山中が。這奴が犇と打つ鐵鎚の、丁々丁々と響く毎に、谷も岩窟もぐらくと揺れ  
るわ、鳴るわ。

さて又ふいごを吹起す、牡丹芍薬鍛冶の火焰は、茫茫として雲を隔てた遠くの遠くの、俺が住  
む家の中まで、其の可厭な其の光を、ピカ／＼と投げつける。

根から葉から、先づ那奴、何事を仕出來すぢやらう、此の方一向に解らぬぢや。

池の精 ぶれけけけつきす、ぶれけけけつきす、いつかの時よ、主が彼の畜生を、打殺してくれ  
たほどなら、何事も無い、今頃は、早や骸までも腐つて退け、水の中に潰れて居らうに、残念  
とも残念だ。鐘の傍に鐘作り、こんな詰らぬ尋常事があるものか。釣鐘が、骸子の筒になつて、  
骸子を彼奴の骨で造れば可い。

森の精 したり、喝采、鍛冶屋の骨で骸子とは、打つけ、投げつけ、是は……骸子、色男出來い  
たの。

池の精 ぢやが、え、其が死にでもしたかい。のんこの山へ登り居つて、達者で、丈夫でびん  
びんものだ。業曝しな。鐵鎚の音を何と聞く、カンと應へて、俺の此の心の臓を貫くが。(泣か



ぬばかりの聲も哀に、

彼奴また姫ッ子へ御追従に、冠だわ、指輪だわ、腕飾まで作る騒ぎ。まだ其で飽足らいで、姫の、姫の、くわッ、肩、胸のあたりを、撫る、擦る、頬べたをやい、嘗めるが、やい。

森の精 これ何うした、何うしたものぢや。俺は此の山羊面に誓つて言うて聞かす、主は何うかして居るぞ、氣が變ぢや。はて、然までに氣遣ふ事は要らぬ。見て居れ、見て居れ。理非衛めの若耄祿、今こそあれ、時を措かず、汝が産んだ麓の里の小忰が事思ひ出いたら、立處に、泣面かくわ、音を出すのぢや。

扱、姫は、肉蝦魔、此方を嫌ふ、——是には蟲が納まるまい。が、能う分別して見る事よ。海の深さよ、世界の長さよ、又廣さよ。樺の樹の皮の剥げた小生白い、魔女の一女も引抱へて、煩惱を鎮めるわ。風も吹け、雨も降れ、蛙の面へ酒亞と遣つて、「土耳其の總督」見るやうに暮らして居るこそ上分別。

彼奴が姫の腰を押して、床の山へ上るまでも、けろくとしてござるは、何とぢや。

池の精 うんや、俺は、取殺す。

森の精 姫がお傍ぢや、何とする。生憎姫つ子がついてござるわ。

池の精 え、——最う謂ふな。開腹だ。喉にわんぐり喰ひつきたい、くわッ喰ひついて、くわッ

嚙切つて、……

森の精 と、言うた處で其までぢやろ。何と致いて、主の力で、あの姫が呪へよう。そりや早や出来ぬ相談よ。見やれ、森の小屋のお祖母までが、姫御の可愛さに引かされて、畜生めへ寢返つたれば、手も足も出る事ではない。なあ、祖母めが——最う怒うなつては、主が腹立聲を聞いた處で、土砂降の中の雨蛙ぢや、耳も貸さいで、奴等を庇うて守護しくさる。が、これく蝦魔、待てば山路日和と言ふ、辛抱せい、辛抱せい。

池の精 はあ、情ない。然るにても、え、おのれ等兩人、がく、がく、がく。

森の精 時刻は移るぞ、日が経つ程なら、人間は何時か一度迷の夢を覺さずには居られぬが定ぢや。

山姫 (姿は未だし、歌まづ聞ゆる。)

枝の小枝の甲蟲見れば、

すうむ、すうむ、

愛らしや、衣物はこんく紺と雪。

すうむ、すうむ。

姫現る。



あれ、あれ、珍しい、まあ、お客、お二人、今晚は、……

池の伯父さん、頼んで置いた黄金を洗つてくれたのね。あら、最う樹の株も運んである。

伯父さん、難有う。見て頂戴な、二人の伯父さん。ほら、私の持つて来たお土産。世に珍しい物ばかり。山の中を飛歩行いて、一生懸命取りました。私は大層な働きもの。ほら、水晶、ほら、金剛石、ほら、此の袋、袋には、金沙、金沙、黄金の眞砂が充滿で。あとはお悪戯さんの蜂の巣よ……暑いこと、今日は何うして暑からうね。

池の精 へ、へ、暑からう。暑い日の後には、へ、へ、暑い夜が来るものだ、へ、へ。

山姫 然うね、然う云ふこともあらうねえ、其だつて可いではないか、冷たい水がお前の領分、早く沈んでお涼みなさいな。

森の精、狂氣の如く愛で笑ふ。

池の精はものをも言はず、洵然と水に沈み去る。

山姫 池と言へば、此方で痛が昂ぶるほど、何うだらう、何時も、しねくね、愚圖つか、愚圖つか。

森の精 (なほ腹を抱へて笑ひながら) 天晴れ御會釋、姫君。

山姫 あ、私、襪の紐が、膝の處で擦れて、切られるやうにこ、が痛い。

森の精 お轉婆遊ばされるに因つてぢや。然らば緩めて進ぜよう。どりや。

山姫 え、御深切は嬉しい、が——可厭な事、森の伯父。さあ、最うお歸りお歸り、お前は、悪い臭と蠅を澤山、吃と連れてお出でだもの。蠅なぞは、雲の中からわざ／＼附着いて來るのだわね。

森の精 處かの、處が俺に言はせれば、蝶々より蠅の方が、なんぼうに難有かる、可愛かる。蝶々か、蝶々か、へむ、其の蝶々と云ふ奴こそ、粉だらけ、塵だらけの、粘々した羽を擴げて、和御にしなだれ纏れるわホ、和御が唇の中、髪の中へ、へらくと飛込むばかりか、夜が來れば、其の、其の、胸に、臀に、絡みつく、不埒とも早や、ふしだらとも早や!

山姫 (微笑み) 結構な事ではないの? え、伯父さん。

森の精 へいら、や、其は措いて、俺が今ひよつとした事思ひついた。其れ、何よ、あの車の輪よ。あれは先づ何處から出て來たものと思ふ。

山姫 其を私に聞くのかい、悪ものの、徒ものの、お前の方が、能く知つて居ようのにね。

森の精 然れば其の事、此の方、あの時、鐘を運ぶ車の輪の、打破しをしまいなら、はッあ、貴い鷹見るやうな、お立派な殿様は、和御の係蹄には陥らぬ道理ぢや。

此處で、考へれば、の、不思議な縁の月下氷翁は、虞修羅で候此の伯父ぢや。